

胸有三千活馬騾<sup>①</sup>

曇芳<sup>②</sup>

希有瑞花時一現。西天此土競相傳。遺熏餘烈今猶在。不混于叢萬卉邊<sup>③</sup>。

春屋<sup>④</sup>

百花本是一枝花。遂見衆芳聯我家。墓地開門出和氣。韶光從此徧河沙<sup>⑤</sup>。

無得<sup>⑥</sup>

道徳慈威集大成。從門入者匪家珍。何中蘊藉盡拋卻。空手垂來賑濟人<sup>⑦</sup>。

海岸<sup>⑧</sup>

渺渺瀾瀾納百川。煙波萬里水連天。古帆掛得底時節。到此方知有那邊<sup>⑨</sup>。

古首座南遊有年而歸國寓居阪方以三偈見寄因和其韻

は故事あり、略之。

①曇芳。周應禪師は國師に嗣ぐ、圓覺。建長に住す、應永年中寂す。

②瑞花。優曇華のこと。

③春屋。妙葩禪師、國師に嗣ぐ、普明國師と特賜す。相國の二世。

④韶光。春色を云ふ。

⑤從門入者。一に胸襟より流出し將ち來れじや、故事あり、略之。

⑥無得。水の噴く速かなるの事。

⑦古首座。靈岳宗古禪師、雪村友梅に嗣ぐ、嘗て天龍に在りて藏主となる、南禪に出世す、入元有年。

⑧阪方。諏訪なり、信州の湖。口皮禪。趙州の禪は只口唇皮子上にありと、大慧普說に出づ。

⑨龍湖。五燈會元六、龍湖普聞禪師は唐の傳家の太子なり、

頃刻相逢如百年。寒溫舒盡口皮禪。莫言恩智異區域。震旦扶桑無兩天。徧參海外究幽深。畫錦鮮輝耀祖林。續得龍湖千載闕。靈神廟裏振雷音。這回換卻舊時顏。不識何中幾海山。名翼高飛有二時。在待看朝旆入雲間。

天龍寺十境 普明閣

廣大慈光照世間。善財堂面隔重關。眼皮橫蓋虛空界。彈指門開匹似間。絕唱絕

灘聲激出廣長舌。莫謂深談在二口邊。日夜流轉八萬偈。灼然一字未嘗宜。靈庇廟 精藍分地建靈宮。專冀神風助祖風。

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄 下

都武城外にありて苦行するものあり、居る、師の至るを見て、乃ち曰く、上人當に此を興すべしと、長揖して去る、師居ること十餘年、一日一老人あり、拜謁す、師問ふ、何の處に在住する、老人曰く、此の山に住す、然も人に非ず、龍なり云云、即ち窟下に穴して泉を爲して曰く、此の泉他日多衆の設を爲すと、今龍湖と號す。

①靈神。諏訪明神。②十境。年譜に、貞和二年春二月、龜山の十境を賦す、以て教外別行の場たることを表す、師年七十二。③普明。天龍の山門、普明閣と稱す、製音大士を安奉す、製音普門品の無垢清淨光云云、普明照世間にとる。④彈指門開。華嚴の善財童子の彌勒に到りて、樓閣に詣りハ

彈指して聲を出し、其の門即ち開く故事あり。⑤匹似間。かんにひとしき。匹似は等しきなり、なに／＼の如しの意なり。⑥絶唱絶。洪川也、大きい川。⑦八萬偈。八萬四千、諸法門、此を以て諸佛は衆生を度するのである、蘇東坡の「溪聲廣長舌。山色清淨身。夜來八萬四千偈。他日如何學似人。」の偈をみて、この偈の趣意に似てゐる。

⑧靈庇廟。八幡の神祠なり、鎮守堂。⑨天真正直。神は正直の首にやどるの意。⑩寶源池。集瑞軒の前にあり、方丈書院の前。⑪月落波心。支那の聚巖眞禪師は慈明圓の法嗣なるが、如何なるか、是れ佛法の大意」と圓に曰はれて、眞は「雲の嶺上に

莫怪庭前松屈曲。天真正直在其中。

曹源池

曹源不涸直臻今。一滴流通廣且深。曲岸回塘休著眼。夜闌有月落波心。

拈華嶺

靈山拈起一枝筇。分作千株在此峯。只見聯芳至今日。不知劫外幾春風。

度月橋

虹勢截流橫兩岸。一條活路透清波。度驢度馬未爲足。玉兔三更推轂過。

三級巖

分危布險作三重。水激雲遮路不通。無限金鱗遺點額。誰知徧界起腥風。

萬松洞

萬株松下一乾坤。翠靄氛氳鎖洞門。仙境由來屬仙客。

生ずる無ければ月の波心に落つるありとやつた、明目を瞶して喝して曰く、「頭白く齒落にして猶ほ清濁の見解を作す、如何んが生死を脱離せん云云、」明覺を震つて曰く、「雲の嶺上に生ずる無ければ月の波心に落つるあり、眞言下に於て大悟す。

拈華嶺。嵐山なり、庭田家の記に云く、後宇多院詔あり、櫻樹千本を嵐山に栽み、藏王権現の祠を創建し、和州芳野の境致に象る、建治三年暮春下旬、嵐山に行幸し、藏王遷座の儀を修し給ふ云云。  
靈山。迦葉が佛の金波羅華を拈するを見て、破顔微笑の緣。  
度月橋。洪川に架す。  
度驢。驢馬もわたせば、うまもわたす。  
三級巖。嵐山の瀑泉、となぜを萬門の三級に擬す。

莫言此地匪桃源。

龍門亭

不借巨靈分破拳。兩山放出一洪川。三更夜半無來客。數片歸雲宿檻前。

龜頂塔

松生背上一綠毛。長頂戴浮圖萬劫祥。戶牖恢開不藏六。重重法界目前彰。

題三塔

雲居古語協眞風。三塔該收萬塔功。落落團團無縫罅。龍蛇混雜在其中。

虎谿

山險洞深人不測。菴菟作隊圖威勢。三賢攜手過橋後。錯聽水聲爲笑聲。

投機頌

多年掘地覓青天。添得重重碾磨物。

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄 下

①萬松洞。龜山の上に在り。  
②氛氳。氣のさかんなること、杜詩に佳氣日に氛氳など。  
③龍門亭。龜山の南崖に在り、三級巖に對す。貞和二年三月十七日、光嚴上皇御幸、山に入りて法を聽きたまふの後、國師と此の亭に上りて嵐山の花を賞せらるの事、臨幸私記に見ゆと事苑にのせたり。  
④巨靈。巨靈といふ大力無雙の男がむかしみて、太華山と首陽山とを切開して、二つにわけたと云ふ神話。そこに龍門と云ふ河がある、それを黃河に流れるやうにもした。  
⑤龜頂塔。龜山にあり。  
⑥藏六。龜の六を藏すより、人の六根を藏すより、魔便りを得ずといふにたとふ。  
⑦重々法界。華嚴の一一塵中に法界を見るといふにとる。  
⑧三塔。年譜に、貞和二年三月十八日、鼓を鳴らし、退を告げて東庵に居す、漏して雲居と曰ふ、蓋し支那の雲居禪師の三塔を作るに倣ふのみ、竺仙仙禪師等の碩徳、昔この頌を和して一巨軸を成す、國師親しく序を製し、東陵興禪師跋語並に和偈ありと。  
⑨語。古倒切、音こ、教なり。  
⑩落落。層がだんだんに重なつてゐること。  
⑪團々。月のまるきが如く、影がまる／＼としてゐるの義。  
⑫虎谿。靈文藏主、國師に嗣ぐ。投機。見性するときの偶、年譜に、師三十一歳の嘉元三年五月末日。  
⑬蓬瀛。蓬萊。方丈。瀛洲の三神山、秦始皇時代に齊の徐市が上書するに始まる。  
⑭常在光院。尊氏建立して、國師を閉山とす。

一夜暗中颯磔等閒擊碎虛空骨。

將軍府有山林泉流之樂一以偶美之。

蓬瀛勝槩聚中石峙流洄與不窮好箇優遊嬉戲處  
曹溪正脈自流通

題 常在光院 (上下兩庵今作一院)

山巒水石獻奇珍勝地方知屬傑人下界上方同一境  
妙莊嚴外更無塵

臨川無極和尚雪韻

人人只見不香花未會紛飛落在何上等禪和坐堂裏  
識神依舊屬陀那

嵩山和尚訪西山庵居

幾片白雲橫谷口不遮道友扣扉來從前惡跡莫由晦  
把手徜徉三兩回

題 友雲庵壁

洞僻巖深晝若曠一間竹屋半容雲單丁自有單丁樂

出づ、下方上方無數の世界云

① 妙莊嚴。妙莊嚴の城と云ふこと、大圓覺の境界。

② 不香花。唐人、雪を云ふ。

③ 陀那。第八識、此に執持と云ふ、此は凡聖に通ず。

④ 友雲庵。三會院の假山水の中に在り。

⑤ 一間。五燈會元十七に、千峰頂上一間屋。老僧半間雲半間と云ふ古句あり。

⑥ 單丁。單は獨(ひとり)なり、丁は畦丁(はたけつくり)、園丁(はなつくり)、山丁(やまど)の丁也、單は自己、自己の丁と爲るなり。

⑦ 聖賢群。維摩の觀衆生品の、此の室釋迦牟尼佛云云、是を八未曾有難得の法と爲すに与る。

⑧ 彼此。四堂と國師と。

⑨ 同風千里。君子は千里同風、

不羨聖賢來作羣

有僧掘地得佛舍利一因索三師偈

地中湧出赴機緣一顆圓光含大千難測難量奇特事  
明明只在二頭邊

璞翁西堂見寄韻

彼此隨緣卜別山同風千里固爲難楚雲越水無遮障  
日夜相逢話老殘

放牛

鞭繩拋卻任天真欄外遊遊不顧人將謂無由討蹤跡  
塵沙刹界現全身

清溪

攪不渾時無淺深水天得一碧沈沈要窮真箇曹源脈  
休向中流兩岸尋

問叟

凡聖行儀都不干騰騰任運似癡頑道般活計無二人識

世の太平なること。

③ 放牛。光林禪師、具闍提、嗣ぐ、法親、建長、建仁、天龍、南禪に住す。

④ 清溪。通徹禪師、國師に嗣ぐ、元國に游方すること多年、淨居、臨川、天龍、南禪に住す、後ち丹の常照に居す、第二世となる、至徳年中寂す、大井河に水葬す。

⑤ 中流。賢聖を云ふ、維摩の見阿闍佛品に、此岸ならず彼岸ならず、中流ならずして、而も衆生を化すと、嚴注に此岸は生死、彼岸は涅槃、中流は賢聖也と。

⑥ 問叟。問叟、問禪師、國師に嗣ぐ、臨川に住す。

⑦ 古源。都元禪師、雙峰源に嗣ぐ、元に入り、諸老に參見す、真和の間、大聖、等持等に住す。

⑧ 臥翁。妙誠禪師、國師の法嗣、

一箇老翁天地間。

古源

曹溪一滴先威音。流遠方知出處深。可惜今時未還客。外求竺土大仙心。

默翁

默翁求我默翁頌。自語相違笑倒人。不二門中重檢點。維摩也是棒來唇。

中巖

不墮兩邊一呈嶮峻。更無差路與人行。空生未解談般若。幸有三孤猿叫二月明。

玉巖 (鐵倉殿)

峻機光潔非瑠瑤。八面玲瓏絕點埃。好是現成般若體。諸天日夜雨花來。

瑞山 (三條副將軍)

艸木呈奇藉氣浮。祥雲靉靄覆峰頭。千巒萬阜推高德。

那箇蒼生不受麻。

送榮首座赴長保

親炙多年緣自熟。一朝告別下西州。住山秘訣休求覓。鐵斧元來在石頭。

平山

坦夷寬廣絕高低。七凸八凹歸一齊。最頂不知在何處。元來無路與人躋。

方外

一片閒田無四至。中心樹子也難看。回頭南北東西表。始信從前被眼瞞。

鐵舟

徹頭徹尾自渾鋼。不入洪爐泛大洋。盡謂尋常船舫類。是非海裏錯商量。

絕照

明鏡和臺打破來。瞎瞞眼裏不生埃。暗昏昏地家風別。

補陀。妙續。臨川に住す。

中巖。中本禪師、國師に嗣ぐ。

孤猿。永明壽禪師の孤猿叫落中巖月の偈。

玉巖。鐵倉管領基氏の法號、足利尊氏の子、義隆同母弟なり、卒して瑞泉寺に葬る。

瑞山。足利義隆。

蒼生。人民を云ふ。

親炙。親近して之に薫炙するなり。

平山。善均禪師、國師に嗣ぐ、天龍及び臨川に住す。

中心樹子。支沙備禪師云く云、この條、禪林類聚十九に出づ、之を略す。此の事を喰へていふの語なり。

鐵舟。德濟禪師、國師に嗣ぐ、元に入り名山に遊履す、阿波の補陀、京の萬壽、播磨の瑞光に住す、師元に在るの日、元帝その徳を崇んで圓通大師の號を賜ふ。

絶照。名は智光。

明鏡。明鏡も亦臺あらすの六觀大師の偈。

適庵。法順首座、國師に嗣ぐ、龜山記室に居して、乘拂後第一座に遷る。

自若。妄動なきを云ふ。

眉峰。古詩に、登高寬三眼界。望遠展眉峰。

傀儡。てくのぼう、木人能く歌舞すなどいふ。

鬪鋒爭。兩者相争ふ間に、他の者にその利を獲らるゝを云ふ。

圓寬。圓庵は此には覺と云ふ。羅社は此には王と云ふ、兄及び妹皆地獄の主となる、兄は男子を治し、妹は女の事を理す、故に雙王といふ。

考騎。罪人を窮理する也。

放馬華山。書經の武成篇に、王商より来る、豊に至る、乃ち武を僭せ、文を脩め、馬を

一ニ任燈籠笑口開一。

適庵

主人自若展眉峰一椽柱樞梁呈笑容一更有二一般和悅處。

半憲明月半憲風。

因亂書懷

世途今古幾窮通。萬否千成歸一空。傀儡棚頭論彼我。蝸牛角上鬪英雄。須知鵝蚌相持處。終墮閻魔考鞠中。放馬華山待何日。不須如頓轡覺城東。

華山の陽に歸し、牛を桃林の野に放つ、天下に復た兵を用ひざることを示す。  
頓、すてる。  
覺城東、唐縣には兩城。

國譯夢憲正覺心宗普濟國師語錄下終

跋

我が宗に語句なく、亦法の人に與ふるなし。

佛國道く、「漏返少からずし」と。

夢憲國師、夢中驚覺して、起き來つて便ち見る。三世の諸佛夢なきに夢を説き、六代の祖師夢なきに夢を説き、天下の老和尚も夢なきに夢を説く。還つて夢憲の落處を知る麼。一國の師、三朝の敬する所、南禪初步、淨智後に遷る。圓覺重ねて臨み、天龍再び住す。直に得たり。炎天白雪を飛ばし、陸地に紅蓮を産す。樹頭驚起す雙々たる魚、石上迸出す長々たる笋。斯くの如きの機用、豈に測量すべけんや。設使疎山石頭も、也た須らく退身三步して始めて得べし。

至正二十六年八月

前嘉興天寧 楚石道人梵琦謹跋

①我宗無語句。年譜に、嘉元元年師二十九歳、氣を以て自貢ふ、一日非を知りて一山に詣し吞ふて曰く、某甲已事未だ明めず、請ふ師指示せよ、山云く、我宗に語句なし、亦一法の人に與ふるなしと云云。  
②三朝、序文に見ゆ。  
③疎山、光仁禪師、洞山价禪師に嗣ぐ。  
④石頭、潘暹禪師、曹原行思に嗣ぐ、この疎山、石頭の二師の名に因んで、夢憲國師は諱を疎石と名けらる、年譜に、永仁元年師年十九歳、一夕恍然として人あり、師を引いて疎山・石頭に到らしむ云云の因縁により、服を易へて夢禪す、自ら疎石を名とし、夢憲を號とすとあり。  
⑤至正。大元順宗年號、日本の南朝正平廿一年、北朝の貞治五年に當る、國師寂後十五年なり。  
⑥楚石。梵琦禪師は原雙鏡に嗣ぐ、大憲六世なり。  
この脚注はこの語錄の事苑に専ら依りて起稿す、中に就いて疎曰くとあるは、大觀文殊禪師(東嶽圓慈に嗣ぐ、天保年中の人)の諱にして、その付號なり。(譯注者法常皇寺沙門宮種祖泰白)

先國師、語要、嘗て世に傳ふること許さず、故に吾が徒之を藏して未だ敢て違囑せず矣。然るに藤原公徳更居士、乃し英烈の丈夫にして、既に身門弟子と爲り、其の機鋒と存する所とは、禪會に預る古の名士輩と雖も、未だ必ず過ぎず。輒ち語本を取つて以て梓に命じ、且つ誠しむる所に依つて、亦吾が徒をして之を議せしめすんばあらず。吾れ則ち謂ふ、先師之を見れば、尙ほ退めず焉。諸方亦必ず爲めに之を勘驗せん。但妙葩、勉めて紀に従つて歲月を以てすと云ふ。

貞治之四年歲在乙巳五月二十二日

天龍住山門人春屋妙葩謹書

# 國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄附錄

## 西山夜話

師、南禪に住せしとき、元翁和尚(佛德)師に謂うて云く、「和尚、叢林を出で、より來、二十餘年、其の間動止定まらず、既に十餘箇處に追ふ、我れ心中に以謂らく、此れ豈身を勞し道を障ふるの因縁に非ずやと、近ごろ像法決疑經を見るに、佛の言はく、「比丘の止住、三月に過ぐることを莫れ、若し人誘して、此の比丘動止定まらずといはゞ、必ず當に泥犁に墮すべし」と。此れより僻情已に破れ了んぬ」と。師の曰く、「我れ必ずしも其の佛制を守るが故に爾るにあらず、直に大圓覺を以て我が伽藍と爲す、東に去り西に留る、未だ曾て暫くも其の中を離れず。世多年一處に止住するものあり、未だ必ずしも一牀の上に坐せず、ある時は東司に趨り、ある時は後架に到り、ある時は庭前に徘徊し、ある時は山頂に眺望す、此れ豈動止不定なるに非ずや。然も其の動止未だ嘗てより此の一處を離れざるが故に、我が身別處に在り

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄 附錄

① 出叢林。しゆぎやうをすましてなり。  
 ② 像法決疑經。住處に執著し、俗人に如似し己が舍宅を離つて、時に依りて三月に一たび移ること能はざれ云云。  
 ③ 泥犁。地獄なり。  
 ④ 東司。又は登司、郭登に同じ、圓の神なり、登は主也、今人誤りて東司となす。  
 ⑤ 後架。架は欄也、東司所用の器具を置くところ、不淨を洗ひその他の事をなすところ。

と謂はず、若し其の有限の情を轉じて、以て無邊の境に遊ばゞ則ち何の怪しむことか有らん乎。」  
 僧ありて、師に謂ふ、「和尚は是れ臨濟下の兒孫、而して本分を以て人を接せず、常に經典を講ずることは何ぞや。師の曰く、「夫れ善知識は、須らくこれ解行相應して始めて得べし、縦ひ相應すと雖も、若し也た時機を得ずんば、則ち世に益なし矣。余羽毛未だ具はらず、力量未だ充たず、其の機を得ず、其の時に逢はず、寧ろ我を怪しみて得ん乎。今時己眼未だ明かならず、妙用未だ備はらず、只識情を以て、古人の標格を學得して、一揆一擲、轉轉轉地、乃ち宗風を擧揚すと謂へり。看來れば只是れ一時の風流、古人の體裁を學ぶことは則ち易く、古人の利益を得ることは則ち難し。若し夫れ其の利益なきことを顧みずして、徒に其の體裁を得るに誇るものは、固に吾が期する所に非ざる耳。」僧の云く、「若し爾らば、則ち和尚胡爲れぞ出でて法社を主り、録を談じ經を講ずる耶。」師の曰く、「惡業を造るものは、寧ろ泥梨に墮せんが爲ならん乎、而も泥梨に墮することは、只業力の爲に牽るゝが故に爾り。吾れ未だ肯て長老の名を求めず、而も出でて法社を主ることは、只前生片善の爲に驅らる故なり。然れども吾れ亦必ずしも門を閉ぢて自ら活することを圖らず、且行くに因つて、臂を掉はんことを要す。是を以て經を講じ録を談じて、或は未だ因果を知らざる者をして、昇沈あることを知らしめ、或は未だ大乘を解せざる者をして、立諱あることを解せしめ、或は未だ祖宗を信せざるものをして、此

●掉臂。孟子盡心章に故事あり。路に不平を見て、刀を抜いて相助くるの的のこゝろと事苑にあり。

の事あることを信せしむる而已。古人或は、路口に在つて、茶湯を旅客に施す、斯れ乃ち衆縁を結ぶなり、吾も亦是くの如し、只佛祖の言教を談じて、以て衆縁を結ぶ耳。」僧の云く、「今時の僧俗、亦禪を信するもの多し、何ぞ其の機を得ずと言はん乎。」師の曰く、「世に禪機なしとは道はず、只吾と針芥相投するの機なき耳。」僧の曰く、「鈍根の人縦ひ悟らずと雖も、直に本分を以て之を接せば、則ち結縁の分、亦以て深かるべし。何の故ぞ之を弃つる乎。」師の曰く、「道ふことを見ずや、千鈞の弩は、驢鼠の爲に機を發せず、如來出世、閒言長語、海藏に滿つ、何ぞ直示せざる耶。備宜しく之を思ふべし。」  
 ① 圓悟禪師曰く、「先づ其の偏墜する所を奪つて、然して後に示すに本分の鉗鎚を以てす」と。  
 ② 大慧禪師曰く、「宗師は須らく衆生の機を備へて法を説くべし、擊石火閃電光の一著子の如きは、是れ這般の根器にして、方に承當し得ん。根器不是の處に之を用ひば、則ち苗を擡ぐなり」と。僧の云く、「若し爾らば則ち如來の所説は、皆是れ虚語なり乎。」師の曰く、「是くの如きの所問、皆正問に非ず、故に我が前に答ふる所も亦正答に非ず、只偏の情に徇つて、且つ泥團を弄するのみ。人ありて書を以て、大慧に呈して云く、「請ふ公案を示せ。」慧答へて曰く、「聞く偏常に圓覺經を讀むと、吾が示す所の公案も、亦其の中に在り」と。大慧平生示す所の公案

① 路口施茶。奇特の事なり、衆縁を結ぶためならばなほよし、名聞ならばなほわるし。  
 ② 千鈞弩。三國志魏志、荀彧の語、驢は小れずみ。  
 ③ 圓悟。圓悟心要。  
 ④ 大慧。大慧書の下。  
 ⑤ 擡苗。孟子公孫丑上にあり、徒に益なきのみに非ず、又之を害するなり。  
 ⑥ 大慧。大慧書下。  
 ⑦ 公案在。大慧書。

は、須彌山、乾屎橛、趙州の無の字等是れなり、請ふ經文を看よ。是くの如くの公案、何れの處に在る。倘し能く此に於て會得せば、管圓覺のみにあらず、千經萬論及び世間麤言細語に至るまで、祖師の公案、如來の所説にあらずといふことなし、豈之を虚語と謂はん哉。恁麼ならば則ち寧ろ經教を講するを以て、吾を誘して宗師の體裁を失ひぬと言はん乎。古人云く、「馬祖百丈以前は、多く理致を講し、少しく機關を示す、馬祖百丈以來、機關は多く理致は少し」と。此れ亦何の謂ぞ乎。上古の知識、眼なきが故に多く理致を示すと謂はん耶。當に知るべし祖師門下は、座主家の法門の、一尺は終に一尺、二尺は終に二尺なるに似かず、只是れ機を見て作す、通途變格、之を破家散宅と謂ふ。今時或は機關を貴び、或は理致を崇ぶ、並に是れ座主家の法門を出でず。世尊の言はく、「始め鹿野苑より終り跋提河に至るまで、未だ嘗て一字をも説かず」と。且く道へ是れ理致耶、是れ機關耶、若し也た此に於て薦得せば、吾を讚することも也た得たり、吾を毀ることも也た得たり。」

- ① 古人云。開悟心要に出づ。
- ② 座主家。經教を講ずる學解優秀の人を云ふ。
- ③ 一尺終一尺。大惠普說。
- ④ 建仁。無體禪師に就いて。
- ⑤ 汝々。汲汲也、勤也。
- ⑥ 關東。鎌倉。
- ⑦ 巨山。巨福山建長寺。
- ⑧ 書。六十を書と云ふ。

師毎に徒に謂うて曰く、「余年二十にして、業を建仁に受く、堂裏を出でずして、孜孜として此の事を參究す。明年の冬、關東に下つて、錫を巨山に掛く。着宿あり余に諭して云く、「古人の機縁語句、之を版に刊つて、以て流通することは、他なし只後生勉學をして、此に因つて悟入せしめんことを欲す。而今虚を承け響を接して、以て名權利鎖の資と爲るもの多し。或は自ら道人と稱して知識に參せず語録を看す、只管濛濛として閑坐するものあり、並に是れ禪錄流通の所由を失する者なり。世澆季に迫んで、眞の知識あること罕なり、苟も向道の志を勵して、以て禪録を看ば、則ち古人の機縁、即ちこれ今人の機縁なり、安ぞ古今の異あらん哉。」余其の言を甘んじて、禪餘寮に歸つて語録を看閱す。茲に一山國師建長圓覺に兼住す、其の會下に在つて、數年晨昏に親炙して、吾が家の宗脈を參決す。自ら謂へり、禪門の宗旨、明らめずといふ所なしと、時に復た自ら胷中を顧みれば、依前として未だ穩かならず。乃ち知んぬ門より入るものは是れ家珍にあらざることを。古人の云く、「靈光不昧萬古の微猷、此の門に入り來りて知解を存すること莫れ」と。我れ教門を出でて禪門に入る、所學異なりと雖も、知解是れ同じ。只塵に時を過さば、其れ豈靈光を昧卻するものに非ず哉と。便ち年來貯ふる所の骨董袋を以て、悉く丙丁童子に付す。時に佛國禪師、萬壽に住す、余初めて函丈に詣して、先づ其の所志を伸ぶ。佛國之を歎じて乃ち云く、「我れ年十六にして、業を東福に受け、一の耆舊に依止す。他我をして禪録を讀ましむ。之を讀むこと一行し

ことを欲す。而今虚を承け響を接して、以て名權利鎖の資と爲るもの多し。或は自ら道人と稱して知識に參せず語録を看す、只管濛濛として閑坐するものあり、並に是れ禪錄流通の所由を失する者なり。世澆季に迫んで、眞の知識あること罕なり、苟も向道の志を勵して、以て禪録を看ば、則ち古人の機縁、即ちこれ今人の機縁なり、安ぞ古今の異あらん哉。」余其の言を甘んじて、禪餘寮に歸つて語録を看閱す。茲に一山國師建長圓覺に兼住す、其の會下に在つて、數年晨昏に親炙して、吾が家の宗脈を參決す。自ら謂へり、禪門の宗旨、明らめずといふ所なしと、時に復た自ら胷中を顧みれば、依前として未だ穩かならず。乃ち知んぬ門より入るものは是れ家珍にあらざることを。古人の云く、「靈光不昧萬古の微猷、此の門に入り來りて知解を存すること莫れ」と。我れ教門を出でて禪門に入る、所學異なりと雖も、知解是れ同じ。只塵に時を過さば、其れ豈靈光を昧卻するものに非ず哉と。便ち年來貯ふる所の骨董袋を以て、悉く丙丁童子に付す。時に佛國禪師、萬壽に住す、余初めて函丈に詣して、先づ其の所志を伸ぶ。佛國之を歎じて乃ち云く、「我れ年十六にして、業を東福に受け、一の耆舊に依止す。他我をして禪録を讀ましむ。之を讀むこと一行し

- ① 釋。釋也、之を擊つて塵限を出づることを得ざらしむる也、名聞のさかひ、利得の鎖論なり。
- ② 古人。傳燈錄九、平田普岸の章に出づ、有時來に謂つて曰く、神光不昧云云。
- ③ 只塵。ひたすらなり。
- ④ 骨董袋。露雪録に、骨董は乃ち方語、初より定まれる字なし、東坡は骨董に作る、晦庵は汨董に作る、がらくたぶくるといふ意。
- ⑤ 函丈。方丈に同じ。
- ⑥ 業を。佛國禪師は年十六にして東福開山聖一國師に従つて滿分戒を納る。



て、就いて此の意如何と問へば、他云く、宗門の語話は、敎家の所談に似かす、故に敢て解説せずと。我れ云く、苟も解説せずんば、云何ぞ其の旨趣を知らん。他云く、須らく是れ自ら悟つて始めて得べしと。我れ又問ふ、録を讀み功を積んで、自然に悟を得んや否や。他云く、若し悟り去らんことを要せば、直に須らく自ら究むべしと。我れ斯の言を聞いて、復録を讀まず、便ち堂裏に歸つて打坐す。僧侶多く來つて我を勸めて云く、少年の人先づ須らく學問すべし、一旦の道心、克く終りあること鮮し、老後必ず悔ゆる所あらんと。我れ敢て動せずして、彌々坐禪を好む。今年已に六旬に逾ぐるまで、未だ悔ゆる所あらず」と、言ひ已つて一笑す。余其の激勵を聞いて、

①鮮克有終。詩經の大雅蕩に。  
②瑞鹿。圓覺寺の山號。

志操彌々堅うして、風雨を憚らず、連日去つて參すれども、粗趣向ありて、未だ徹底の分あらず。深く跡を丘壑に晦して、以て此の事を究めんことを欲して、遂に瑞鹿を出でて、奥州に下りて、居を深山に卜して、自ら誓ふ、若し此の事を明めずんば、須らく艸木と俱に腐つべしと。圓悟心要・大慧書・林間錄之を机上に置いて、以て警策と爲す、其の外は蓄ふる所なし。間居已に三霜を閱、見地未だ一片と成らず。一日忽ち佛國禪師、別に臨んで垂詢するを憶ふに云く、「道人若し世出世に於て、毫釐も挾む所あらば、則ち悟入すること能はじ」と。自ら惟ふ我れ世諦に於て、曾て希ふ所なし、然も未だ佛法を挾んで、以て悟入の障を作すことを免れずと。既に此の非を知つて、馳求の心自ら歇んで、只麼に兀爾として、時を過す而已。一夜暮地に從前妄想的窠窟を踏躐して、

方に知んぬ佛國の示す所、虚語に非ざることを。此れより比來、善ふる所の三部の語録、亦普人に付して、眼書を見ず、脇席に著けず、只閒閑地を守つて、二十年を経、老來力衰へて常坐に耐へず、又業風に吹かれて、住院徒を匡すに至つて、西に播し東に倒る。然も操履初志に負くと雖も、未だ塵縁に混じて本明を味まさず、斯れ乃ち從前常坐不臥の力なり。或は法堂に墮つて、胡說亂道し、或は衆請に應じて、録を談じ經を講ず、言奇を欠くと雖も、心畏るる所なし、亦是れ從前學解を弃捐するの效耳。此に到つて方に信す、古人の道く、「愈晦ませば愈明かなることを。」若し也た之を晦まして又晦まし、以て晦ますことなきに至らば、則ち自家の大機大用、求めずして自ら現前することを得んこと、得て疑ふべからず。

③此。次也。  
④猶。たふし、確に同じ、つみおとすなどに用ふ。

師又曰く、「佛光禪師佛國に謂うて云く、『我れ日本の兄弟を見るに、一生に悟を得るもの多かるべからず矣。此の國の風たるや、只奇才を貴んで、悟解を求めず、是の故に設ひ靈根の者あるも、内外の典籍を博覽して、深く巧偽の文章を嗜んで、自ら此の事を究むるに違あらず。迷中に一生を過し了る、固に憫むべしと爲す。或は一類、道人と稱する者あるも、多くはこれ其の器量博學強記に堪へず、故に閒坐を以て功業と爲して、眞實向道の心を辨せず、此の類亦今生に開悟すべき者にあらず。』佛國先師、余が爲に之を説く、余乃ち問うて云く、『若し靈根を具して直下に參究する者は、且く置いて論せず、前の所謂二類の中、何れの輩を優れりと爲ん。』先師の曰く、『直鏡

鈍根にして今生に悟らすとも、倘し能く孜孜として臘月三十日に ① 推倒せば、業力の爲に牽かれず、來生出頭し來つて、必ず當に一聞千悟すべし。若し博學を以て業と爲すものは、翹虚しく閑淨に來つて打一遭するのみにあらず、亦恐らくは來生不如意の處を招き得んことを」と。

僧ありて師に問ふ、「多く學功を積み、以て談柄を資するものは、固に言ふに足らず。古語を博覽して、智光を發するものは、何の過かあらん乎。」師曰く、「中下の根機、直下に家に到ること能はず、千聖此を憫んで、且く ② 蓮座を設けて以て之を接す、其の蓮座とは偏が所謂古語なり。若し其の益を論せば、則ち經に經師あり、律に律師あり、論に論師あり、何ぞ禪師を怪しまんや。 ③ 古人の云く、「達磨西來、文字を立せず、直に人心を指して、見性成佛せしむ。」又云く、「此事若し言句の上にならば、一大藏教豈言句なからん乎。祖師西來を用つて什麼にか作さん。」黃檗禪師の云く、「學者若し成佛せんことを欲せば、一切の佛法總て學ぶことを用ひざれば、唯無求無著を學せよ」と。無求なるときは即ち心生せず、無著なるときは、即ち心滅せず、不生不滅即ち是れ佛なり。八萬四千の法門、祇是れ接引の門なり。翅祖師門下獨り此の説を作すにあらず、 ④ 了義の大乗も亦皆徹に合ふ。法華に云く、「我れ阿難と空王佛の所に於て、同時に菩提心を發す。阿難は常に多聞を樂ひ、我は常に精進を勤む。是の故に我れ已

① 推倒。推はのびゆるむ也、しかななくきたならばじや。  
② 古語。古人の教。  
③ 蓮座。はたごや、旅舎也。  
④ 古人。圓悟心要。  
⑤ 了義。涅槃經の四依品には、不了義は聲聞衆をいふ、了義とは名けて菩薩眞實智慧と爲すとあり。

に菩提を成ずることを得たり。楞嚴に云く、「阿難、佛を見て悲泣す。恨むらくは無始より來、一向多聞にして、未だ道力を全うせざることを。」圓覺に云く、「末世の衆生、成道を希望すれども、悟を求めしむることなし、惟多聞を益して、我見を増長す」と。縦ひ群籍を覽て、智光を發すとも、豈阿難と肩を齊しうすること得ん哉。夫の阿難の多聞を得るを學ばんよりは、曷ぞ世尊の菩提を成ずるを學ぶに若かん。余事已むことを獲ずして、録を談じ經を講ず、只人をして佛祖の玄旨の文字言句の中に在らざること知らしめんと要す耳。僧又詰りて云く、「宗門最上の機を接すと雖も、亦意句を立す。其の中意句俱に到るを以て勝れたりと爲す。爾らば則ち伶俐の漢あつて、意句並び參せば、何の不可なることか有らん乎。」師曰く、「古人の云く、「未得底の人は句に參せんより意に參するには如かじ、到得底の人は意に參せんよりは句に參するには如かす」と。偏只意句を立することを知つて、未だ意句を立する所以を知らず。 ⑥ 古人又云く、「句能く意を刻り、意能く句を刻る。意句交馳す、之を畏るべしと爲す。偏還つて此の語を會す處、須らく知るべし本分の田地は、意句俱に相干らざること。然も是くの如くなりと雖も、建化門の中、且く意句を論す、初心の學者、情識の中に於て、宗師の話脈に參せんと欲せば、則ち自ら路頭を塞いで、悟入するに由なけん。故に云ふ、未得底の人は、句に參せんより意に參せんには如かじと。已に悟入を得る者、若し未だ句に達せずんば、則ち宗師の體裁を失卻して、人を接すること能はず。其の意句俱

⑥ 古人又云。大慧法語上。

得る者、若し未だ句に達せずんば、則ち宗師の體裁を失卻して、人を接すること能はず。其の意句俱

に到ることを貴ぶことは、豈に初機をして、意句並び參せしむるの謂ならん哉。僧の云く、「近來宗師人をして公案を看せしむ、此れ豈初心の學者に句に參することを教ふるに非ず耶。師の曰く、「然らず、圓悟禪師の云く、「初機勉學、乍爾ち參せんことを要すれども、<sup>①</sup>捫摸の處なし。先德慈を垂れて人をして公案を看せしむ。蓋し法を設けて其の狂思橫計を繫住して、識慮を沈めて專一の地に到らしむ。驀然として心の外より得るに非ざることを發明すれば、向來の公案は乃ち門を敲く瓦子なり」と。圓悟與廢の説話、豈人を欺かん哉、當に知るべし、先德人をして公案を看せしむる、只自家大解脱門に入得せんことを要する耳。大慧禪師毎に學者の爲に、古人の語頭を舉似して云く、「意根下に向つて卜度すること莫れ、舉起の處に向つて承當すること莫れ、<sup>②</sup>無事甲裏に關在すること莫れ」と。大慧慈廢の舉似、老婆心も亦其の中に在り、翳睛の術も亦其の中にあり、若し能く與廢に提撕せば、之を句に參すと謂ふべからず。縱ひ蒲團上に坐して、心を冥して寂黙すとも、苟し語路の上に於て活計を作さば、則ち是れ意に參するの人にあらず。<sup>③</sup>圓悟の云く、「即心即佛、已にこれ八字に打開す、非心非佛、重ねて當陽に向つて點破す。其の言を尋ねずして、一直に便ち透つて、方に古人赤心片片たるを見ん、更に他の語言の中に入らば、則ち永く透脱せじ」と。又云く、「若し大根器を具せば、必ずしも古人の言句公案を看ざれ、但只朝より起きて、念を正御し心を靜御し

① 捫摸。さぐること、まれるなり。  
 ② 無事甲裏。開板の第一層なり、開板(たないた)は甲乙を以て號と爲す。  
 ③ 圓悟云。圓悟心要の中に出づ。

て、凡そ指呼する所、作爲すること一番、再び更に提起審詳して看よ。是れ箇の甚物か、如許多を作爲し得と一たび透らば、則ち清淨無爲の道場なり」と。二大老の示す所、寔にこれ參禪の様子なり。今時の學人、多くは是れ冊子の中に於て、古人の語脈を探り得て、胸中に蘊在して、代語別語滯る所なし、一揆一撈自由を得て、自ら謂へり、祖師の玄旨止此くの如しと。此れは乃ち圓悟の所謂、狂思橫計の類なり。」

僧又問うて云く、「虚を承け響を接して、自ら悟達すと謂へるものは、寔にこれ狂思橫計の人なり。若し恰利の漢あつて、實に句中の眼を得ば、寧ろ之を悟達の者に非すと謂はん乎。師曰く、「直饒ひ句中の眼を得るも、若し未だ見地明白を得ざる者は、名づけて句到意不到の人と曰ふ。若しこれ虚を承け響を接するの流、之を評するに足らず、古人云く、「但本を得て即ち末を愁ふること莫れ」と。見處明白はこれ本なり、機鋒顯脫はこれ末なり。譬へば樹を種ゑて其の根活することを得ば、則ち枝葉花果榮茂せずといふこと靡きが如し。<sup>④</sup>大慧禪師の曰く、「大凡參禪は、必ずしも機鋒あつて、便ち我れは是なりと言はざれ。昔、雲蓋の智和尚、道眼明白なり、因に太守山に入つて、談空亭に憩うて、問ふ、「如何なるか是れ談空亭。」智云く、「只是れ箇の談空亭」と。太守喜びず、遂に擧げて、本慕願に問ふ、本云く、「只亭を將て法を説く、何ぞ口を用て空を談せん。」太

④ 承遠提響。これはさとりつくして、師家の印可を受けたるなり、印可はゆるし。  
 ⑤ 大慧禪師曰く。大慧武庫。  
 ⑥ 雲蓋智。黃龍南に嗣ぐ。  
 ⑦ 本慕願。白雲端に嗣ぐ。

守乃ち喜んで本を遷して雲蓋に住せしむ。若し本を以て智に較べば則ち大いに遠し。乃ち知んぬ眞實の事、機鋒を以て取るべからざることを。寶峰元首座、亦有道の士なり、答話の機鋒鈍なり、覺範號して元五斗と爲す。蓋し口を閉ぢ氣を取つて、五斗の米を炊ぎ得て、熟せしめて方に一轉語を答へ得たり。」

僧又問うて云く、「文字言句、若し學者に於て害を爲さば、何の故ぞ古來の尊宿、各代語別語拈古頌古ありて、世に行はるる耶。師の曰く、「明眼の宗師、東語西語、以て學者を接す、示す所異なりと雖も、皆是れ小玉を呼ぶの手段なり。若し吾が家の種草ありて、言外に旨を領せば、則ち宗師の言句、何の害あらん乎。然も事久しうして弊を成す、株を守り舟を刻むもの多し矣。茲に因つて宗匠間出でて、其の弊を救ふ、之を通過變格と謂ふ、亦破家散宅と爲す。昔圓悟老師、夾山に住せし時、學者の爲に雪竇の頌古を評唱して、名けて碧巖集と曰ふ。佛鑑禪師書を以て之を責む。其の略に云く、「某昔祖峰老師の左右に奉じて、嘗て其の語を聞く、爾の輩他後忽ちに人天の師範と爲らば、切に宜しく此の事を以て自ら勉むべしと。某遂に心に銘じて敢て茲を忘れず、老兄邇來兄弟の雪竇の頌古を請益するが爲に、許多の弊

- ① 寶峯元。眞淨文に嗣ぐ、元又原に作る。
- ② 覺範。洪。眞淨文に嗣ぐ。
- ③ 呼小玉。小麗の詩に、「一段風流盡不成、洞房深處惱三愁。頻呼小玉元無事、只要檀郎認得聲。」と。大惠武庫にこの因縁くはしく出づ。
- ④ 守株。くびせをまもる、時勢に伴はずして舊習を守るをいふ、韓非子にこの語は出づ。
- ⑤ 刻舟。頑固にして時勢に通ぜざるを云ふ、呂氏春秋にこの語は出づ。
- ⑥ 佛鑑禪師。太平慧勲、五祖の演に嗣ぐ、この書は編門警訓に出づ。
- ⑦ 祖峰老師。此の人、誰人なるか未だ詳ならず。

節ありと聞く、某之を聞いて覺えず涕を洒ぐ。自ら謂へり、高踏の士何ぞ此に至ると矣。老兄何ぞ達磨未だ來らざる時の因縁を激揚して、學者を誘接せざる云云。大慧普說の中に云く、「先師佛鑑の書をみて遂に已む」と。然も好事のものありて、梓に録めて世に行ふ矣。後來大慧其の版を炬く、此れ乃ち破家散宅の手段なり。一炬の後、二百餘年、大元の 大德年中に迫んで、罽中の 張明遠といふものありて、復た重ねて版に刊つて、以て世に行ふ。三教老人と號するもの有りて之が序を爲る矣。其の始めに云く、「或人問ふ、碧巖集の成毀、孰れか是なる乎。曰く、皆是なりと云云。」其の序の中に、只圓悟之を成じ、大慧之を毀つこと皆其の以あることを陳するのみ。此の官人亦未だ宗師の手段、成毀の處に在らざることを知らず、馬祖百丈以前は、多く理致を示し、少しき機關を示す。馬祖百丈以後、機關は多く、理致は少し。風穴興化に至つて、唱彌高くと彌峻なり、亦これ通過變格の體裁なり。當に知るべし、祖師の宗旨、畢竟して理致機關の中に在らざることを。都てこれ小玉を呼ぶの手段耳。所以に道ふ、會するときは則ち途中受用、會せざるときは則ち世諦流布と。又云く、「佛祖の言教を看ること、生冤家の如くにして、始めて少分の相應あらんと。僧の云く、「苟し爾らば則ち都て言教を看す、默然として時を過すもの可ならん乎。師の曰く、「古へ云く、「語言を以て到るべからず、寂默を以て通すべからず」と、祖師門下文字を立せず、其れ豈默を喜んで語を惡まん哉。

- ① 梓。正字通に音子、百木の具、一に木玉と名く。
- ② 大德。四年、元の成宗、日本の後伏見天皇正安二年なり。
- ③ 張明遠。諱は燦。

只人をして此の事の、語黙の處に在らざることを知らしめんと要する耳。倘し能く此の事を透明すれば、佛祖の言教、咸くこれ我が屋裏の事なり。然らば則ち佛祖の言教を知らんことを要せば切に宜しく従前の學解機智を放下して、放下の處に就いて、猛烈に一則の公案を提撕すべし。若し也た靈根あるものは、必ずしも公案を見て、亦寂黙の處に墮せず。一切時中直下に參究す。此くの如くの類、並にこれ吾が家の道人なり。向來の所説偏に吾が家の道人の爲に之を論す、其れ若し宿植浮淺にして都て道念なく、只管に博學を好む者は、是れ余が論す所にあらず、然れども若し其の中に於て、或は因果の怖るべきを知つて、以て行儀を慎み、或は禪門の藩籬を窺つて、以て宗教を補はゞ則ち以て相似禪を流通すべし、此れ亦弁つべからず。布袋和尚の十無益の中に云く、「行學都て絶せば僧形無益」と、蓋し是れ此の謂歟。邇來叢林に復た一類ありて、専ら外典を學んで業と爲す、是れ意に參するにあらず、亦句に參するに非ず、喚んで禪僧と作さば、則ち可ならん乎。經論の中處處に之を呵す、既に佛子と爲つて佛制に拘はらざる者は何ぞや。僧又問ふ、「句に參得する者亦自ら謂へり、西來の意旨を透得すと、如何が其の意に參得するものに非ざることを驗みん耶。」師曰く、「古人の云く、『達磨西來別に一法の人に傳ふるなし、祇是れ人々具足箇圓成、佛祖と一絲毫を移易せざることを指出する而已。』既に人々箇々佛祖と一絲毫を移易せずと言ふ、何ぞ自他勝劣を其の間に容れん哉。若し人ありて、我れ已に悟れり、他未だ悟らずと謂ひて慢心

⑩十無益。傳燈二十七、布袋和尚の十無益出づ。

を生せば、則ち以て是の人未だ曾て西來の意旨に參得せざることを驗知しつべし。倘し能く西來の意旨に參得するものは、乃ち教門の性相事理、禪家の理致機關、盡くこれ 月を標する指、門を敲くの瓦なることを知らん。今時の學人到る處に頭を聚めて、指頭の短長を計較し、瓦子の大小を論量して、實法の會を作す、此れ乃ち語話の禪なり、寧ろ之を西來の意旨に參得するものと謂はん哉。大慧禪師少きより行脚して、語話の禪に參得して、自ら謂へり、參禪徹底と。三十六歳にして始めて其の非を知つて、遂に圓悟老師に逢ふて業識團を打破す。後來衆の爲に垂誨して、毎に其の錯を説いて以て學者を誡しむ、以て今時學者の 針艾と爲しつべし矣。若しこれ明眼の宗匠、手を垂れて人の爲にするは、把住放行擒縱 殺活 擊石火の如く閃電光に似たり、之を活祖の手段と謂ふ、亦翳睛の術と名づく。永嘉大師の云く、「或は是或は非、人識らず、逆行順行 天も測り難し」と。未だ這の田地に到らずして、其の體裁を學ぶ者は、管自ら錯るのみに匪ず、多少の人を惹き得て、以て魔業を成せしむ、慎まずんばあるべからず。」

⑪標月指。圓覺經、清淨慧菩薩の章に出づ。  
⑫大慧自少行脚。普說一に十九歳出家、三十六歳にして圓悟に見ゆるの因縁、くほしく出づ。  
⑬針艾。はりやきうてん、くすりといふの意味。

### 國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄拾遺

#### 臨川家訓

本寺の住持、妄りに請すべからず、三會院の塔主、門弟の宿老と相共に商量して、其の器を選んで以て之に任すべし。門弟の中、其の器なくんば、則ち他門の名勝を請するも亦可なり。尋常度弟院の式に倣ふこと莫れ矣。

共住の僧衆、須らく其の人を擇ぶべし、自佗の門派を問ふこと莫れ。衆を安んずること多寡は宜しく、莊園の土貢に隨ふべし。近來の長老、或は人情に徇ひ、或は弟子を憐んで、常住の煩費を顧みず、衆を安んずること分に過ぎて、以て山門の衰耗を致す、甚だ宜しからず。古人云く、「僧を安んずること必ずしも多からず、日用の齋粥、常に後手をして餘あらしめば、自然に力を費さず。」良哉斯の訓、循はずんばあるべからず。

沙彌 喝食の 挂搭、五人に過ぐることを莫れ、十七歳已前、僧と倣

ることを許さず。

客僧若し常住僧の知己に非ずんば、接すべからず、接するところの客僧、一宿に過ぐることを莫れ。或は風雨に阻てられ、或は事縁ありて淹留せば、當に住持に稟すべし。爾らずんば則ち典座之が爲に飯を打すべからず。古來の叢林、皆且過を開いて、以て方來を接す、今也宜しく之に倣ふべし。然りと雖も世澆季に迫んで、僧に似て僧に非ざる者多し。翅常住を費すのみにあらず、亦清衆を濫ることあり。此れ乃ち子が客を接することの、敢て古に倣はざる所以のものなり。

兩班十人に過ぐることを莫れ、侍者は宜しく四人を請すべし。請を受くるの人、固辭して若し其の謂あらば則ち免すべし、理なうして辭せば、須らく起單し去るべし。位に居ること須らく一回を経べし、容易に退を告ぐることを得ざれ。大刹すら尙ほ人を得ること多からず、矧んやこれ小刹をや。一回に滿つと雖も、如し交代なくんば、則ち住持懇請して之を留むべし。若し也た固辭して、再三に及ばず則ち免すべし、須らく其の位を虚しうして以て後來を待つべし。寮元 堂主、淨頭聖僧侍者、人を缺くべ

①家訓。顔氏家訓などに、業門内を整齊し、子孫を提擧するを以てなりとあり、この意なり。臨川とは、夢窓の塔所の名也。  
 ②名勝。涅槃師于吼品に、名稱十方に充滿す、是を名勝と名づくこと。  
 ③莊園。領地。  
 ④沙彌。此には息慈行慈と云ふ、又息慈とも云ふ。  
 ⑤喝食。年七歳より十三歳に至るを皆臨烏沙彌と名づく、蓋し齋時に食を行ひ過し了りて行者喝して食と云ふ、日本の叢林中古以來臨烏の沙彌をして喝食せしむ。

⑥挂搭。僧籍を登擧するを云ふ。  
 ⑦不許倣僧。剃染を請ふにはあらず、沙彌は只五戒十戒に止る、比丘戒を受けて始めて僧と云ふ。  
 ⑧且過。寮の名。暫到の人物を卸す處、則ち休息のところを云ふ。  
 ⑨兩班。西序は前堂、後堂、書記、知識、知客、知浴、知殿、侍香、侍狀、侍客、侍衣、侍藥、聖僧、侍者共に十四人なり、而して侍衣と聖僧のみは立班せず。東序は都寺、監寺、維那、副寺、典座、直歲の六員、雜務は干らす、今之を約して十人に過ぐることをなれと云ふ也。  
 ⑩寮元。寮の頭といふこと。  
 ⑪堂主。延壽堂主は病僧の湯藥

からず、寮元は須らく二十臘以上の人に係けて、半月半月代つて之を主らしむべし。堂主は須らく心を寛うし事に耐へて、病僧を哀憐するの人を請すべし。淨頭、聖僧侍者、若し自ら欲するの人なくんば、則ち十臘以下の僧に係けて、一月を限となして、輪番して勤むべし焉。若し戒臘少うして行年老いたるものあらば、宜しく之を免すべし。(十臘以下如し足らざれば則ち十五臘以下之を勤むべし) 本寺他山の者舊、大小を論せず、並に堂裏に挿單して、禪誦作息衆と異なることなかるべし。或は東堂西堂、或は老衰して起居に堪へざるもの、宜しく其の意に随ふべきなり。

乘僧の位次、者舊堂僧を論せず、宜しく戒臘行年の次第に依るべし。其の中若し東堂西堂及び者舊あらば、宜しく乘僧の上に在るべし。梵網經に云く、「先受戒の者は前に在つて坐し、後受戒の者は後に在つて坐すべし、如來の意、人をして戒法を尊重せしめんと欲す。故に此の説を作す。然るに今時禪流の受戒の儀を見るに、多くは名ありて實なし。少年の僧我はこれ戒臘已に年序を経と道うて、便ち老僧の上に在つて坐す。其の言は則ち梵網の説に似て、其の理は則ち敬老の儀を失す。如來の制律、開遮時に隨ふ、堅執すべからず。是を以て予必ず受戒の先後を用つて位次と爲す、同年の人は、戒を以て上と爲す、同戒の人は年を以て上と爲す。同年同戒の者は、宜しく挂搭

二二三  
粥食等を看す。  
①淨頭。地を掃ひ、香を焚ひ、鉢を換へ、厨を洗ひ、湯を焚き、水を添へて、須らく是時に及ぶべし。  
②聖僧侍者。これは今時は單に禪堂内の大衆の世話とかわれて堂内の本尊を供養するの役になつてある、それで大衆のきものぬぎやうから、又衣類ふとんのしまつまでを監視してゐる、すべて大衆の世話役である。

の後先に依るべし。若し十年他より老いたる者あらば、宜しく他の上に在るべし。若し其の戒十臘、他より先なる者は、其の年老いたりと雖も恕すべからず。予建化門の中に於て、且く此の説を作す、眞如。法界には、自なく他なし、更に何の位次かあらん。只諸人各無諍三昧に入りて、無位の眞人を識得せんことを要する而已。

遠國莊園の公務は、須らく莊主之を掌り、寺邊の田地に於ては、則ち都寺(或監寺)相共に之を掌るべし。莊主妄りに請すべからず、宜しく其の人を選ぶべし。或は請或は改、並に宜しく住持と兩班大者舊及び老僧と、相共に評定して、輕忽なることを得ざるべし。莊園の土貢、收納の時も亦須らく諸人評定して、細かに來年の齋料、及び修造の公用を計つて、常住をして衰弊を致さしむること勿るべし。住持及び知事、意に信せて支用すべからず、恐らくは大衆の疑怪を招くことを矣。

③眞如。楞嚴疏に、眞如は諸の虛妄を離る、故に眞と名づく、常住不變なる故に、如と名づく。  
④法界。清涼大師云く、一切衆生の心體也、圭峰云く、一心の稱なりと。  
⑤莊主。日本では大庄屋、又は代官など。

山門の規矩、須らく要を取つて行すべし、必ずしも大叢林に倣はざれ。今時の叢林、禮數を事として、道行を廢す、豈古人規繩を立し、禮數を設くるの意を失はざることを得んや。如し其れ事の上に於て無事に通せば、則ち禮數の繁多なるも、也た何の妨かあらん。後生勉進は、此くの如くなること能はず、要す須らく萬事を省して、專一に行すべし。日用勤行の法式、具に年中行事に在り。

④ 四時の坐禪、唯浴日坐參を除き、其餘は極寒極熱、修正蘭盆の時節も、亦開くべからず。(若し坐禪の時に於て時に事の作) 趙州和尚云く、「我れ南方に在ると二十年、粥飯の二時を除く、是れ難用心の處」と。趙州寧ろ粥飯の二時、是れ正用心の處にあらずと謂ふ耶、只これ其の粥飯を除いて、外更に餘事に難はらざるを言ふ耳。此の老は生れながらにして知るの人なり、然も其の履踐工夫、猶ほ以て此くの如し、矧んやこれ自己未だ明めざるものを乎。古徳又云く、「大事未だ明めずんば、當に考妣を喪するが如くすべし、大事已に明かならば、亦當に考妣を喪するが如くすべし。」古人苦口叮嚀なり、其の意豈人をして日を限り時を約して、工夫純ならざらしむるに在らん乎。上古の道人は、皆これ僻洞深巖を卜して、樹下石上に居す、更に何事の作すべきあらん、寢を廢し食を忘れ、一味に道を存す。百丈叢林を建立してより以來、普請作務、其の事少からず。然りと雖も人人道を以て頭を聚む、故に辨道工夫、曾て事縁の爲めに奪はれず。百丈滅後、三百年に追んで、叢林の規繩漸く衰へて、細流漸愧あること少し。始め擊板坐禪の儀あり、之を四時の坐禪と謂ふ、蓋しこれ主法の

④ 四時。一日中に後夜、粥後、齋後、初夜。  
 ⑤ 浴日。開浴というて寒月には五日に一浴、暑天には毎日淋汗、日本の叢林も略々之に同じ。  
 ⑥ 坐參。古は晩ごとに必ず住持に參じて以て開示を求む、故に衆を申めてひとしく集り坐して鼓の鳴るを待つて、往いて之に參ず、名づけて坐參といふ、百丈清規にあり。  
 ⑦ 修正。正月の初めに三日又は五日大般若經を轉讀又は眞讀して祈禱する、日本の禪宗寺院は今も之を行ふてゐる。  
 ⑧ 蘭盆。孟蘭盆は流也、正しくは烏藍婆拏と云ふ、此に譯して倒懸と云うて、七月十五日を自恣の日というて夏制九十日を了りて休養の意なり、この日施餓鬼會を行ひ、亡者の倒懸の苦を救ふ。

尊宿、曲げて方便を設けて、以て懈怠の者を誘ひ耳。今時の後生、猶ほ四時の坐禪を嫌ふ、動もすれば則ち省略せしめんと欲す、無慚無愧、此れより甚だしきは莫し。

臨時の祈禱、或は救命に順じ、或は武命に依つて、諸の寺院、一同勤行せば、則ち本寺も亦當に祈禱の牌を掛けて精誠を致すべきなり。其餘或は寺家の爲め、或は檀越の爲め、別に祈禱を作さば、則ち不可なり。毎日三時の看經誦咒は、併せて天下康寧、伽藍鎮靜の爲めなり。毎日の祈禱、若し効驗なくんば、一時の勤行、豈感應あらん乎。祈禱に二あり、所謂俗塵の執心深重なるが故に、佛に祈り神に禱り、以て壽福を持し災厄を攘はんことを欲す、此れはこれ世間の祈なり。身心は道の器なり、虚しく棄つべからず、故に三寶諸天の哀憐を求めて、以て道に進むに障なきことを要す、是を出世の禱と爲すなり。今時の人佛法を信じ、神祇を崇ぶを見るに、多くはこれ世間の祈禱耳。僧家又世情に徇ひ、之が爲めに祈禱して、以て名利を貪る、其れ豈理の宜しき所ならん哉。師檀俱に道理に違ひ、佛神奚ぞ哀憐あらん。縦ひ小利ありとも、卻つて大利を失ふの因由

⑨ 開。放開の意にて、止むの意、放參とも云ふ、止定の反對なり、放參は坐禪をせぬとき、止定は坐禪をする時。  
 ⑩ 趙州云。本錄の上堂の語。  
 ⑪ 擊板。板をうつこと、叢林の規矩として今日でも禪堂では朝うつの開板、夜うつの解板と云ふ、生死無常を譬むるの語が、この板に於いてある。  
 ⑫ 祈禱。事を告げ福を求むる也、祈禱の牌を掲げて修するなり。日本では元寇の頃より始まりしが、禪宗の祈禱の最初じやと云ふ。  
 ⑬ 三時。支那の元朝時代に、中峰國師が幻住清規には圓經は粥罷と黄昏と二時を限りとあるが、日本では建仁寺の榮西禪師が興禪護國論には一日夜式亦二時也と、日中を加へて三時と爲すとは、夢窓國師の



とならん、慎まざるべけん乎。禪家只須らく萬事を省して本分を守るべし、乃ち是れ四恩を報じ三有を資くるの祈禱なり。

法堂之を構ふることを要せざれ、何んとなれば則ち古の叢林、宗說俱に通せるの人を以て、主法の者と爲す、會下の龍象、頭首の位に居して、以て住持の化を助く、故を以て上堂秉拂、所益尤も多し。今時の叢林、道古に及ばず、大刹の長老頭首すら、尙ほ以て其の人を得難し、何ぞ況や小院を乎。若し是れ智眼明かならず、機辨具せずして、心を相似の問語に勞し、念を滑稽の浮華に紛さば、謂つべし自ら欺き亦人を欺くと矣。如かじ住持頭首、衆と作息して、同じく涅槃堂裏の禪に參せんには。若し也た住持、古人の體裁を具するものは、妨げず丈室に端居して、以て方來を接せんことを。寧ろ法堂なしと謂はん乎。

夢中間答上に云く、大覺禪師建長に住するとき、日中の經課なし、蒙古の來寇に當つて、官寺院に命じて各祈禱を修せしむ、これに因つて日中特に觀音經を誦す、爾來沿襲して規となす、豈禪宗の本意と爲すべけんやとあり。  
① 禪。除也。  
② 涅槃堂。禪。虛堂錄普說に出づ、又は延壽堂とも、省行堂とも曰く、その實は人をして生死を了せしむるところと羅湖錄に出づ、佛眼禪師の語。發。冥婦也。

或は放曠として閒遊し、或は故往觀聽し、或は晩に門外に出で、或は夜他所に宿す、並に皆制すべし。若し要緊の事あらば、當に住持及び維那に稟して去るべし。獨り比丘尼の庵及び娑婦の家に入ることを許さず、但佛事の爲に請を受くるを除く。直饒請に赴くとも伴なくして去るべからず。

比丘尼及び女人、聽法の時に非ずして寺に入り來ることを許さず、直饒齋會の時節にも、亦寮舎の内に於て、茶飯等を喫せしむることを許さず。

方丈及び諸寮、緇白集會して、① 點心を喫し茶宴を作し、游談日を終へて去ること甚だ宜しからず。唯特に佛事の爲にすることを除く、縦ひ佛事の爲に大齋會を設くるとも、點心一兩種に過ぐるることなかれ。

若しくは葷、若しくは酒、門に入れしむること莫れ、縦ひ② 調菜の爲にすとも、亦用ふべからず。縦ひ俗客ありとも、日午以後、他をして食せしむること莫れ。寮暇の僧も亦中を過ぎて食すること莫れ。若し療病の爲に、非時食を要せば、宜しく延壽堂に歸すべし。僧に二種あり、謂く、菩薩僧、聲聞僧。圓頂方袍は、皆これ聲聞僧耳。③ 教中に云く、「釋迦の法中別の菩薩僧なし。」蓋し釋迦如來。濁世に出でて、宜しく聲聞の形を以て、慧命を續ぐべきに由る耳。是の故に佛鹿苑に赴いて比丘の形を現じ、文殊等の大乘の菩薩、亦皆剗染して、其の形體を同じうし、其の威儀を一にす。④ 法華に云く、「內秘菩薩行、外現是聲聞」と、乃ち此の謂なり。今時の禪流、多く言ふ、大乘の行者、寧ろ禁戒を以て身を束ねん乎と。嗚呼此の説を作す者は、大いに如來諸弟子をして同じく聲聞

- ① 點心。非時のおきなひに食するを云ふ。
- ② 葷。五辛等、臭菜及び魚鳥獸肉。
- ③ 調菜。料理のあちつけなどに。
- ④ 教中云。大智度論三十四。
- ⑤ 濁世。法華の方便品。
- ⑥ 慧命。止觀六の三、賢聖慧を以て命と爲す。
- ⑦ 法華云。五百弟子受記品。
- ⑧ 大乘行者。禪門實訓下、萬庵曰く、叢林至る所云云の意なり。

の形と作さしむる所以の意に違ふなり。百丈の規繩豈小乘の學者の爲に設けん耶。然も佛運澆季に  
追んで、三千の威儀を具し、八萬の細行を守ること、誠に以て難しと爲す。些子の教誡、誰か之を  
守ること能はざらん、若しこれ能はざるもの、宜しく僧形を棄て、俗に在つて禪を行すべし、復た  
何の妨かあらん乎。

●請暇は五十日を以て限と爲す。若し遠く行いて早く歸ること能はざる  
ことあらば、則ち後日に歸り來つて、更に挂搭を求むべし。免と不免と須  
らく住持の意に任すべし。

●寮暇は七日に過ぐることを莫れ、七日以後、猶ほ未だ安きことを得ずば、則  
ち病暇を爲すべし。宜しく寮に在りて將息すべし。他處に在ることを得ざ  
れ。

●病暇の人は、宜しく延壽堂に在るべし、他處に在るべからず。若し他處  
に在つて療養せんと欲せば、宜しく請暇し去るべし。請暇若し日限を過ぎ  
ば、須らく其の單を抽つべし。輕安の後、更に挂搭を求むべし。或は免或は不免、宜しく住持の意に  
任すべし。病中只非時食を許す、葷酒等を喫することを許さず。律院の式、病を療するに五辛を食ふ  
ことを制せずして、非時食を制す。其の制意尤も以あるなり。予が制する所此に反せり、亦所思あ  
るべし。

●三千威儀。名義集四に、二百  
五十戒に約して各四威儀あ  
り、合して一千と爲す、三世に  
循じて轉じて千と爲す、三千  
威儀を將て身口七支に分配す  
れば、二萬一千と爲る、復た  
對治三番及び等分に約すれば  
八萬四千と成る。  
●請暇。「しんひ」と讀みならば  
す、いとまをこふの意なり。  
●非時食。日中午を過ぎての食  
を云ふ。

ればなり、怪しむことを得ざれ。或は藥を服するに酒を用ひて嚙下し、或は藥を煎するに少しく葱  
根を入るることは則ち之を禁せず、其餘は宜しく如來 寧死不犯の誠に遵ふべし。謂ふこと莫れ酒  
肉五辛、能く人をして身を養ひ命を延べしむと。俗家長時に之を食ふもの、未だ長生不死の人を見ず。  
僧家道の爲に身を養ふこと、是れ古聖の制する所に非ず、幸に餘藥の用ふべきあり、而るに有罪の藥  
を求む、是れ愚の甚だしきものなり。人命保ち難し、病なうして死するもの多し、何に況や抱病の  
人をや。謂ふこと莫れ、先づ病を療じ後に道を行せんと。古人云く、「苦樂  
逆順其の中に在り」と。須らく知るべし、病惱の時節、乃ち是れ道の所在  
而已。

●寧死不犯。梵網經不生自要戒  
等の文意。  
●都督親王。世眞親王なり、後  
醍醐天皇第二皇子、河端宮と  
も申す、上野太守太宰帥、元  
德二年九月十七日薨す。

●今此の伽藍は、偏に都督親王の大願力に依つて興成す。因つて寺後をトして、報恩の塔を奉安  
す。其の傍に又卵塔を構へて、以て開山の儀を表す。中に彌勒堂を立て、兩塔の昭堂に充つ。因つ  
て三會院と號す、此れ皆公界の有るべき所の者なり。此の外伽藍の郭内、及び菜園の裏、私庵を卓つ  
ること莫れ、予三會院の東に於て、假山水を構へ、其の常住の菜園を犯用することを恐る。乃ち隣地

近來の叢林諸寮、各小庫裏を構ふ、其の意樂殊に理に順はず、火事も亦  
怕るべきなり。一向に之を制す、僧家は宜しく枯淡を甘んずべし。鬪熱を  
愛することなかれ、縦ひ來客ありとも、氷雪相看も也た得たり。

を買つて以て之に代ふ。

口を守り意を攝して、鬪諍を致すこと勿れ。僧伽はこれ梵語、此には衆和合と云ふ。苟も我慢、貢高を以て、懷に介み、穢語諍論衆を亂らば、其れ豈之を僧伽と謂はん耶。既にこれ道を以て頭を聚む、縦ひこれ法諱なりとも、如し諍論に及ばず則ち不可なり、矧や、間事の爲に無明を長せん乎。然れども彼此同じくこれ凡夫なり、警喜警嘆、得て禁じ難し。如し少しの紛争あらば、則ち住持及び首座維那、勸めて和合せしむべし。相罵り相打つに及ばず、則ち理非を論せず、兩つながら俱に院を出すべし。

犯重の僧、實と不實と、未だ分明ならず、若し衆人ありて、一同に指目するときは、則ち共に住することを許すこと莫れ。長老密に其の人を誘ひ、起單し去らしむべし、罰勝を出すこと莫れ。

寮舎の資具、一切宜しく儉約に従ふべし、僧衆の衣服、華奢を得ざれ、翹道を障ふるのみにあらず、亦恐らくは賊を招かん。

今時の僧舎、賊難を防がんが爲め、諸の兵器を蓄ふ、乃ちこれ法滅の因縁なり。慎まざるべけん乎。近來惡賊、僧僧物を偷むのみに匪ず、閻僧の命を奪ふものあり、此れ乃ち僧兵器を蓄ふるの致

① 守口攝意。これは法句經にある、佛が朱利般特といふもの覺えのあしき弟子、五百の羅漢をして日々之に教へしめ給ふも、三年の中に一偈をさへおぼえず、佛之を怒みて一偈を授與し給ふ、守口云云。  
② 貢高。自ら高ぶり、物を凌ぐの意。  
③ 間事。今時ならば蕃將蕃などのあらそびごと。  
④ 指目。大學にある、曾子曰く、十目の視るところ、十手の指すところ、其れ嚴なる乎。  
⑤ 蓄諸兵器。梵網經の畜殺生具戒に詳なり。

す所耳。苟も佛制を守つて、財寶を貯へざる、即ち是れ賊を防ぐの器械なり。只須らく佛祖の玄樞を把つて務と爲すべし、世間の厄難を以て懷に介むこと莫れ。倘し能く此くの如くならば、諸天善神之が爲に擁護せん、何ぞ自ら器械を畜ふことを勞せん。如し其れ放逸無慚にして、禍を招いて身に上せば、百千の兵器も亦用ふる所なけん矣。

末寺の住持も、亦其の人を擇ぶべし、本寺の長老、三會院の塔主、并に門弟の老僧、相共に和會して之を請すべし。門弟の中其の器なくんば、則ち他門の人を請すべし。其の寺の規矩宜しく本寺に準ずべし、一朝の長老、自ら恣にして行ふべからず焉。古者の云く、「千年

⑥ 不貯財寶。これには八種の不淨財と云ふことあり、佛制なり。

の常住、一朝の僧之を思ふべし。」(末寺者甲州建林、播州瑞光、阿州補陀等是也) 本末寺、勝劣の想を作すこと莫れ、互に相資助して、以て祖燈を續がんことを要須す、これ則ち子が祝する所なり。諸方間末寺を以て、本寺の莊園に充て、其の土貢を受用することあり、茲に因つて末寺は衰落の弊を致し、本寺は互用の尤を招く、彼此益なし、慎ますんばあるべからず。

本寺及び末寺の契券等の正文は、並に宜しく三會院に在るべし、其の紛失せんことを恐るる耳。庫裏の法式、別紙に書す、故に此に載せず。入院の一切、宜しく略儀に従ふべし、古人入院の法、其の儀則るべし。今時古法に準せず、只華

奢を以て式と爲して、檀越を煩はし、常住を費すの弊、此れ従り起れり、顧みざるべけんや。入院の時、隣峰の尊宿を請じて、證明を爲すことは是れ日本様耳。大唐の法式、人を請せずと雖も、或は新命の知己ありて、義の爲に來つて座下に在つて證明を作す、就いて其の中の宿老を請じて、白槌の人と爲す、其の式尤も以あるなり。本寺の入院、既に法堂の儀を略す、故に白槌の人を請すべからず、況んや復た其餘を乎。(佛事之式)

先づ山門に入り焼香、(法語あり)次に佛殿に到つて、焼香禮拜、(法語あり)次に土地堂、祖師堂に到り、(法語あり)次に僧堂に到り掛搭、(古法は掛搭の後、佛殿に至る。佛殿に)然うして後に方丈に入り據室、(法語あり)次に再び佛殿に到り、佛前に於て當に祝聖の香及び嗣法の香を熱くべし。曠昔百丈禪師、創めて規繩を立て、備陳せずといふこと靡し。若し也た遵守するときは則ち叢林の行事、奚ぞ濟はざることあらん乎。然れども近來の尊宿、別に規矩を立つるもの多し、蓋しこれ時に随つて、範を垂れ、格を變じて人を導くの故ならず耳。予今略して法度を設けて、以て小院の家訓と作すも、復た何ぞ怪しまん哉。客は須らく主裁を聽くべし、依つて行することを辭すること毋れ。其れ或は然らずんば、君が別に如意の處を求めて、止住し去るに任す。樽桑震旦世界廣潤なり、何ぞ必ずしも此に在つて、蠶頰を勞

①白槌。本錄に注せし如く、證明の語の諸觀法王法をとらるなり。  
②法語。本錄にあるとほり一々法語あり。  
③蠶頰。かほをしめてうれふること。  
④祀。年也。四時祭祀一たび訖はるに取る、書伊訓に注す。  
⑤滌。衣の垢をすいぐ也、俗上滌、中滌、下滌を以て上句、中句、下句となす、本と唐の制に十日に一身沐す、今之を廢用す、或は省して院に作る。

せん乎。

曆應二。祀、仲夏下。滌

夢窓老拙書于三會院詢軒

偈頌

賀三臨川新建二藏殿一偈并引

修多羅の教は月を標する指の如し、此れ乃ち金口の說なり、西天に結集し東土に流轉す、寧ろ典籍として指に非ざる者あらん乎。然れども此の指能く人の眼を擇び、亦能く人の睛を瞎す、利と害と人に在つて指に在らず、若しこれ指に因つて月を見れば、則ち其の指以て貴しと爲るに足れり。今時只指上に於て大小を論じ、長短を較ぶるもの多し矣、蓋し此の指の貴しと爲る所以を知らざるに由る耳。茲者臨川蘭若、新に經藏を建つ。堂頭無極和尚、特に佳篇を作り、以て慶讃を伸ぶ、其の意人をして此の指

①修多羅。總じて諸教を指す、此には契經と譯す、契は機に契ひ理に契ふを云ふ。  
②結集。如來入涅槃後七日を経て大迦葉五百の羅漢とともに三藏を集む、阿難發聲唱言す、我聞如是一時と佛の居處する所を説く云云。  
③眼。目睛を云ふ。  
④睛。ひとみ。

の貴しとする所以を知らしめんと欲してなり。山中の清衆も亦各唱和して以て同志を表す。老拙因に厥の軸を見て、感懐に溢る、聊か四句を綴り、其の尾に書すと云ふ。

「竺墳故紙積成重。三國流轉費幾功。」

不<sub>レ</sub>要競<sub>レ</sub>頭開<sub>二</sub>藏<sub>一</sub>殿。人人幸有<sub>二</sub>一靈宮<sub>一</sub>。」

時に客あり、余が之を書するを看て問うて曰く、「滿藏の金文、一軸の玉

什、都べてこれ月を標する底の指、畢竟月何れの處にか在る。」余乃ち

聲に應じて云く、「今夜一輪滿。清光何處無。」

康永癸未仲秋望

木訥叟疎石書于天龍方丈南軒

①墳。支那では伏羲、神農、黃帝の書を三墳と曰ふ、大道を言ふ也。  
②什。簞什也、たゞ成數をあぐるのみ。  
③今夜一輪滿。禪月大師實休の句。

祭文

祭<sub>二</sub>高峰禪師<sub>一</sub>文

維に 正和五年歲丙辰に次る、古溪に寓居する參學の小師疎石、謹んで 菲薄の奠を備へて、以

て高峰禪師の尊靈に 叩いて曰く、

恭惟 吾師 亞<sub>二</sub>聖<sub>一</sub> 博<sub>二</sub>桑<sub>一</sub> 叢<sub>二</sub>林<sub>一</sub> 翹<sub>二</sub>楚<sub>一</sub> 禪<sub>二</sub>門<sub>一</sub> 棟<sub>二</sub>梁<sub>一</sub>。

清操 爽<sub>二</sub>拔<sub>一</sub> 尊<sub>二</sub>儀<sub>一</sub> 堂<sub>二</sub>堂<sub>一</sub> 機<sub>二</sub>峻<sub>一</sub> 辯<sub>二</sub>捷<sub>一</sub> 口<sub>二</sub>有<sub>一</sub> 雌<sub>二</sub>黃<sub>一</sub>。

五<sub>二</sub>匡<sub>一</sub> 名<sub>二</sub>刹<sub>一</sub> 利<sub>二</sub>濟<sub>一</sub> 無<sub>二</sub>方<sub>一</sub> 雨<sub>二</sub>露<sub>一</sub> 普<sub>二</sub>潤<sub>一</sub> 瓜<sub>二</sub>瓞<sub>一</sub> 綿<sub>二</sub>芳<sub>一</sub>。

珠<sub>二</sub>石<sub>一</sub> 賦<sub>二</sub>性<sub>一</sub> 暗<sub>二</sub>鈍<sub>一</sub> 偷<sub>二</sub>隣<sub>一</sub> 壁<sub>二</sub>光<sub>一</sub> 恭<sub>二</sub>稟<sub>一</sub> 庭<sub>二</sub>訓<sub>一</sub> 漫<sub>二</sub>得<sub>一</sub> 證<sub>二</sub>羊<sub>一</sub>。

拜<sub>二</sub>辭<sub>一</sub> 席<sub>二</sub>下<sub>一</sub> 久<sub>二</sub>閱<sub>一</sub> 星<sub>二</sub>霜<sub>一</sub> 無<sub>二</sub>義<sub>一</sub> 爲<sub>二</sub>義<sub>一</sub> 絕<sub>二</sub>世<sub>一</sub> 禮<sub>二</sub>望<sub>一</sub>。

山<sub>二</sub>遙<sub>一</sub> 水<sub>二</sub>遠<sub>一</sub> 意<sub>二</sub>非<sub>一</sub> 參<sub>二</sub>商<sub>一</sub> 奄<sub>二</sub>聞<sub>一</sub> 計<sub>二</sub>音<sub>一</sub> 心<sub>二</sub>緒<sub>一</sub> 恍<sub>二</sub>恍<sub>一</sub>。

巴<sub>二</sub>陵<sub>一</sub> 三<sub>二</sub>語<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub> 舉<sub>一</sub> 揚<sub>二</sub> 隨<sub>一</sub> 分<sub>二</sub> 報<sub>一</sub> 謝<sub>二</sub> 禮<sub>一</sub> 拜<sub>二</sub> 燒<sub>一</sub> 香<sub>二</sub>。

仰<sub>二</sub>賴<sub>一</sub> 尊<sub>二</sub>靈<sub>一</sub> 垂<sub>二</sub>鑑<sub>一</sub> 非<sub>二</sub>常<sub>一</sub> 尙<sub>二</sub> 享<sub>一</sub> 禮<sub>二</sub>拜<sub>一</sub> 燒<sub>二</sub>香<sub>一</sub>。

祭<sub>二</sub>清拙禪師<sub>一</sub>文

前住瑞龍山太平興國南禪寺清拙大和尚示寂於 今月十七日 臨川

禪寺東堂比丘疎石

今辰忽得<sub>二</sub>遺書<sub>一</sub> 攀<sub>二</sub>慕<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>已 虔<sub>二</sub>設<sub>一</sub> 薄<sub>二</sub>具<sub>一</sub> 作<sub>レ</sub> 文<sub>二</sub> 祭<sub>一</sub> 曰<sub>二</sub>。

「嗚呼 師乎 智<sub>二</sub>超<sub>一</sub> 溟<sub>二</sub>渤<sub>一</sub> 德<sub>二</sub>蓋<sub>一</sub> 蒼<sub>二</sub>穹<sub>一</sub> 峻<sub>二</sub>機<sub>一</sub> 卓<sub>二</sub>邁<sub>一</sub> 宗<sub>二</sub>說<sub>一</sub> 俱<sub>二</sub>通<sub>一</sub> 齊<sub>二</sub>措<sub>一</sub> 軒<sub>二</sub>豁<sub>一</sub>。

不<sub>レ</sub>例<sub>二</sub> 關<sub>一</sub> 茸<sub>二</sub> 化<sub>二</sub> 門<sub>一</sub> 廣<sub>二</sub> 大<sub>一</sub> 無<sub>レ</sub>殼<sub>二</sub> 無<sub>レ</sub>封<sub>一</sub> 震<sub>二</sub> 旦<sub>一</sub> 搏<sub>二</sub> 桑<sub>一</sub> 兩<sub>二</sub> 處<sub>一</sub> 成<sub>二</sub> 龍<sub>一</sub> 慈<sub>二</sub> 雲<sub>一</sub> 法<sub>二</sub> 雨<sub>一</sub>。

利濟何窮。貴賤緇白。發<sub>レ</sub>部擊<sub>レ</sub>蒙。師之與我。緣遇相融。其派雖<sub>レ</sub>異。其源是同。處處住山。多<sub>レ</sub>ト隣峰。托<sub>レ</sub>庇得<sub>レ</sub>宴。偷<sub>レ</sub>光補<sub>レ</sub>宗。計音俄至。吾思<sub>レ</sub>惘惘。大人隱顯。月印<sub>レ</sub>水中。不<sub>レ</sub>別而別。焉間<sub>レ</sub>真容。且順<sub>レ</sub>世辭。薄奠伸<sub>レ</sub>供。大寂場裏。幸照<sub>レ</sub>卑棕。尙享<sub>レ</sub>。」

祭<sub>二</sub>雙峰禪師<sub>一</sub>一文

前住慧日山東福禪寺 特賜雙峰禪師大和尚奄爾示寂。隣峰南禪禪寺比丘 疎石。今晨忽得<sub>二</sub>遺書<sub>一</sub>。攀慕不<sub>レ</sub>已。虔<sub>レ</sub>設<sub>二</sub>薄具<sub>一</sub>。爲<sub>レ</sub>文昭告曰

「維師の道徳、滄海渺瀰、迅機鋭を挫く、孰か齋籛を窺はん。縁に應じて、俯仰礪かす緇ます、圭角匿し難し。世に口碑あり、屢巨利に遷つて、住持を忝めず。四來の英雋、皆<sub>レ</sub>指麾に伏す。龍淵の一脈、萬派千枝、其の流長き者は、師を外にして是れ誰ぞ。老拙多幸、縁遇時を得たり。瓜葛好ありて、隣を擇んで相宜し。只愛顧に頼つて、我をして危きを扶けしむ。師已に往きの矣、之を挽くに由なし。吾が望<sub>レ</sub>齋語す、喜を以て悲に轉す。嗟しい哉法運、又一たび衰ふことを見る、更に羨はくは尊靈、廣大の慈を發して、寂滅場裏、化儀を失はざらんことを。誦<sub>レ</sub>誦として告ぐ、禱る所茲に在り、冰花地に滿ち、林壑奇を獻す、特に此に奠に當つ。言ふこと莫れ<sub>レ</sub> 饌微なりと。尙はくは饗けよ。」

- ① 惘々。痛む也。
- ② 指麾。さいはひに。
- ③ 誦々。いかりさげぶのこゑ。
- ④ 饌。具食也。

疏

靈庇廟鎮座疏

竊かに以れば、法の世を濟ふこと神力に匪ざれば行はれず、神の威を播す法縁に藉つて増<sub>レ</sub>旺なり。是を以て此界他邦の教庠禪院、皆神廟を置いて以て精藍を保つ。茲者 今上皇帝 後醍醐院に奉爲して、新に梵苑を創したまふ。某 恭しく 叡旨を奉じて、叨に開基に膺る、神靈の冥資に非ずんば、争か祖道の興盛を得ん。去年元正夢中 恍惚として此の地に遊び、便ち八幡の靈廟、嚴飾斬新なるを見る、覺めて後忻然として、以謂らく此れ乃ち神の我に示すなり、宜しく靈祠を構へて神馭を延め奉るべし。願望未だ果さず、居請 屢遷る、幸に今冬縁遇時至つて、近日營功已に成するを見る、云々。恭しく 惟れば、護國靈驗、威力神通、大自在菩薩、聖祚を樽桑に亞いで、第十六代に當る、神武を 宇佐に顯はして、已に八百年に垂んとす。和光同塵、寔に 不請の友たり。本を匿し跡を彰はすこと、無縁の慈より出づ。善應無方之を窺ふもの、其の際を視ること莫し。

- ① 護國云云。欽明天皇の時神託に云く、吾は是れ譽田の天皇廣幡八幡也、我を護國靈驗威力神通大自在菩薩と名づく。
- ② 宇佐。欽明天皇三十一年冬鎮座、豐前國宇佐宮。
- ③ 和光同塵。老子の知者不言の章に出づるに取る。
- ④ 不請友。維摩佛國品に、衆人不請友而安之。
- ⑤ 行教。武内大臣の裔、この因縁は元亨釋書行教傳に出づ。
- ⑥ 弘法。神社考に出づ、弘法大師高雄山に於て密乘を唱和す、この御影今、高雄山神護寺にあり。
- ⑦ 茲。維也。

靈機常に轉ず、之を仰ぐ者、其の高きを窮むること莫し。人々歸崇すると  
 きは則ち人々益を得、處々影現するときは則ち處々皆眞なり。◎行教和尚  
 勸請の時、三尊の光彩三衣の上に耀く。◎弘法大師對談の後、八幡の嘉聲、八  
 紘の間に喧し。祭禮の舞儀、専ら浮世無常の相を表す、放生の法會殊に大悲拔苦の忱を旌す。冥化既に感に赴くの私  
 なきを見る。屢生胡爲れぞ愚を顧みて自ら屈せん。月千江に印す、水の深淺を擇ばず、春萬國に行く  
 寧ろ地の高低を分たんや、廟宇太だ窄きも、無邊の境含せり焉。吾儕卑しと雖も、懇請の誠聲せり  
 矣。靈明の誓を説くを見るに、正直の人を護せんことを要す。禪宗これ迂曲の談にあらず、稍子安ぞ  
 虚妄の見到に墮せん。苟も我が祈る所に應じ、必ず神の期する所に協はん。伏して願はくは、大菩薩◎  
 男山を動せず、靈跡を龜山に垂れ、神道を改めずして、護持を祖道に加へんことを。謹疏。

◎男山。山城の男山、石清水神宮。

法語

示性輝道友

甚慶の道理ぞ、忽若ち忘念起る時、急々に箇の無の字を提げて、便ち利刀の如くに相似て、一切に

切斷し、提し來り提し去つて、久々工夫做して一如と成す、絲毫も間斷なく、淨裸裸赤洒々の處に到  
 つて、忽然として時節因縁偶合して、築著碯著、桶底子の脱するが如くに  
 相似たらば、一回自然に箇の歡喜安樂の處あらん。但無の字を透得過せば、  
 方には是れ參禪、此に到つて自然に七通八達、一切疑礙なかるべし。但恐ら  
 くは身心專一ならずして、聲色に隨逐し、世縁に擾々として、其の爲に障  
 へられん耳。性輝道友、身心純一往來多載、孜孜として此の事を以て懷と  
 爲す、家に在つて一室自ら居して常に禪寂を樂み、時來つて扣問、其の意  
 を口陳す、亦自ら嘉すべし。故に◎老漢時中上堂◎披の衣を以て、之  
 に授く、其れをして此の道に力め進み通徹の地に到しむ。◎

◎この法語は前に二行ばかりの文章ありしも、いつのまにか欠けしものならんか。  
 ◎老漢。佛國禪師ならん。  
 ◎上堂の下に一の欠字あり、わからざるまゝのせたるなり。  
 ◎この終りにも未だ語のありしならんも、欠けたまゝにのせたるなり。

發願文

生々世々恩あるものは、我れ今悉く其の恩徳を報じ、生々世々怨を結ぶものは、我れ今悉く其  
 の冤讎を謝し、生々世々縁なき者は、我れ今悉く其の善縁を結んで、各々邪を離して正路に歸し、  
 互に相資助して、菩提を證せん。願はくは我れ慈悲觀音の如く、行願普賢の如く、智慧文殊の如く、

辯說維摩の如くならんことを。願はくは我れ難なく災なく、道念堅固智慧聰明、生死あることなく、應に所住なうして而も其の心を生ずべし。直に無上菩提に趣き、一切衆生を利益せん。我が此の行願念々相續して間斷あることなげん。

上來修する所の諸の功德、先づ世々生々父母師長親類眷屬乃至十方世界一切衆に向向す。皆六道四生の苦を逃れて、同じく五智三密の徳を顯はさん。次に冀はくは、某甲、無始より以來、今に至るまで造る所の諸罪、皆速かに消し、生死無常の迷を翻して、早く色身實相の理を悟らん。縦ひ今生に開悟せずとも、道心彌堅く、修行の志怠ることなく、智見漸く開いて魔外障起らず、願望皆叶ひ身心共に安うして、臨命終の時、身苦みなく心亂れず、直に觀音の淨土に生じ、親しく大悲の尊容を拜して、則ち六種の神通を得、普く十方佛土に遊んで、無邊の賢聖に供養して、無盡の行願を成就せん。若し又淨土に生ぜずんば、善人の家に生じ、聖流の形を受けて、諸の災殃に逢はず、諸の禁戒を破らず、善知識に親近し、無上法を解了して、三生を出でずして、早く學道を成じ、四攝を捨つることなうして長く迷輪を救はん。仰ぎ願はくは三寶哀愍を垂れ、諸天擁護を加へたまへ、十方三世一切の諸佛、至尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。

國譯夢憲正覺心宗普濟國師語錄附錄 終

天下之至大者道也。至公者理也。人能公正宏大、合乎道理者、莫不尊且敬焉。予自南國東來、扶桑、惟見。

夢憲國師一人而已。師之道、如春行大地、師之德、如皎日當空。師之戒、凜若冰霜。師之行、見於行事。八提錫斧、六處開山。三朝加敬、一國咸尊。所謂合乎大公之道理、自然人皆得而尊敬之。若曰師之語言滿天下、而無口過者也。

國師祖佛光、而師佛國發揚宗旨、警訓後學、如珠走盤、有自來矣。其嗣子龍湫澤首座、出師語錄、以示余。命予爲序。予曰、國師乃佛鑑下子孫、卻用翳睛法、觀此錄者、自宜着眼。嗣師之法者衆、皆叢林之麟鳳也。必又有大其家世者焉。

昔文和三禩孟夏佛誕生之日

四明東陵叟 永瑛 序



此是老僧一生寐語也，切莫求添削於他人，矧乎刊版印施矣哉。

# 夢憲正覺心宗普濟國師語錄 上

住山城州瑞龍山南禪寺語錄

侍者 本元 慧逸 等編

正中二年八月二十九日入院。

指山門云：溪澗潺潺，峰巒岌岌，公門曾無內外，誰言拽而不入。顧視左右云：莫惟不相揖。

佛殿郝老聞名也不喜，我儂今日特來參，良久，黑蜜太苦，黃連太甘。

土地堂靈鑑無遺，賞罰不遜，敢問：即今觀我麼？泊乎更下一分飯。

祖師堂聯芳續篋，地無朱砂，恐人道以訐爲直，一炷兜樓，且賞他。

據室橫按主丈云：不師摩竭迹，不做少林響，召大衆云：只要當頭薦取，切忌溫故知新，喝一喝。

勅黃以此革弊持危，以此索隱致遠，印文已露，見也無碧落之碑，無賈本。

山門疏，全袞全貶，海闊山幽，知我罪我，不在春秋。

拈衣，大庾嶺頭通線路，鷄足山裏藏針鋒，新南禪通也不得，藏也不得，提起衣云：等閒提起覆

虛空。

法座，應身坐，非艸，法佛坐空裏，且道：衲僧以甚麼爲座，指法座云：我無隱乎爾。

陸座拈香云：此一瓣香，薰向爐中，恭爲祝延今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲，陛下恭願皇圖斬新，永符山呼之祝，民物康阜，咸賴天賦之恩。此香奉爲諸位尊官文武百寮，資陪祿算，伏願輔弼樹全功，權威旌美德。此香山南海北，到處埋藏，未嘗容易街賣，定價還他大商，薰向爐中供養。前住相州建長教證佛國禪師高峯大和尚，用酬法乳之恩。

索話清平時節，風物一新，恢開東閣，誰是高賓？僧問：一佛出世，地湧金蓮，和尚出世，有何祥瑞？答云：露柱燈籠，手舞足踏。進云：人天交接，兩得相見。師云：三臺須是大家催。進云：詔旆臨筵，宸恩動地。祝聖一句，願垂指示。師云：九天擊玉印，四海服金輪。進云：恁麼則龍峯高處，君恩重。答云：須知海嶽歸明主。進云：記得大慧禪師住徑山時，馮侍郎問云：和尚曾道不作這蟲豸，今日爲甚麼住此山間，頭還具眼也？否？答云：六隻骰子滿盤紅，大都只是見頭彩。進云：大慧曰：盡大地是一箇，呆上座，爾向什甚處看我？意在那裏？答云：筭帚畫蛾眉。進云：今日若有人向和尚恁麼問，未審如何祇對？答云：莫來攔我。我徑門路，進云：與古人相去多少？答云：要知山上路，須是往來人。進云：可謂法隨法行，法幢隨處建立。答云：天津橋上畫打官，更僧禮拜。師乃云：法母固必道絕，方偶雙放雙收，即默即說，嘯月眠雲處，不離古渡頭邊，和泥合水時，常坐孤峯頂上。少林花開果結，達磨未肯救迷情，南嶽烟暗霧深，思大何曾做豹變，現成法席誰卷誰舒，廣大施門，非關非闔，便見物物同揚，皇道不言之化，頭頭咸表祖宗絕唱之猷。石上座恁麼舉唱。

此是建化門中，私通車馬，也只如官不容針底，又且如何低聲低聲，一字入公門，九牛車不出。復舉世尊曰：佛法付屬國王大臣，有力檀那，拈云：釋迦老子，量才補職，不失其宜，二千餘年，遺風未墜，要知他付屬底佛法麼？以拂擊床云：道泰不傳天子令，行人盡唱太平歌。

當晚小參，僧問：欲隱彌露，遠離東關之舊隱，至化難逃，來爲南禪之主盟，如何是不動尊？答云：天台普請南嶽遊山，進云：恁麼則一點水墨兩處爲龍？答云：靈蹤更在猿啼處。進云：記得德山云：今夜小參不答話，問話者三十棒，未審意在那裏？答云：此地無金二兩。進云：時有僧出禮拜，山便打還的當也無？答云：長鞭不搆馬腹。進云：今夜小參有問有答，與德山是一是二？答云：一有多種，二無兩般。進云：古今無異路，達者自同歸。答云：峯轉疑無路，隔溪別有村。僧禮拜。師乃云：山野未入此保社，已前諸仁者，曾在者裏，各自盤桓，殿柱閣梁，人人具見，鐘聲鼓響，箇箇親聞，同一見聞，同一受用，直得耳裏開圓，通戶牖，眼中放本分光輝，不是逐旋捏合，亦非法爾如然，直饒佛祖出興，也須拱默，誰肯一點相諂，忽有箇漢出來道：此現前大衆，既能如是，爾有甚長處？主玆法席，卓主丈一下云：有意氣時添意氣，不風流處也風流。

復舉法燈和尚示衆云：我本欲深隱巖壑，養病過時，奈緣先師有未了底公案，出來與他了卻。時有僧出問：如何是先師未了底公案？法燈便打云：祖禪不了殃及兒孫。拈云：法燈將謂陳年滯貨販賣得時，可笑累世家私，自揚向外，石上座溪山藏醜拙，雲月入膏肓，只因先師無未了底公案，所以出來與他謝恩，且道與古人有優劣也無？良久云：不是任公子徒勞釣竿，次日奉爲龜山聖廟看讀藏經，上堂，瞿曇不說一字，諸人看箇箇什麼？趙州只轉半藏，爲甚不得。

全功課龍山試向者裏通消息去舉起拂子云諦觀法王法王法法如是  
菊節謝兩班上堂大功不宰大化不言東西自然合轍左右靡不逢原大眾還會麼如會採菊  
東籬下不會悠然見南山

上堂水滸山寒秋已老現成公案沒人知沒人知睦州主丈又生枝喝一喝下座

開爐上堂秋光一變小春回寒暑何曾屬往來不奈瀉山千古錯今朝又撥舊爐灰

上堂拈主丈云此箇事絕度量豎起云豎窮三際橫按云橫徧十方大眾要見橫豎總不相干  
處麼卓一下云曙色未分人盡望至于天曉也尋常

上堂舉五祖演和尚云如今禪和家舉話也不會如何是祖師西來意庭前柏樹子怎麼會便  
不是如何是祖師西來意庭前柏樹子怎麼會便是拈云五祖老師夜半捉烏鷄驚起隣家睡  
未免賺誤後人向顛頂處承當龍山則不然如何是祖師西來意庭前柏樹子怎麼會始得

冬至小參離頭吹筆筭則人人恰似懷冰律管颺葭灰則物物皆如挾纊偉哉玄樞不可鑽仰  
德之攸覃無偏無黨諸仁者於此薦得皓老布衲價千金若不薦洞山果子甘而爽有底開  
與麼道便道爾說許多閒事作什麼今年冬至在月頭早須賣被而買牛良久云嗚呼覆水難  
收

復舉芭蕉和尚示衆云備有主丈子與備挂杖子備無挂杖子奪備挂杖子拈云芭蕉誦出此  
一行大神咒古今未有人翻譯得龍山今夜對衆分明翻譯去卓主丈一下云唵蘇嚕蘇嚕娑  
婆訶

冬節諸官至上堂一陽纔發生徧界無硬地龍山法鼓轟雷萬像森羅側耳雲堂清衆作證明  
朝廷貴胄垂光賁今日風雲已際會來年氣候不勞記是是不是不是維摩掌裏搏大千老胡  
口中無兩齒

臘八上堂瞿曇喫盡冰霜苦說向夏蟲都不知後二千年屈堪述寒梅初綻兩三枝卓主丈下  
座

上堂居諸易移歲序云暮或作無常迅速商量或向物不遷處領取且道那箇是正見良久云  
鷓鴣諍不休終入漁人手

除夜小參索話臘月三十日參玄得便宜花須連夜發莫待曉風吹僧問爆竹聲中年已盡東  
村王老夜篩錢觀面一句請師直指師云分明記取進云路不拾遺真古道民皆樂業見豐年  
師云堯舜之君猶稽于化進云舊歲今宵去新年明日來底事還有遷變也無師云有利無利  
不離行市進云與麼則舊歲即新歲新年即舊年師云米中雜犀角鷄鶩而不啄進云抹過七  
十二候亂卻六十甲子更乞一句師云乾三連坤六斷進云三世諸佛摸索不著歷代祖師近  
傍無門響師云劍閣雖途險夜行人更多進云萬物獻敷榮之態元樞忘煦育之功如何是一  
老一不老師云只許老胡知不許老胡會進云老在這裏不老底在什麼處師云相隨來也進  
云物以終爲始人從故得新師云到江吳地盡隔岸越山多僧禮拜

乃云一年三百餘日今宵是結交頭一生參學事已畢自是時人不肯休西屋東家品藻否秦  
來去人人箇箇論量日月周流引得古人將臘雪供大眾烹白牛作活計只知嚼飯餒兒不覺

好肉生贅，龍山與麼告報，大眾還甘麼？若也不甘，今夜分歲，彼此得便。  
復舉僧問香林：如何是衲衣下事？林云：臘月火燒山，頌云：峯巒幽邃罕游人，傳說壺中天地新。  
洞口風過雲忽散，聞時富貴見時貧。

歲節上堂，僧問：曆以寅爲正，風從艮位來，正與麼時？請師祝聖。師云：四塞狼烟絕，九天鳳瑞新。  
進云：記得僧問鏡清：新年頭還有佛法也無？清云：有。僧云：如何是新年頭佛法？清云：元正啓祚，  
萬物咸新，意在那裏？師云：明修棧道，暗度陳倉。進云：僧又問明教：新年頭還有佛法也無？教云：  
無。僧云：年年是好年，日日是好日，因甚麼卻無？教云：張公喫酒，李公醉。又作麼生？師云：懸羊頭，  
賣狗肉。進云：鏡清道有明教爲甚道無？師云：江南地暖，塞北天寒。進云：學人即今問和尚，新年  
頭還有佛法也無？師云：舊年曾答了也。進云：恁麼祇對與二大老相去多少？師云：一任傍人度  
量。進云：上來一一指示分明，向上一句，又作麼生？師云：彭八刺札。進云：應時容裕，無慶不官。師  
云：君子不介視，僧禮拜，師乃拈拄杖云：天得一以清，地得一以寧，君王得一以安國，撫民歲月  
得一以送舊迎新，衲僧得一時又且如何？靠拄杖云：止止放過一著，落在第二。  
元宵上堂，有照有用，牛頭沒馬頭回，或明或暗，雪中粉，墨中煤，龍山吐箇閒言語，燈籠聽得笑  
滿腮，笑到三更勿入會，徐徐沿壁上天台。

因雪謝兩堂首座維那典座上堂，雪花亂墜，空無一翳，人天眼目，元來豁爾前後一照，不起紛  
飛心，賓主歷然，寧居明白裏，且以何爲？驗克賓嗣，興化瀉山參大智。

佛涅槃上堂，僧問：娑羅樹下，跋提河邊，有則公案，年年今朝現成呈露，學人上來，請師剖判。師

云：我今不再三，進云：開口則喪，閉口則背，如何通而不犯？師云：一把柳絲收不得，和風搭在玉  
欄干。進云：人間月半天，上月圓，與麼時節，喚作唱，乃洎則是，喚作轉法輪，則是。師云：一字不著  
畫，八字無兩入，進云：摩胸告衆，行計忽忽，椰示雙趺，著甚死急？師云：喪車後懸藥袋，進云：若謂  
我滅度，非我弟子，若謂我不滅度，亦非我弟子，畢竟作麼生折合去？師云：作賊慎關，進云：與麼  
則只箇死屍無著處，至今紅爛百花叢。師云：人天衆前何不蓋卻？進云：五天霧慘雙樹煙愁，人  
天當日盡悲號，因甚波旬舞袖長。師云：船上無散工，進云：涅槃後有大人相，如何是大人相？師  
云：尺二眉毛領下生，進云：上來一一指示，其奈釋迦老子藏身無路。師云：臨坑不推人，進云：三  
尺一丈六，且同携手歸。師云：春色無高下，花枝自短長。僧禮拜，乃云：二千年前萬化千變，二  
千年後乞無再面，好箇太平時節，波旬卻具一隻眼，以拂擊床，下座。  
上堂，花柳呈豔，燕鶯鬧聲，東參西扣，太無厭生。卓主丈云：自是不歸，歸便得五湖風月，有誰爭  
上堂，德山棒，臨濟喝，雲門一字關，洞山五位訣，古人各擅韜略，殺活擒縱，可謂水銀墜地，良久  
云：三十六路不如走。

四月八上堂，瞿曇不曾生，因甚賞今日，毗藍園裏一犬吠，虛西天此土，千猿唯實，韶陽徒張意  
氣，藥山將錯就錯，龍山今日盡力，變格通途去也。卓主丈下座。

結夏小參，僧問：荷錢鑄綠，梅彈垂金，時節因緣，願聞提唱。師云：早被上座答了也。進云：時節既  
到，其理自彰，如何是其理？師云：鬧市裏闍碌博，進云：佛性義又如何？師云：賣扇老婆手遮日，進  
云：與麼則鏡分金殿燭，山答月樓鐘。師云：須知三島外，別有一乾坤。進云：九旬禁足魚游網，物

外安身鳥入籠去此二途如何是禿僧行履處師云虛空走馬陸地行船進云觀面全彰解脫門一踏牢關百雜碎師云怪力亂神進云記得龐居士云十方同聚會箇箇學無爲此是選佛場心空及第歸意在那裏師云紫羅帳裏撒真珠進云心如工伎兒意如和伎者如何學無爲師云覓火和煙得擔泉帶月歸進云此是選佛場那箇是及第底心師云蹉口道著進云上來已蒙指歸向上宗乘事如何師云離頭艸鞋僧禮拜乃云以大圓覺爲我伽藍結也由我解也由我結則遍界盡結若凡若聖艸木昆蟲同時禁足安居遂不見有違我所制者解則徧界盡解萬象縱橫無礙更無規繩可拘便見嘉州大像緊峭艸鞋優遊妙喜世界陝府鐵牛橫肩柳樛巡歷博桑國中只如不結不解時至竟作甚舉措良久云山前麥熟也未

復舉百丈和尚每上堂訖召大衆大衆回首丈云是什麼拈云君子言不浪發發必中度且道百丈恁麼道意在於何叫喚回枕上三更夢惹動江南萬斛愁

次日上堂格外玄機不勞佇思論甚克期取證茄子瓠子雖然如是未免今日依西天樣讀畫葫蘆何故朝四暮三便歡喜咄

上堂拈主丈云汾陽和尚云識得主丈子一生參學事畢龍山卽不然識得主丈子更須行腳去靠丈下座

上堂阿刺刺橫該扶鬼面神頭二九十八善財失腳百城南笑倒無邊身菩薩卓主丈  
半夏上堂前四十五日既往不咎後四十五日道不預諾正當今日拈起拂子云龍山手裏拂子時跳上三十三天在歡喜園裏對帝釋說深妙法諸天圍繞默然肅聽且道說箇什麼法今

朝是六月朔

上堂火雲蒸太虛太虛不熱薰風拂太虛太虛不涼若能恁麼領略不妨應緣倘伴雖然如是更須知有向上行履始得囉儉佛錢而買佛香

上堂清商告候法歲將周敢問諸仁者所作已辨不若也未辨得龍山須向諸人背後展拜何也手臂終不向外曲

解夏小參僧問布袋頭開天地寬金風翻葉墜階前正與麼時請師提唱師云太無厭生進云恁麼則溪聲長在耳山色不離門師云飽病難醫進云翠巖夏末示衆云一夏以來爲兄弟說話看翠巖眉毛在麼是何心行師云三更過孟津進云後來保福云作賊人心虛意在那裏師云品藻人卽得進云長慶云生也如何領略師云葫蘆棚上掛猪頭進云雲門云關又作麼生師云崑崙著鐵袴進云四大老與麼敲唱還有出身分也無師云艸本天下同進云可謂卞氏場中多巨璞孟嘗門下足高賓師云從貧入富易從富入貧難進云龍山今夏還有爲人不惜眉毛底麼師云青山不舉足日下不挑燈進云未審與古人是一耶是二耶師云莫來掩采我進云上來一一蒙指示曲終人不見江上數峯青師云切莫向別人舉僧禮拜師乃拈拄杖云這水上座今夏在者裏體上不掛寸絲口中不費一粒不肯隨衆禁足亦不向外遊山鼻笑西院兩錯商量平欺文殊三處度夏結也不管解也不知只麼黑糝皺地過了九旬光陰且道賞他便是罰他便是諸人若不能斷直教木上座自斷去也卓主丈  
復舉洞山云初秋夏末兄弟東去西去直須向萬里無寸艸處去石霜開得云出門便是艸拈

云作法於涼其弊猶貪作法於貪弊將若何。解夏上堂僧問解開布袋七縱八橫無尾胡孫有甚快活師云只可自怡悅不堪持送君進云不吞栗棘蓬作箇什麼師云鐵牛不喫欄邊艸進云點胸點肋響師云登科任佗登科拔萃任佗拔萃進云極則事又如何師云十字街頭吹尺八進云人天交接如何相見師云兩眼對兩眼進云與麼則愁思偏於蟬外覺歸心更向鴈邊多師云事無一向進云者裏若有性燥漢直下山去和尙還肯佗也無師云腦後見腮莫與往來進云忽有人問夏在何處未審如何祇對師云私事不得官酬僧禮拜師乃云消散蠟人水孽開鐵彈子兩顆鼠糞變成金翠巖眉毛長尺二囉囉哩秋風誰謂從西起擊拂下座退院上堂一片間雲多變態從龍暫寄此山頭釘釘懸挂沒交涉又逐秋風過別州擲下拂子下座

相州鎌倉縣金寶山淨智禪寺語錄

侍者 曇 林 編

師於嘉曆二年二月十二日入院。佛殿三人行時必得一師三佛並坐有何所爲休休六耳不同謀。

拈帖傳箭令暗號子喚作靈山囑都是不相似付與維那且舉例。

指法座者一座子不假建立耐耐須彌燈王安著幾多階級新寶山一時坐斷去也使登座。

拈香云此一瓣香燕向爐中恭爲祝延。

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬歲陛下恭願。

聖謨恢恢寶祚永踐玄扈之高闕淳化蕩蕩世樞咸復丹陵之古風次拈香云此香奉爲征夷大將軍資陪祿算伏願營門無擊刀斗三軍止戈官路不見烽烟四塞衝壁又拈香云此香奉爲相州太守都元帥伏願壽基福基俱堅佐聖明於萬世信力智力兼具護正法於無窮又次拈香云此香奉爲本寺大檀那親衛校尉大禪定門伏願命府運數盡芥城而有餘。

身宮德儀如藥樹而長茂又拈香云此香貞實絕枝葉逢春不著芬只有天然些子氣許佗無鼻孔人聞燕以供養前住建長再住本山敕證佛國禪師高峰大和尚用酬法乳之恩。

就座問答罷乃云大哉箇事覆天載地勳絕諸相而不留勳絕之跡字育萬靈而不宰字育之功拈起也吒吒沙沙放下也綿綿密密乃佛乃祖皆悉承他恩力以接踵躡武利濟不失時賢王賢臣亦是承他恩力以護法安邦至今無間斷直得盡大地卉木叢林人畜艸芥箇箇承他恩力今日聚會金寶山裏共唱萬年歡諸仁者還得分明聽取也無倘或未然更須側耳卓主丈一下。

復舉世尊一日陞座文殊白槌云諦觀法王法法王法如是拈云釋迦老子等開吹無孔笛文殊謾把鼙拍版擊節且道畢竟成得什麼曲調囉鄭衛之門須掩耳。

佛涅槃上堂。僧問。摩胸告衆。強誑癡獸。大聖本無出沒。什麼處有去來。答云。須知三代禮樂。乃是五霸兵器。進云。可謂平地起骨堆。答云。彩氣夜常動。精靈日少逢。進云。二千餘年屈。和尚還雪得麼。答云。野火燒不盡。春風吹又生。進云。今日即有。明日即無。畢竟如何定當。答云。管它閒事。作麼進云。直得諸天悲泣。波旬鼓舞。答云。一家有事。百家忙。進云。春色無高下。花枝自短長。答云。伸脚元在縮脚裏。僧禮拜下。乃云。若謂吾滅度。不是吾弟子。欲人不知。不如不爲。若謂不滅度。亦非吾弟子。改頭換面。東倒西擺。大衆要識。釋迦老子。舌頭落處。廢一從事。卻潘郎後也。解人前不識羞。

三月旦上堂。桃萼呈紅。李花獻白。春光不敢拒人。只是無人領略。良久云。積代管纏。暫時落魄。謝受昭二首座。上堂。薄福住山。肚皮欠篋。引得舊知訪來。彼此同嚼冰雪。未語海月山雲。先關百醜千拙。因甚如此。多子塔前曾落節。

四月旦。謝直歲上堂。汾陽囑慈明云。修造自有人。且與佛法爲主。拈云。大小汾陽話成兩橛。金峯門下。修造已得人。別無佛法可說。召大衆云。於此薦得。僧堂對厨庫。佛殿對山門。若也未薦。只因連夜雨。又過一年春。

佛誕生上堂。瞿曇降生。大驚小怪。自誇淨裸裸地。脫體寸絲不掛。金峯普請洗滌。佗只要赤肉也不存。直待他骨節毛竅。心肝五臟。一時換卻。方許開大口道。天上天下。唯我獨尊。雖然如是。明眼看來。浣盆浣盆。喝一喝。

結夏小參。統微塵刹界。以爲我伽藍。領無邊含靈。以爲我大衆。括十世古今。而立刻期之限。用

一切事業。而蔽取證之行。直得穢土淨邦。處處綠楊堪繫馬。六凡四聖。家家門底透。長安結時。解解時結。長期非延。短期非促。金寶山中。鋤畚下種。占波國外。梗游萍跡。更論甚麼。禁足。不禁足。前安居後安居。忽有伶俐漢。出來道。我也別有生涯。不居伽藍。不入伽藍。數十世古今。一切事業。都來不于我事。且道。他向什麼處行履。良久云。觀大海者。難爲水。

復舉。僧問。趙州。萬法歸一。一歸何處。州云。我在青州。作一領布衫。重七斤。拈云。者僧要將溼紙裏。大蟲。趙州針鋒頭上。翻筋斗。奇則太奇。只是歸處未分明。令人轉入迷魂寨。今夜有人。問萬法歸一。一歸何處。只向他道。半入露柱。半上燈籠。

次日上堂。東山家宴。盡美盡善。西院商量。赤心片片。金寶今日結夏。不敢管顧諸人。亦不論兩錯。何故。重賞之下。必有勇夫。

謝兼拂上堂。一喝分賓主。底法門。兩堂首座已說了也。向虛空裏寫五字底法門。書記已說了也。一代藏教。詮注不及底法門。藏主已說了也。更有緊要一句。佛佛祖祖。久默斯要。我四頭首也。各緘默。金峯久日樺來唇。不免今日擊鼓爲諸人吐露。良久。下座。

上堂。一二三四五六七。七六五四三二一。幼婦舒眉。笑臉開。夜叉屈膝。眼睛出。構得構不得。當門書大吉。卓主丈。下座。

上堂。塵塵爾利利爾。以拂擊床云。老鼠敲床頭。貓兒正憨睡。

半夏上堂。法歲已過半。過去心不可得。解制未屆期。未來心不可得。正當今日。現在心不可得。三世之心。既不可得。豈起拂子云。且道。者箇從何處得來。良久云。自攜瓶去買村酒。卻著衫來。

作主人。

夏中謝藏主上堂。舉古有僧在經堂中坐。藏主云：如何不看經？僧云：不識字。主云：何不問人？僧又手云：是什麼字？藏主無語。拈云：者僧問字，將謂坐斷藏主舌頭，爭奈鳥焉成馬。藏主無語。堪與者僧爲師。會麼？六月賣清風，人間恐無價。

上堂拈主丈草一下云：休休，好語不可說盡。

解夏小參。彌滿清淨，不容佗物。就中立限立期，總是魯般繩墨。金峰今夏與現前大眾，眉相結，鼻相拄，全賓是主，全主是賓。諸公三昧，金峯不知，金峯三昧，諸公不知，便見日中一浪，人人落得盡。孟無柄，夜後一寢，箇箇未曾開眼尿床，只麼騰騰過了一夏。畢竟功歸阿誰？擊拂云：蠟人跳上梵天，鐵彈走過東海。

復舉僧問雲門：初秋夏末，前途忽有人問作麼？生對門云：退後退後。僧云：某甲有甚麼過？門云：還我九十日飯錢來。拈云：輕輕躡足龍門過，惹得腥風動地來。

次日上堂。大火西流，涼颺報秋。九旬功課一時罷休，好箇快活時節。去底去留底留，雖然如是，金峯不肯點頭，何也？如今馬上看山色，不似騎牛得自由。

相州鎌倉縣瑞鹿山圓覺興聖禪寺語錄

侍者 紹 榮 編

師於元德元年八月二十九日入院。

山門盡大地是圓覺伽藍，且道門限在什麼處？彈指一下云：看看宿霧初收，天已曙。

佛殿殿裏底，佗是誰？喚我早知，爾門貼鍾馗，展坐具云：人天大眾前，且放一頭低。

土地堂，法無隆替，人無可否，儼然列坐，護什麼？良久云：良哉，不謬爲土地。

祖師堂，祖祖密付，天知地知，今日敗缺，咎歸阿誰？據室拈主丈云：烹佛煨祖，還佗古德，便是渾鋼能有幾鐵，新瑞峯變，靠丈云：幾乎墮覆轍。

拈帖，營門樞機，法城渠答，半幅全封，千重百匝，要知裏許消息麼？凜凜威風生六合。

山門疏，褒也，屈裏話，貶也，屈裏話，因甚如此？呈起疏云：莫謂大家納敗。

諸山疏，衆口一舌，字義炳然，諸人還會麼？東山樹對西山樹，上澗泉流下澗泉。

法座，燈王三萬二千座，指座云：盡是從此一座出，且道此座何處得來？喝一喝。

拈香，此一瓣香，薰向爐中，恭爲。

今上皇帝，祝嚴。聖躬萬歲萬歲萬萬歲，陛下恭願，永揭文明，齊德化於宣光之中，與毋墜葆命，竝覆燾於大禹之高，闢此香，奉爲。征夷大將軍及文武官僚，同增祿算，伏願。膺一人簡在副四海，具瞻益懋，輔佐之功，驟布安撫之德，此香，奉爲。本寺大檀那，資倍祿算，伏願。壽山高。



於百億須彌之高，福海廣於十重香水之廣，權澤長覃華夷，而綏皇極，誠明普被緇白，以耀法門。此香久在窮谷埋之而不腐，屢向人前燒之而不燼，今復拈出，供養前住巨福名山建長興國禪寺。敕證佛國禪師高峰天和，尚用酬法乳之恩。

遂就座，問答罷，乃云：二六時中，四威儀內，新羅夜半十日，竝照名之爲大光明藏三昧，二千年前，薄伽世尊一時入此三昧，與一切諸佛菩薩主伴同會，光嚴住持，自爾以降，圓覺伽藍，巨闢戶牖，西天此土各立門庭，或居僻洞深巖，嘯雲吟月，或據名山望刹，領衆匡徒，隱顯行藏，千途萬轍，竝是具足圓覺住持，圓覺底樣子也。石上座，今日又居此伽藍，與無邊刹海凡聖含靈主伴同會，光嚴住持，古今恁麼住持，更無絲毫異相，畢竟濟得什麼事，以拂擊牀云：野老不知堯舜力，琴瑟打鼓祭江神，謝不錄。

復舉宜春太守，請慈明和尚住南源，明固辭不赴，後日特謁太守，願行太守問其故，明云：始不欲之，今偶欲之耳。遂請住山，拈云：慈明和尚瞻之在前，忽焉在後，擬見蹤跡，山遙水長，雖然如是，爭奈令人墮在是非海裏，即今若有人問新瑞峯去年固辭鈞命不住當山，今日何故敢來領席，便向佗道：竹有上下節，松無古今色。

當晚小參，釘一琢二，本分鉗鎚，捏聚放開，作家受用，不是世間韜略，亦非出世機鋒，直得扭定文殊鼻頭，不能出氣，塞卻觀音耳朵，無由返聞，電激星馳，誰敢摩壘，便恁麼去，鬧熱門庭，即得若以正眼觀之，未免將頭不猛，帶累三軍，山野乍住，此精藍不論本分鉗鎚作家受用，只要與現前大眾同作息去也，何故？天津橋上不賣私鹽，問答不錄。

復舉張無盡相公，請皓禪師住玉泉，皓陞座，顧視大眾云：君不見，良久又云：君不見，無盡在座下，操蜀音云：見皓云：但得相公見便了，便下座，拈云：玉泉唱出太古清音，無盡和以絕聽希聲，直至而今餘韻未已，諸仁者還聞麼？卓主丈一下云：此曲只應天上有人間，能得幾回聞。

九月旦上堂，秋雲載雨過，清颺攪林藪，構得構不得，一舉四十九，卓丈下座。

菊節上堂，陶潛短吟，只是世俗活計，汾陽一句，未免法眼著沙，鹿峯門下，世法佛法都是拈向一邊，且如何應箇時節去，良久云：爲憐處處籬邊菊，一度秋風一度花。

謝都寺上堂，入得世間出世無餘，觸事應緣，都非外料，折旋俯仰，有甚掠虛，雖然如是，切玉須是昆吾。

上堂，恁麼恁麼，蜜無中邊，不恁麼不恁麼，觀面猶隔三千，驀拈主丈卓一下云：昨夜雨師值風伯，觀音耳裏打鞦韆。

上堂，舉雲門大師云：直得山河大地無纖毫過患，猶是轉句不見，一色始是半提，更須知有全提時節，拈云：雲門和尚三更過孟津，白日行官路，若人覩透佗手腳，便好高挑鉢囊，獨步丹霄，其倘未然，鹿峯更下箇注腳，林垌曳杖，嗜清興，又入空濛紫翠中，腳力盡時，山更好，莫將有限趣，無窮。

上堂，拈主丈卓一下云：諸人還會麼？靠丈云：一枝付鶴鷄，萬里付鴻鵠。

冬夜小參，問答罷，乃云：天地未分已前，有箇無字曆日，不記氣候節序，論甚吉凶悔吝，及乎天地已分，妄見寒來暑往，眞曆從此漫滅，艸本天下流行，舉世咸言，冬至時節，綉紋添線，霞管屬

灰引得洞山退卓自許家私霜華揭勝還成露布雖然如是瑞峯不敢欲救此弊只要依而行之且道意在那裏良久云攻乎異端斯害也已矣

復舉僧問古德如何是冬來事德云京師出大黃拈云古人恁麼答話自謂橫身宇宙舌覆大千殊不知虎豹之文來田獵狙之便來籍

冬節上堂昨夜離頭吹筆簾森羅萬象悉盧胡今朝打鼓報此事借問諸人信也無信底不信底瑞峯俱歡喜何故陽氣發時無硬地卓主丈一下

謝東堂東明和尚兼四頭首秉拂上堂昔日洞山和尚冬夜撥退菓卓致令泰首座喫菓子不得千載之下風俗易慣人人圖湊處處安排也未有入喫得鹿山今年又迎冬夜隨分作宴無

有新奇底只將洞山陳年菓子剝皮去核送在我四頭首口邊而皆不甘遂向人天大眾前各自吐卻了也慕拈主丈云主丈子聽與麼說出來便道低聲低聲這裏有東堂和尚不須說

洞下事鹿山覆水難收且憑主丈子謝其輕觸去也卓主丈一下

臘八上堂六載寒酸猶自可一朝濁富不如貧明星迸散三千界悉作瞿曇眼裏塵

上堂世界恁麼廣闊爲什麼聽鐘聲披七條雲門大師與麼垂示依徇越國彷彿揚州諸人還會麼擊拂云識得山川無限意目前瀟灑不須多

除夜小參問答罷乃云玄樞運轉旋磨之蟻其步稍移歲序推遷赴壑之蛇其尾難繫若能於此識得不遷底句烹白牛炊黍飯可謂惠而不費其倘未然疴瘋賣癡都是勞而無功鹿山今夜與諸人分歲不要依樣畫貓別有箇施設卓主丈一下云莫嫌冷淡沒滋味一飽能消

萬劫飢

復舉僧問浮山遠和尚新歲已臨舊歲何往遠云目前無異怪不用貼鍾馗拈云這僧在大洋海底問尾問浮山向須彌頂上指路頭還有針芥相投分麼良久云夜深珍重

元正上堂豎起拂子云看看吾道一以貫之會得城上已吹新歲角不然窻前猶點舊年燈元宵上堂家家有一盞燈三人證龜作鼈瞎眼波斯入闌市撞著然燈受記菑且道受什麼記

菑孟春白月終定是上元節

二月旦謝新舊兩班上堂竺土大仙心東西密相付密相付無差互庭梅未謝舊年花岸柳旋舒新歲絮以拂擊牀下座

佛涅槃上堂一出一沒半合半開諸人向什麼處見釋迦老子卓主丈一下云湘潭雲盡暮山出巴蜀雪消春水來

三月望上堂處處真處處真何處園林不領春塵塵爾塵塵爾遊客都無白踏人雖然如是諸人還見鹿峯主丈生花麼靠丈云幾乎使西施負薪

上堂古德云我有一句子待虛空墮地時便向偏道鹿山即不然我有一句子虛空未生以前已曾說破了也良久云三十年後莫道川僧打鏡鉢

佛生日上堂佛身無爲不墮諸數雲門一棒誇屠龍月明豈在珊瑚樹囉瑞峯恁麼說話早是汙卻清淨法身了也急須詣大佛殿普請浴佗去便下座

結夏小參德山小參不答話南人不夢脫趙州小參要答話北人不夢船若能觀透二大老手

脚何妨大蟲舌上打鞦韆，直得脫略千古坏模，掣斷諸方抑勒，立期限論修證，都是魯般繩墨。雖然如是，鹿峰未點頭在，須知圓覺伽藍裏，今夏百二十日，別有條令可遵行始得，且道是什麼條令，日中一晝夜後一寢。

復舉南泉和尚坐次，有僧叉手立，泉云：太俗生。僧便合掌，泉云：太僧生。僧無語，頌云：塵外靈區不易尋，青山九瓊洞門深，神仙將謂卜斯地，驚聽空中操梵音。

次日上堂，護生須是殺，八字無兩，殺盡始安居，山上有鯉魚，要知箇中意，鐵船水上浮，休休有萬里之智，有萬里之憂，卓主丈。

謝秉拂上堂，聲前通信息，句後絕安排，一挨一拶佛祖望崖，拈起拂子云：只箇拂子無思算，須彌頂上舞三臺，擊拂下座。

端午上堂，事不過三，月不過五，若能直下換雙眸，善財到處是藥圃，其或未然，一任帶蒲人戴艾虎。

上堂，舉僧問雲門禪師，如何是諸佛出身處，門云：東山水上行，後來圓悟和尚拈云：天寧卽不然，如何是諸佛出身處，薰風自南來，殿閣生微涼，二大老，一人笞帚畫蛾眉，一人官路賣私鹽，瑞峰與麼批判，不覺失笑，且道笑箇什麼，就地拾得麗水金，拈起卽是新羅鐵。

中夏上堂，鳥飛兔走，碧落無蹤，一齊衆楚，法歲告中。

上堂，拈拄杖卓一下云：大衆會麼，若不會更下注腳去也，又卓一下。

上堂，火雲蒸天，暑威烈烈，嘉州大像通身汗流，陝府鐵牛喘而苦熱，別別富士山頭長有雪，擊

拂下座。

夏中東福和尚至上堂，舉雪峯領衆到浮江，乃問云：欲寄二百僧過夏，得否，浮江以拄杖劃一劃云：著不得，拈云：浮江和尚，只知大禮不辭讓，未知禮之用和爲貴，東福和尚自京師來，要寄一兩員僧過夏，鹿峯不敢做古人態度，只是順命而已，何故，銜鑑在前，難容奸峭。

上堂，殘陽未收，爽氣潛起，無位真人，赤骨歷地，喝一喝。

上堂，舉瀉山問懶安，汝十二時中當何所務，安云：牧牛，山云：汝作麼生牧，安云：一回入，鼻拽將回，山云：汝真牧牛也，拈云：懶安金殿撒塵沙，瀉山艸庵安鷓鴣，瑞峯若見佗道：一回入，鼻去，鼻拽將回，便向佗道：盡大地一頭水牯牛，更向什麼處拽將回，佗若擬開口，便與一掌，道：莫犯國王水艸。

解夏小參，實際元來廓落絕，封絕疆，情域警爾區分，有凡有聖，所以釋迦如來二千年前，曲垂方便，立期立限，鎔凡成聖，殊不知模子既不正，脫出來底，七凹八凸，便見聲聞精勤，證得擇滅無爲，菩薩克期安居，平等性智，都是銅鑄得底，未得脫體完全，我此現前大衆，今夏一百二十日，不入者般鐘錶，不受佗人鉗鎚，飢飢困寢，各自烹鑊，瑞峰今夜，搥鼓作自恣佛事，只要驗過諸人各所成底，願視大衆云：元來只箇鐵彈子。

復舉雲門問僧，初秋夏末，不觸平常，道將一句來，僧無對，自代云：初三，十一，中九，下七，拈云：雲門大師，明中贏得一著，暗中輸了一籌。

次日上堂，法歲已終，人人策功，卓主丈一下云：寒山拈卻蓋面帛，元是東家李大翁。

八月旦謝兩班上堂卓主丈一下云建化門開千足萬足自東自西無思不服以何爲驗靠丈云煥涼次序弗紊秋來天氣已肅

再住山城州瑞龍山太平興國南禪寺語錄

侍者 紹榮 懷澄 士永 等編

師於建武元年十月十日入院

山門天下瑞龍山門無第二義若也衝蘆來那裏是那裏

佛殿合掌云希有世尊希有世尊且道讚歎箇什麼看佗鼻下有口門

土地堂恍兮惚兮神在其中莫恠昔日見南泉不得王老師也未見他形容

祖師堂四七二三家風未墜東西的的相承流落樽桑國裏良久云好事不出門惡事行千里

據室古來宗師叱佛呵祖南禪好采接人丈室恢開門戶何故大瞋大怒

救黃 皇祚一統也由此印子祖宗中興也由此印子將謂今日始流行捧起救黃云威音王前只這是

山門疏屋裏豎四橫三畫情一一說破諸人好心山僧罪過

法座指座云十年兩度登斯座無等級中成等級一回進步一回高燈王也在階下立

拈香云此一瓣香恭爲祝嚴

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲 陛下恭願建武揚文播駿功於萬世而不拔興禪輔教傳

鴻業於未來之無窮此香仰祝

皇太子尊躬伏願離明內瑩嚴威震驚百里副德深殖景運保綏千秋此香奉爲 闡朝貴官

文武百僚同資祿算伏願長沐天澤中孚久爲法城外護

此香多年拋在窮谷贏得枝葉自除錯向人前賣弄聲價徧墮掠虛早知今日事悔不愼當初

已展不縮爇向爐中供養 前住相州巨福名山建長禪寺 敕證佛國禪師高峰大和尚用

謝負 恩之罪

就座問答不錄乃云向上一著子祕在宇宙間佛祖出興皆默斯要靈山曾不付迦葉少室誰

言授神光西竺乾東震旦繩繩繼繼接響承虛或放或收賓主互換一挨一拶拳陽相酬便見

五家抗行通途變格敲唱彌峻號令益嚴雖然如是終未舉揚此一著子

石上座今晨陞于此座亦只緘默有分莫是失卻開堂祝 聖之儀麼良久云好是無私大法

輪蓋天蓋地助 皇化叙詞不錄

復舉大唐肅宗皇帝問忠國師如何是無諍三昧國師奏云檀越踏毗盧頂上行拈云肅宗綸

言不虛出言中自有仙陀響忠國師高談闊論即得只是未辨鹽水器馬在山野今日不勞恁

麼奏對坐見無諍三昧自然現前以何爲驗擊拂子云九垓歸鼎祚四塞絕烽烟

當晚小參問答不錄乃云空劫那邊一大機古今歷落不遷移騎聲蓋色獨旋幹佛祖當頭眼

似眉山僧當年據此精藍山門朝佛殿厨庫對僧堂翠竹青松左圍右列烟巒雲嶂後峙前橫今日看來皆悉仍舊更不移易一絲毫許且喜與現前大眾同游此不變不異之域焉拈主丈云主丈子冷地不甘出來便道新南禪備只具一隻眼殊不知近日皇風一變佛法也斬新山僧伏聽處分即今拄杖子說其斬新底法門一上卓一下云諸仁者還會麼其或未會更下注腳去也又卓一下

復舉僧問曹山佛未出世時如何山云曹山不如僧云出世後如何山云不如曹山拈云這僧向虛空裏釘兩椽曹山美矣與矣亦例闡其南禪今夜不敢論他出與未出且道畢竟何者是佛喝一喝

上堂佛法無多子只要自知羞昨日晴兮今日雨不妨騎鶴下揚州

聖節上堂千載間出一朝誕彌景運從此日而延日日是好日洪基得其時以建時時是好時祥開慶布塵沙界萬象森羅齊展眉

謝無極無德二首座昭書記玄藏主上堂羣形生於無極誰辨端倪大用現乎無德焉存軌則金章玉章著述難成大藏小藏詮注不得太光生墨漆黑人天眼目沒通塞

多節小參問答罷乃云陰化極時青松翠柏尚變色陽威發處凍木寒叢也生芽煥涼相凌都無朕迹泯其所以寧容識情到者裏沒量大人口似碌盤明眼衲僧只見頭彩惹得皓老不洗布衲汗臭難掩鏡清不展臥單開眼尿床雖然如是冬夜斯臨不可空過別作家宴管顧我此現前大眾去也拱手云仲冬嚴寒伏惟珍重

復舉南華德禪師新遷寶壽恰值新冬示衆云新冬新寶壽言是舊時言若會西來意波斯上船船拈云寶壽示此四句依稀梵語彷彿唐言山僧住院未幾忽逢冬節也有一偈是梵語耶是唐言耶諸人試請聽取新冬新南禪言也是新言喚作西來意北人不夢船

次日上堂陽從陰處生陰向陽中極豎起拂子云且道這箇從那裏得來擲下拂子云九九元來八十一

建武元年十一月二十八日

龍駕臨幸本寺一宿次早命師爲衆入室齋罷上堂拈香祝聖罷跏趺座問答罷乃云一顆靈光輝騰今古明暗通塞不奪其相長短方圓不狀其形蕩蕩恢恢煒煒燁燁天地得此以覆載日月得此以照臨謂之佛祖向上法輪亦名君王中原大寶非是四輪之類寧將七寶而齊此寶現時貴賤賢愚咸荷德此輪轉處妖邪魔外盡潛蹤今日龍馭光幸山中林樾峯巒爭呈吉祥色齋鐘粥鼓亦作歡喜聲直得向上法輪不勞推轉脫體斯彰君王大寶無所希求自然而至正與麼時感天報國一句如何道著卓主丈一下云將此深心奉塵刹是則名爲報聖恩叙謝不錄

復舉大宋孝宗皇帝問佛照禪師世尊六年居雪山所成者何事佛照奏云將謂陛下忘卻拈云佛照對御談玄一時大遇檢點將來未免汗漬聖聰今日忽有人問再住此山所成者何事只對他道低聲低聲天子殿前不容閒話

十二月初三日恭奉聖旨特賜莊田鳴鼓陞堂拈香祝聖罷據座說偈云公憑端自日

邊臻乃祖田園界畔明九穗嘉禾今已熟荷恩何必待秋成。

謝頭首對御乘拂上堂一喝分賓主一句辨教禪峻機穎脫舌有瀑泉且道賓主教禪一筆勾下時又如何擲下拂子云龜毛拂子飄筋斗驚起鳳鸞翔碧天。

臘八上堂六年癡坐莫由擊蒙塞心酸鼻徹骨貧窮窮則變變則通壽地翻身下山去捲捲袖裏裏春風。

上堂卓主丈一下云諦聽諦聽唯此一事實餘二則非真。

歲夜小參問答罷乃云歲驚運轉除夜斯臨西巷東村燒錢爆竹張公李老驅儻送窮一等是大丈夫惜乎被十二時辰使七顛八倒衲僧家慵然游乎象外論甚月之晦朔年之舊新即今不是臘月三十夜誰言來日定是大年朝直饒到得恁麼田地也未免墮在解脫深坑擡腳不起畢竟如何折合去良久云不是桃源客徒勞話洞中。

復舉香林因僧問萬頃荒田是誰爲主林云看看臘月盡頌云萬頃荒田主是誰答道看看臘月盡昨日有人天台來卻得江西一封信。

元正上堂歲華云一變暑運告三陽試把腰間曆日看何日何時不吉祥。

元宵謝新舊兩班上堂進而不違宗退而不失旨左顧右盼都無暗地佛法世法照歸一致以何爲驗以拂打圓相云我見燈明佛本光瑞如此。

上堂今朝二月一人人誰不識二非雙一非雙聰明大王擲算筒雨餘春水漾虛碧。

壽福石梁和尚遺計至上堂丙寅生囉囉哩甲戌滅囉囉哩滅不滅生不生囉囉哩長空萬里

一圓月囉囉哩壽福和尚唱此還源歌南禪恁麼擊節且道是什麼曲調以拂擊床云囉囉哩囉囉哩

佛涅槃上堂鹿苑中鶴林下左出右沒千變萬化而今滅後二千年花柳依依春徧野伏惟釋迦如來和賊捉敗了也。

三月旦上堂睦州和尚云現成公案放個三十棒敢問大衆如何是現成公案莫是輕烟遮柳眼微雨溼花腮底麼莫是三通鼓鳴四衆雲集處麼莫是南禪不說而說諸人無聽而聽處麼阿呵呵就地拾得麗水金拈起卻是新羅鐵。

謝浴主上堂水洗水妙觸宣明十六開士夢裏惺惺卓主丈謝果首座忻藏主至上堂千經萬論不如一默直示單傳也非奇特仰山錯上率陀天觀音院內有彌勒。

浴佛上堂天上下唯我獨尊莫恁渠儂無思算新生孩子擲金盆

天岸和尚計音至上堂相結眉毛山川萬里永絕音容方見道義如是如是不是不是誰知一路涅槃門同條生不同條死

結夏小參九旬克期抱橋柱澡洗三處度夏苜蓿等畫蛾眉祖師門下不管這般膏底只要出格機不受抑勒於規繩不混威儀於茆曠窈窕窈窕別有生涯若能恁地西天蠟人水東土鐵彈子也是閒家潑具諸仁者要知他出格生涯麼逢茶喫茶逢飯喫飯

復舉僧問古德如何是定乾坤句德云十日一雨五日一風拈云不施寸刃坐致太平不無古

德只是未在，何也堯舜之君猶稽於化。

次日上堂，十五日已前，蓋孟口向天，十五日已後，輒卻紫茸氈，正當今日，卓主丈云：寒山不  
管安居事，須彌頂上打鞦韆。

謝五頭首秉拂上堂，鷲嶺以一音演法，衆生隨類各得解，龍山借五音談玄，絕唱古曲無人會，  
且道鷲嶺底是龍山底是，良久云：牡丹一日紅，松柏千年翠。

上堂，卓主丈一下云：會則途中受用，不會世諦流布，又卓一下。

謝鏡空首座兼謝大乘普請，鑿地般土上堂，草淨土院爲延壽堂，眉間劔肘後符，鏡裏空日中  
斗，大人境界超格量，普請諸人自看取，凡地佛地沒高低，淨土穢土非異趣，龍山恁麼舉唱也，  
未免平地起骨堆，以拂擊牀云：山前麥熟桑麻綠，颺下饅頭歸去來。

上堂，舉雲門大師云：佛法太殺有，只是舌頭短，良久云：長也，拈云：雲門舌頭短則上挂梵天，長  
則不出口中，諸仁者要知他舌頭落處麼，啞，羣縣茶瓶。

上堂，寒時普天寒，熱時普天熱，飢逢王饌不能餐，剛言甕裏走卻鸞，咄。

上堂，一葉才落天下知，秋，祖意教意，好肉贅疣，喝一喝。

解夏小參，靈機活脫，大用現前，捏聚放開，不存軌則，滯殼迷封底，莫知其體裁，大覺世尊，二千  
年前，向虛空裏著長短劃，謂之法歲期限，結時有解，三脚蝦蟆飛上天，解時有結，無角鐵牛眠  
少室，倘能於此薦得，便見釋迦老子，七手八腳便露了也，其或未然，山中九十日，雲外幾千年，  
復舉僧問古德，九旬禁足事如何，德云：不墜蠟人機，拈云：古德恁麼答話，只有照壁月，且無吹

### 葉風

次日上堂，拈主丈云：聖制已周畢，人人圖精勤，惟有木上座，依舊黑糝皺，爲是虛度，一夏耶，別  
有長處耶，卓主丈一下云：白日行官路，三更過孟津。

謝新舊兩班上堂，一進一退，水銀墜地，左之右之，盡善盡美，莫謂南禪口門窄，山河大地齊懽  
喜，以拂擊牀，下座。

上堂，人人自有光明在，看時不見暗昏昏，雲門大師和沙賣黃金，只得貪小利，龍山未嘗說著  
運般事，何故，良久云：一舉四十九。

中秋上堂，吞卻三四吐卻七八，吞吐機前眼似眉，廣寒宮裏乾坤闕。

上堂，大道本平夷，愚人自佇立，良久云：鮎魚上竹竿，驢馬追不及。

上堂，拈主丈云：聲前露容，卓丈一下云：句後削跡，畢竟如何，靠丈云：三雙六隻。

開爐謝愿書記上堂，燠涼交替彼此相知，風頭暖處商量得時，以拂擊牀云：三箇柴頭成，品字，  
無賓主話絕，繁詞。

謝後堂首座上堂，一不成二不是，放過一著落，在第二，苟能識得第二去，摩訶衍法無別事，卓  
主丈。

南山和尚遺書至，上堂，化緣已盡撥轉一機，十虛消殞萬象號悲，當頭突出大人相，舜若多神  
笑展眉。

冬節小參，觀一瓶凍，知天下寒，觀一管灰，知天下暖，造化公憑全昭著，已靈神用自現前，海豎

山童悉有其分，寒梅瘦竹，靡不發機。於此薦得，許他聲色，盡中通活路。聖凡魔外，把手遊。雖然如是，明眼看來，也是客作漢。何故未透？祖師關，椀子徒認山河作眼睛。

復舉僧問趙州：如何是不遷義？州以手作流水勢，拈云：明中放開官路，暗裏把斷封疆。諸人向什麼處見趙州？良久云：陽氣發時無硬地。

至節上堂，以拂打圓相云：陰向這裏剝盡不減分毫，陽從這裏生來不添一線，也不減也不添，泥人突出黃金面。

聖節上堂，威音王前地不黃，天不玄，威音王後，坤六斷乾三連，正當今日，又且如何？端拱云：今上皇帝聖壽萬年。

謝四頭首兼拂及靜山首座至上堂，我有一句子，徧界不曾藏，人天眼目藉此豁開，摩訶衍法因此宣揚。建化門中是謂十二分教，輪墨場裏喚作四六文章。龍山與麼說話，莫是好肉生贅，良久云：居山方始知山靜，處世誰能忘世忙。

謝大歇首座至上堂，道人相見時，彼此呈漆桶，無主無賓，非照非用，盤礴大歇場中，不要驚羣動衆。

臘八上堂，昨夜虛空迸裂，星斗失卻光芒，大地衆生都不識，唯有瞿曇自著忙。且道著忙底，是不識底，是以拂擊牀云：梅須遜雪三分白，雪亦輸梅一段香。

東福雙峰禪師遺書至上堂，一株大樹忽凋零，慧日山顛絕楚新。將謂後昆無覆蔭，昌昌嫩桂又逢春。葬于桂昌庵後。

上堂，三通鼓罷，簇簇上來，佛法人事一時周畢。法眼禪師與麼垂示，只知陪金賣鐵，不覺見利忘義。龍山即不然，三通鼓罷，四衆雲臻，不會作客勞煩主人，喝一喝。

除夜小參，曠劫已來，暨于今日，烏飛兔走，暑往寒來，其蹤迹不可追尋。並是收歸舊曆日，從明朝去，至未來際，劫波成壞，晷運改遷，其紀極不可考究。畢竟付在夢幻中，歲夜新臨，元正未至，乃是交頭結尾底時節，不屬過去，亦非未來。喚作現在，也不得到者裏。說甚舊歲今宵去，新年明日來，須知萬物不爲氣候所遷，諸人元與虛空同壽，倘能恁麼，今夜分歲，大家相聚，喫冰霜，樂在其中，其或未然，來年更有新條在，惱亂春風，卒未休。

復舉僧問雲門：如何是雲門一曲門？云：臘月二十五，拈云：太音希聲，該括今古，即今臘月三十日，莫謂又被風吹別調中。

元正上堂，月建丁，今日歲君新制律，物物獻祥符，頭頭擊玉曆，因甚如此，不見道一吉一切吉。

### 山城州靈龜山天龍資聖禪寺語錄

侍者 宏遠 智光 彌浩 等編

曆應二年十月，降敕，奉爲後醍醐上皇，革離宮作梵苑，乃命師開基。康永四年四月初八，新開法堂，此日武將兩殿下光臨法筵。



上堂先伸佛誕儀罷乃云三世諸佛出現於世唯爲說法濟度衆生是以四辯八音並爲說法軌範鹿苑鷲嶺亦是度生道場祖師門下單提獨弄直示本分不同教門然鞠其旨歸亦只爲傳法救迷也以故西天四七東土二三各各相承以傳法爲達磨大師云吾本來茲土傳法救迷情便見少室雪中斷臂黃梅夜半傳衣正法流通接踵躡武樹下石上幽洞深巖無處不建法幢有機必傳心印百丈大智禪師創興叢林以來震旦博桑列刹相望大小雖異皆構法堂舉唱宗乘茲者本寺開基歲序未幾厨庫僧堂三門兩廡雖未畢其功佛殿落成之後先立法堂此所以其表佛祖本意在說法利生者也今當如來降誕日已得法堂周備時節因緣偶諧如合符契又辱

朝廷賜額扁曰法雷宸翰奎畫鳳舞龍翔直得法雨將降天旌瑞兆仁澤普被世仰洪恩如來以法付囑國王大臣慈鑑之効昭著于此懿哉斯法布益無窮所謂法者何耶乃是衆生圓具本法也在聖不增在凡不減大之則彌於宇宙細之則攝於毫釐亘古亘今不變不異諸佛所說大小權實半滿偏圓皆悉此法之名義世間所有艸木瓦礫一切衆生動作施爲無非此法之相用所以道森羅及萬象一法之所印倘能恁麼會得如來未出世度人已周畢此堂未營造法門自現成山僧今日陞于此座別無衷私底法門爲人可說只與本師釋迦如來及盡虛空界諸佛菩薩諸賢聖衆現前大衆外護尊官堂中欄梁燈籠露柱無邊刹海人畜艸芥各出廣長舌同轉大法輪而已正當恁麼時且道成得什麼邊事拈主丈云看看釋迦如來今日在天龍主丈頭上周行七步指天指地普告大衆言我今再降誕此堂新落成賢聖查獲人天交

接人人箇箇都是獨尊牌扁奎畫梁柱方圓物物頭頭靡不演法奇哉奇哉正法聯綿未嘗減靈山付囑自有人婆伽至尊與麼垂示是則是矣只是降生應物底法門也諸仁者要知如來未借胞胎已前消息麼卓主丈一下云諦聽諦聽

結制小參問答罷乃云向上玄關機路絕四維上下一團鐵此關不是拒行人自是行人透不得從上諸大宗師各據一方扶立宗乘皆設此關以接方來千載之下儼然未散天龍門下營功未畢結制斯臨山僧別無作略可施只要諸人在此玄關裏禁足安居莫謂此寺未有僧堂向什麼處剋期修證今夏苟能透得此關還許諸人朝躡高穹以到上方香積厨中喫飯暮縮厚地而歸下界天龍寺裏打眠其或未然一任更立長期以待彌勒下生時何故有利無利不離行市以拂擊牀

復舉僧問雲門大師如何是諸佛出身處門云東山水上行後來圓悟禪師拈云天寧卽不然如何是諸佛出身處薰風自南來殿閣生微涼拈云雲門古曲纔堪聽又被風吹別調中次日上堂西天蠟人冰東土鐵彈子伶俐衲僧不敢介視大衆會麼膝下黃金不博錢八九元來七十二

謝四頭首秉拂上堂天龍有一柄拂子一日分付我此四頭首以作結制佛事便見橫拈倒用點開人天眼目左舉右揮演暢摩訶衍法微妙章句從此出生一代藏教不勞詮注偉哉一柄龜毛拂轉得無邊大法輪今日仍舊還歸天龍手裏亦要此拂子代山僧說法一上以謝頭首道誼舉拂良久云休休太褒卻成貶

上堂無量妙義百千法門，斬新日月特地乾坤。暮拈拄杖，天龍主丈沒人，今日竭底盡掀翻。敢問諸仁者，向什麼處得出氣去？卓拄杖一下云：峯轉疑無路，谿斜別有村。

端午上堂，護身法，肘後符，羣邪自辟，百福克孚，咄，好事不如無。

上堂，梅雨珊瑚，林煙簇簇，谿東溪西，艸肥水足，召大衆云：水牯牛如何牧？隨分納些，即不問，且道即今牛在什麼處？莫是佛殿裏燒香，法堂上聽法底麼？喝一喝。

半夏上堂，僧問：南泉和尚，祖祖相傳，箇什麼？泉云：一二三四五。天龍即不然，今日若有人問，祖祖相傳，箇什麼？便對他道：今朝是六月朔，且道：請說在什麼處？良久云：不是神仙客，徒勞話洞中。

上堂，拈拄杖，召大衆云：會麼？今年六月行冬令，炎帝權威未一新，將謂乾坤乖大信，烏藤仍舊黑，鄒皺卓拄杖。

上堂，列卻文殊眼，塞卻觀音耳，盤礴聲色叢中，贏得干戈自止，不是不是，勇士那肯家中死。解夏小參，問答罷，乃云：佛祖頂額一著子，輝騰今古無差異，迷流日用而不知，坐飯籬邊自餓死。釋迦如來，見機而作，開方便門，年年一夏九旬，教人剋期取證，制約嚴厲，有結有解，結則普天匝地一時結，漫天網子百千重，鐵額銅頭跳不出，解則普天匝地一時解，君向瀟湘我向秦，四海五湖皇化裏，忽有伶俐漢出來，道：丈夫自有衝天氣，不向如來行處行。天龍不肯點頭，在何故？從貧入富，則易，從富入貧，則難。

復舉僧問：趙州和尚，如何是不遷義？州以手作流水勢，拈云：大衆會麼？會則途中受用，其或未然。

山僧更下注腳去也，九夏推移又告秋，不遷之義不曾度，觀音菩薩買胡餅，放下元來是餛飩。次日上堂，西天以蠟人爲驗，東土以鐵彈爲驗，天龍門下今夏只以無驗爲驗，因甚如此，不見道：官馬不用印。

中秋謝宋船綱司上堂，普天匝地一秋光，不動扶桑見大唐，明月團圓離海嶼，滿船官貨孰私商。

重陽，謝新舊兩班上堂，一進一退不動纖塵，左之右之立處即真，欲識箇中消息子，重陽九日菊花新。

上堂，拈拄杖云：一徑直二周遮，放下也綿綿密密，拈起也吒吒沙沙，劃一劃云：本店賣買分文不賒。

冬至小參，烏飛兔走，屈伸仲冬，風逼離頭，吹簞篋，徹骨寒來能幾人，剛言一物黑如漆，諸仁者還會麼？苟能會得，許他使得十二時辰，不爲陰陽所轉，七十二候二十四氣，咸歸掌握之中，誰不自家戲具，何妨以萬象森羅爲伴侶，以四相遷變作佛事，雖然如是，更須知衲僧家別有生涯，始得，且道：知有底人，向什麼處行履？良久云：曙色未分人盡望，至于天曉只尋常。

復舉僧問：首山，如何是學人親切處？山云：五九盡日又逢春，僧云：畢竟如何？山云：冬至寒食一百五，拈云：首山和尚屋裏開金玉鋪，當頭賣與此僧了也，可謂善買之家，不留死貨，子細檢點，未免貪小利失大利。

次日上堂，看卻一日風雲，驗取一年氣候，此是世俗底，能觀時節，因緣識得佛性深義，謂之出。

世底，且道世俗底是，出世底是，咄，祖師門下不管者般閒事。

謝四頭首秉拂上堂，諸佛出廣長舌，皆具四無礙辯，演暢大法，天龍不動舌頭，別有四無礙辯，舉揚宗猷，珍重三世諸佛，灼然輸我一籌，卓主丈。

上堂，世尊一日陞座，衆纔集，迦葉白槌云：世尊說法竟，世尊便下座，召大衆云：會麼？其或未然，山僧爲衆分疎去也。朴涼風度，弊猶多，作法於貧，將若何？遂見二千餘載後，三尺杖子攪黃河，臘八上堂，六載辛酸，世妄傳，誰言悟道出人前，吠虛唯實，至今日，雪在山兮星在天。

上堂，擲劍揮子太虛，不論及與不及，英靈黠兒猶自行立，喝一喝。

除夜小參，問答罷，乃云：燠涼晦朔，春夏秋冬，終而復始，始而復終，始中有終，終中有始，空索索，赤條條，曠劫前莫見其太初，未來際罕知其紀極，到這裏主歲神將罔所措，聰明大王擲算筒，古人不獲已，剛言十世古今始終不離當念，且道當念未生時，十世古今何處得來，驀拈主丈云：我此主丈子，忍俊不禁，出來道：今歲今宵去，明年明日來，知者般事，便休，更弄鞏縣茶瓶，作麼，山僧唯唯，伏聽處分，何故不見道，當局者迷，傍觀有眼。

復舉，僧問佛日弼禪師：如何是毗盧印？日云：艸鞋踏雪，僧云：學人不會，日云：步步成蹤，拈云：佛日和尙開口見膽，不妨赤心片片，若是天龍，又且不然，如何是毗盧印？印文已露了也，學人不會，幸是不會，會即冬瓜印。

歲節上堂，豎起拂子云：舊歲向這裏去，新年從這裏來，試向者裏高著眼，元正啓祚太奇哉，以何爲驗，以拂擊牀云：春信潛通雪裏梅。

元宵謝新舊兩班上堂，舉雪峯一日陞座，召大衆云：看看東邊底，看看西邊底，倘若要會，拈主丈擲下云：向者裏會取，拈云：雪峯和尙一舉兩得，更無剩法，山僧別無伎倆，只要諸人溫故知新，召大衆云：看看東邊底，看看西邊底，會麼？良久云：我見燈明佛，本光瑞如此。

上堂，拈拄杖云：見麼？卓一下云：聞麼？知我罪我，其惟主丈乎？靠丈下座。

佛涅槃上堂，二千年前野火燒不盡，二千年後春風吹又生，柳堤花塢芳艸岸，一任波旬舞袖輕。

三月旦上堂，奉謝檀那光臨，花腮含露媚，柳眼帶烟眠，將謂東皇行此令，看來都是舊青氈，以何爲驗，看看三世如來歷代祖，毘耶室裏打鞦韆，卓主丈。

太上天皇臨幸上堂，春光與祥光相映，和氣與瑞氣相浮，奇哉斯吉兆，諸人會也不，中原大寶自然至，遼天高價有誰酬，會不會，酬不酬，卓主丈云：塞北安南一道收。

退院上堂，不効汾陽付屬誠，七年業債董修營，今朝始有爲人處，三下鞦韆退鼓聲。

### 再住天龍資聖禪寺語錄

侍者 周 澤 編

師觀應二年辛卯七月二十日陞座，拈香云：此一瓣香，恭爲。

今上皇帝

太上天皇祝延 容算萬歲萬歲萬歲恭願 聖德不渝永膺神符之籙 皇謨不變久受天授之圖

次拈香云此香奉爲 征夷大將軍及兩副將軍資倍祿算伏願 身宮久保不失輔上撫下之洪勳智海彌深永乘崇教興禪之大願

又拈香云此香未歸掌握徧界都是真熏纔插爐中一會只成假弄今日拈出供養前住巨福名山 敕謚佛國禪師高峯大和尚聊表世俗禮儀

師就座問答罷乃云竺土大仙心東西密相付體量廣大機用靈明法界凡聖含靈咸受他恩力世間興亡治亂不擾此封疆謂之大解脫門亦號正法眼藏三世諸佛證此以震大法雷降澍一味平等之甘雨歷代祖師悟此以開大鑪鑪鍛鍊鐵額銅頭之俊流便見五家七宗燁燁乎續祖燈於萬世顯演密說恢恢焉張教網於羣機偉哉此箇大仙心能成如是大佛事雖然與麼只是成得權化門中事天龍今日爲諸仁者指出佛祖頂額一著子去也卓丈一下云還會麼其或未會更下箇注腳又卓一下敍謝不錄

復舉障蔽魔王與諸眷屬一千年隨金剛齊菩薩求其起處不得一日因忽得見問曰汝當於何住求汝起處不得菩薩曰我不依有住而住不依無住而住如是而住拈云金剛齊菩薩是則固是要且只入佛界未入魔界山僧在此山中十餘年有時依有住而住有時依無住而住與諸魔外不相誰何何故豈不見毘耶大士道一切衆魔及諸外道皆是我侍也山僧與麼體

裁與金剛齊菩薩行履還有優劣也無良久云但見皇風成一片不知何處是封疆

新開僧堂安奉聖僧云識心滅盡現威儀內外圓明發了知好是天真三昧力無邊利濟適機宜恭惟 西天鼻祖摩訶迦葉尊者形容長耀金色爲稱鬚髮自除袈衣著體分半座處十二

頭陀悉放真光拈一枝時百萬大衆同推微笑正法眼藏八字打開教外宗風十方流布詢其祖宗繁興之來歷徧托尊者廣大之庇蔭其德至矣感而遂通其慈浩然請則必應將謂鷄足山中遐俟慈氏下生且喜天龍寺裏正現聖僧全體大坐不動覆蔭後昆於億萬年真儀常存紹隆玄旨於未來際畢竟如何保任此事去休言選佛難及第那箇衆生心不空

八月旦啓建御忌上堂雨灑林丘秋色入細顯氣領天涼騰掠地於此薦得法爾玄談歷劫未墜其或未然御忌看經今日爲始是是不是不是拈杖云天龍不合口吧吧無端笑殺拄杖子靠杖下座

中秋上堂靈山話月權實偏圓分區域曹溪指月體裁手段不同途指話機先消息子佛祖也不敢名模只如恭爲 先皇從月旦至今日看閱大藏真詮法界含情亦同受此洪因也無以拂打圓相云今夜一輪滿清光何處無

八月十六日就多寶院陸座拈香云此香本來寥廓絕名相攝化門中喚作香三世諸佛不知其價歷代祖師只傳其芳今日拈出燕向寶爐供養閻浮攝化盧舍那如來千百億化身釋迦牟尼大覺至尊云所哀善利併用回嚴 後醍醐天皇覺位恭願 神儀與法界含情同受此真熏頓成其妙果

就座問答罷乃云法身師毘盧主大包方所細入無間赤條條空索索非凡非聖求形名於何邊亘古亘今絕朕迹於當處佛佛出世顯演密談只此說得他光影邊事祖祖相承單提直示未免實弄他天真靈機倘能與麼會得上無攀仰下絕已躬獨脫無依不借伴侶更無一法作障礙直得以萬象爲戲具成就也由我破亂也由我乃知聖凡昇降世界轉變皆悉從一妄生一妄亦無起處迷之則幻化輪回甘自沈溺悟之則本有妙用自然現前所以道夢中明明有六趣覺後空空無大千若是吾家真種艸夢中覺後俱不坐在且道他向什麼處行履以拂擊床云須知海嶽歸明主莫謂干戈致太平

散說夫以真淨界中無他無自豈容怨親於其間哉一迷纔生萬境隨現世界治亂人倫怨親虛妄相酬虛妄相奪若有靈根者直下知非一念不生前後際斷若是淺識之流被此幻妄所縛無有休歇或有似怨而親者或有似親而怨者怨之與親都無定相此所以其怨親俱是幻妄也元弘大亂之時征夷將軍特奉敕命速亡國敵因茲官位日日遷喬名望人人改觀忽因讒虎長威聲遂得逆鱗難回避釋其由來併是疾成功業甚愜叙襟之所致也古者道親是爲怨媒其此之謂歟于茲祥瑞雲散龍馭不虞幸南山篤韶聲消風聲不復還北闕武家大息以謂悲哉臣遂墮譏諛陳謝不及永沈逆臣之謬而已以故武家愁歎切於常流不敢以恨緒介懷自瀝丹襟特修白業專欲奉祈於覺果遂見建大伽藍作大佛事暑往涼來又逢南呂一十三回御忌忽爾斯臨五千餘卷真詮仍舊看閱加之新開僧堂以安清衆不翅今日一會佛事盡未來欲奉資薦神儀謝其追修懇切之志偏出君臣不和之中以此思之可謂怨是

爲親媒也然末運變移三寶諸天亦不奈何世復騷亂人民不穩是以今日佛事不如武家願望雖然懇志之所之聊表供佛齋僧之儀仍命小比丘某陞于此座舉揚宗旨某內無蘊藉之德外欠穎脫之才只因宿世緣遇使然忝沐先皇仁顧久矣已迨八旬暮齡自揚再住家醜此亦前緣之所使然也寔非聊爾苟且之事縱雖不受台命卑情寧忍守安間乎所以不敢固辭出來納敗伏乞衆慈各垂亮察恭惟後醍醐天皇德化冥符天選聖明不辱古風皇運時至再建一統之洪基鳳曆新開重踐萬乘之寶祚四夷欽衽萬品披襟將謂堯風永扇而無窮豈度舜日暫出而忽隱熟思其態度寧謂偶然然而乎料知神儀假價濁世業緣早預淨邦嘉會非是聖運短祚之因由只是衆人不幸之標幟者也果然登霞之後至今世未靜謐編白之流多是失所衆心攀慕難得而止矣上來所伸皆是夢中夢事也縱雖實有既往不咎況是夢事耶人間第一輪王亦是夢中之寶位梵世最高天王亦是夢中之快樂是故釋迦如來棄輪王位入山苦行其意何也蓋爲教人各知無上覺王超越世間尊貴故耳四部雖異既稱佛弟子其豈不効其行藏哉恭願上皇頓轉塵機不拘妄宰速翻業識證得靈知超越怨親差別之昏衢優游迷悟一如之靈域無忘鷲嶺付囑生生保護法門不動龜山寂場利利濟羣類武家奉祈願望既爾如斯上皇觀念寧不爲之消融哉所修善根固非輕渺諸佛大慈必當冥垂感應矣若爾則干戈永止四海清平災厄咸消萬民康泰武運綿綿永傳奕世願心浩浩普及含情

復說偈曰人人有箇無盡藏聖賢凡庸無增減河沙德用盡包容謂之不思議實相或現重重

樓閣雲、或出種種音聲海、大千經卷攝一塵、一塵徧在經卷中、一一文字現樓閣、一一樓閣演法門、如是法門不于舌、如是樓閣非造作、今此伽藍亦如是、大衆於中轉大藏、伽藍經卷互融攝、明明彌滿虛空界、偉哉出格大佛事、神儀直入如來地、普導法界迷倒類、怨親平等成覺果、佛法王法不下衰、百千萬劫莫窮盡、三寶證明不可疑、更爲後昆立公憑、卓主丈一下。

夢憲正覺心宗普濟國師語錄上 終

夢憲正覺心宗普濟國師語錄 下

住持天龍禪寺小師 妙 葩 編

陞座

慶讚法華懺摩香詞不錄

靈光獨耀、非暗非明、清寥寥白滴滴、罪雲素來絕點、懺雪何勞積功、不可以解脫貴乎諸佛、不可以淪溺賤乎衆生、釋迦老子、不知事從丁寧起、四十二年、東街西媚、逗到法華會上、不奈、桎索俱露、卻言正直捨方便、但說無上道、上是天下是地、喚甚作無上道、七論玄談、都是太虛翻、三周妙悟、靡不好肉贅疣、龍女脫鱗、未足爲奇、慢者退席、卻較些子、只如今日諸仁者、習法華三昧、懺滌愆尤、是方便門耶、是無上道耶、願視左右云、露地白牛、弄蹄行、雪山步步無開草、復說偈云、人人有箇一卷經、古今歷落常現前、不是靈山所說底、亦非葱嶺帶將來、蕩蕩迴出思議表、是名妙法蓮華經、都無文字可書寫、更向何處讀此經、忽有宿殖深厚人、當頭能信有此經、不可書處下得筆、不可讀處鼓得唇、如是書寫如是讀、無功之功德、大利、茲功至竟歸何處、黃頭碧眼也不知、卓主丈一下。

太平和尚小祥忌請香詞不錄

諸佛未出世，是處山凸谷凹，祖師未西來，諸人頂天踏地，木鏡照素面，幸自可憐生，諸佛已出世，橫說豎說，也是白日點燈，達磨已西來，以心傳心，大似河頭賣水，一家有事，百家亦忙，便見行棒下喝，豎拂擊牀，簧鼓多少人去，將錯就錯，有甚了期，將拈主丈，看看太平和尚，今日在瑞峯主丈頭上，掀翻先賢窠窟，直教諸人知生死禍福，總是太平無事時節，諸人還知麼，卓一下云：太平元是將軍致，不許將軍見太平。

復舉白水仁和尙，因設洞山忌齋，有僧問曰：先師還來也，無仁云：更下一分供養著，拈云：白水和尙，可謂報恩太過，卻成怨，即今若有人問，今日設此忌齋，太平和尚還來也，無，便以一絕古詩呈似他，少小離家老大回，齒黃面皺鬢鬍，兒童相見不相識，卻問客從何處來。

性喜禪定尼小祥忌諱

普天匝地，恁麼熱，富士山頭猶有雪，寒中暑也，暑中寒，都無一定底時節，倘能於此著得頂門眼，方信法無定相，逢緣即宗，便見生死去來，安危得喪，是自家遊戲三昧，有時東倒西擺，四海五湖，皇化裏，有時騎聲蓋色，毒龍行處，草不生，成就也由我，破亂也由我，權柄在掌握，塵塵建法幢，雖然如是，更須知有向上真歸處，始得諸仁者要知真歸處，麼擊拂子，漢不收兮，秦不管，又騎驢子下楊州，彼謝不錄。

復說偈云：一段精明絕名相，古今寥廓獨光輝，乃是諸佛出身處，含生以此爲所歸，非男非女，非神鬼，左轉右轉，露真儀，謂之摩訶般若力，亦曰廣大無緣慈，迥然超過言象外，大人境界沒人知，爲君今日盡情說，日出東方夜落西，卓主丈一下。

上杉法禪禪尼小祥忌諱

拈香云：此香不是人間所有，亦非龍宮出來，信手才拈起，真熏滿九垓，茲者奉三寶弟子侍中藤某人，今晨伏值先妣法禪禪尼小祥忌辰，借手蒸此妙香，供養本師釋迦如來十方三世婆伽至尊，圓覺楞嚴維摩法華一切妙典，迦葉阿難四向四果，諸賢聖衆，文殊普賢三賢十聖諸大菩薩，所鳩善利，併用資薦先妣禪尼覺路，伏願覺靈與法界含情，同受真熏，共成道果，就座問答罷，乃云：妙性圓明，離諸名相，切忌白日挑燈，經行靈光，獨耀迴脫，根塵可憐，特地捏目見月，不捏目不挑燈，生死禍福何處得來，所以道：夢裏明明有六趣，覺後空空無大千，倘能於此薦得，西施拈卻蓋面帛，元是隣家老母嫗，寶蓮未嘗陷泥犁，龍女誰言成正覺，玉樓金殿，劍樹刀山，任意逍遙，都無忻厭，謂之無爲無事大人境界，更論甚麼五障三從，正當恁麼時，修善報恩，還有功不浪施分也，無卓主丈一下云：換骨洗腸，投紫塞，洪門切忌更銜蘆，贊經彼謝不錄。復說偈云：十方薄伽梵，一路涅槃門，去來非別處，縛脫共同源，徧界不曾藏，覓則暗昏昏，大而入纖芥，細而蓋乾坤，與麼照破者，謂之大覺尊，與麼受用去，乃是大善根，以此資三有，以此報四恩，功德沒涯量，贊歎難爲言，我今自話墮，笑倒鐵崑崙。

法海禪師忌諱

拈香云：此香其根廣大，豎窮三際，橫亘十方，其蔭洪荒，上覆高穹，下載厚地，茲者平安城佛心禪寺住持比丘某，今晨伏值先師法海禪師大和尚三十三回之遠忌，借手山僧蒸此寶香，供養現座道場，當來導師彌勒慈尊，現在應迹，釋迦牟尼如來等，微塵法界十方三世諸薄伽

梵華嚴般若法華涅槃等龍宮海藏諸部真詮文殊普賢地藏觀音等諸大薩埵西天四七東土二三繼踵傳宗歷代祖師先師法海禪師大和尚所冀香雲徧布無邊含情咸霑龍華三會之慈雨法海彌深未來永劫遐通天池一派之正流就座問答罷乃云威音以前也與麼不添一絲毫威音以後也與麼不減一絲毫也不添也不減空索索赤條條洗滌而匪清塗糊而匪汗離離離模迥出心識機括至淵至奧寧借言詮梯媒雖然如是苟能透過荆棘林處處綠楊堪繫馬深玄法門利說衆生說廣大佛事一成一切成不藉福和利利度羣動毋勞號令塵塵建法幢山野恁麼告報諸仁者還知法海禪師冷地聽得橫點頭麼若也知得山僧今日不失利其或未然真淨界中纔一念閻浮早是八千年卓主丈一下

復舉耽源和尚忠國師忌日設齋有僧問國師還來不源云未具佗心僧云又用設齋作麼源云不斷世諦師拈云耽源和尚不斷世諦即得若是佛法遠之遠矣今日丁乎法海禪師遠忌門下高弟同設齋會且道是佛法耶是世諦耶以拂擊牀云三千界外放光明雙六盤中休喝彩

康永改元壬午仲秋初五日欽奉

聖旨慶讚京城東山八坂寶塔塔中國繪兩界諸尊

拈香云此香微塵刹界求難得大願海中流出來燕向爐中恭爲今上皇帝太上天皇供養本地法身法界塔婆釋迦如來真身舍利胎金兩部無邊諸尊三世出興諸佛如來十方常住諸賢聖衆次伸祝貢梵天帝釋四大天王云云樽桑顯化伊勢太神宮八幡大菩薩等大

小福德一切神祇伏願洪慈保持增長彼大願力諸障消殞圓成此勝善根

就座索話無縫塔裏不通一線佛事門中且容相見莫有袖中藏漫刺底麼有僧出衆問云修塔止斧供養擇良辰朝旆臨筵山川生瑞鶴人天側耳請師提綱答云日月光天不老山川布瑞地無秋進云佛事門中還有西來祖意麼答云鐵牛擊出黃金角進云與麼則但見皇風成一片不知何處是封疆答云切忌管裏見蒼穹進云記得僧問石門聰禪師如何是無縫塔門云直下看的當也無答云白日打官更進云僧云如何是塔中人門云退後退後意在那裏答云半開半合進云學人即今咨和尚如何是無縫塔答云大家在這裏進云如何是塔中人答云當面蹉過進云和尚恁麼答話與古人是同耶是別耶答云拈卻蓋面帛看進云只如今日慶贊浮圖莫便是無縫塔麼答云就地拾得麗水金拈起卻是新羅鐵進云莊嚴既盡善美供養亦致勤渠畢竟成得什麼邊事答云萬象隨喜虛空證明進云不翅學人開普味普令含識結良因答云大商不見小利又有僧出問云浮圖壯麗周畢慶讚法筵儼然好是時節願聞提唱答云既自能如此我今不再三進云一句全提萬機寂削學人猶遲疑更請垂慈誨答云左盼千生右顧萬劫進云昔年雙林傳大士旋繞靈塔七佛前引維摩接後未審是什麼標格答云彩氣夜常動精靈晝少逢進云今日八坂勝伽藍慶贊靈塔王臣歸崇人天感動還有功不浪施分也無答云大功不宰進云鄉談相似州縣不同昔年底便是今日底便是答云六隻骰子滿盤紅大都只是見頭彩進云與麼則古今無異路達者自同歸答云君向瀟湘我向秦進云上來蒙指示猶墮功勳邊如何是向上事答云八角磨盤空裏走進云不因夜來鴈爭見



海門秋，答云：君子不介視，乃云：群生大本諸聖真源，亘古亘今，獨露獨耀，不借伴侶於萬法，不昧靈明於諸緣，恢恢焉彌綸十虛，蕩蕩乎通貫三際，不可以識識，凡庸爭得梯航，不可以智知，聖賢亦難鑽仰，絕梯航時，機路自活，難鑽仰處，車馬潛通，倘能於此承當，觸向都無適莫，便見本分地上全開佛事門，佛事門中直示本分事，淨穢元非異域，處處舉揚祖宗，聖凡同發，一音時時演暢玄旨，正當與廢時，且道功歸何處，豎起拂子云：天高羣象正，海濶百川朝。散說并附于後今日法會旨趣無佗，只爲慶讚此塔婆，成就其善利而已。夫塔婆者梵語，此云高顯處，亦名功德聚，或就外相以立名，或約內蘊以明義，蓋是標幟，高顯遠望，近瞻俱得益，體性融通，大功至德，悉周圓故耳。諸佛菩薩，各各三摩耶形，以此爲本形，一切衆生，種種五取蘊體，以此爲總體，匪管凡聖含靈，能具斯體相，至于草木瓦礫，亦受其形容，所以謂之法界塔婆，十方世界，弘法利生處，靡不建立之，諸聖敷演真詮，祕典中皆以讚歎矣。祖師門下別無模樣，當頭指出箇無縫塔，通上徹下間，不容髮，橫徧豎窮，杳無見形，性具德用，既絕思議，修飾功動，那有限劑，端由亘述梗槩在旃，伏惟 征夷大將軍，左武衛將軍兩殿下，稟英傑於天賦，不玷武門遺風，殖善本於夙生，相符鸞嶺付囑，左武右文，堪爲王室機括，內真外俗，寔是法城金湯，茲者元弘以來，國家大亂，想料賢懷，爰有介惡，祇是天災起於不虞，傷害人民，不鈔焚燒，舍宅幾何，因此惡緣，翻發善願，其善願者，所謂欲於六十餘州內，每州建于一基塔者也，其旨趣不敢爲私家欲祈佛法王法同時盛興，其回向亦非爲自利欲濟此方佗方一切含識，具陳精悃上達 聖聞，其志協 叙襟，亦同發大願，乃命主幹於武將，以成結構，於諸州，或新樹營功，或重補廢址，今此

當山靈塔是其一也，因茲數年漸補頽落之積弊，今日特旌供養之彝儀，朝旆臨筵，爲法作證，梵苑添彩，令人觀光，龍象沓來，人天交接，伶倫奏樂，足以表世俗諦中有真諦，清衆諷經，亦堪示真空門裏開化門，法會九成，叙願萬足，此乃冥顯感應之所致也，豈非君臣道合而使然乎，本寺堂頭高山和尚，發願修營此塔，已迨四十餘回，累年與隆大功併歸高德也，今日慶贊唱導事于別人乎，雖然老師自伸謙讓之忱，遂舉山野以代焉，是以叨膺 詔命，難爲固辭，不遑揆愚，慮出來納敗闕，伏乞衆慈各垂亮察，釋夫七百年前靈塔草創之時節，乃是六十餘州佛法流布之最初，上宮太子之建此塔也，大悲願力，深熏羣品心，淨藏上人之祈此塔也，靈驗嘉聲，普落諸人耳，偉哉斯塔，迥出常標，外構五重層級，內納三粒馱部，內外相稱，全露法身之靈場，輪圓具德，宏開祕藏之玄闕，又見奉安兩界覺皇四佛尊像，各具五智之深理，宛爾斯彰，互爲主伴之化儀，儼然可見中心一柱，圖三千諸佛，邊隅四柱，繪三十七尊，過現相在，彼彼含攝，猶如鏡燈，橫豎無礙，重重互融，不異帝網，八祖列坐四壁，八天圍繞四方，當知諸聖諸賢，同會常恒談祕談玄，何疑善神善祇降臨，日夜護人護法，奇瑞殊特，自是集而大成焉，褒美稱揚其豈言之所及哉，治承正應此塔屢罹回祿，太子願力堅固，不成燼灰，累朝尊崇，至今相續，叙信彌篤，嚴飾轉新，建久年中，鎌倉右幕下深生信心，特伸供養，自爾以降，武家渴仰亦相繼，靈塔紹興未嘗休，於戲如來，以佛法付囑國王大臣，有力檀那，金言不虛，可得而驗焉，昔本朝伽藍興建，此地是爲權輿，今諸國塔婆供養，此地亦作先鋒，由其感應冥符，知此緣遇際會，佛法流布既始，從此精舍，佛法再興亦資于此精舍者歟，阿育王曾造八萬四千塔廟，皆擇

八祥之靈地以爲址基。博桑國新立六十六箇之浮圖。先於八坂之精藍而修供養。乃知此地元龜八祥之德。故自得八坂之名者也。想厥來歷固非苟然。教中云。正法住正法滅。須以塔婆與廢觀焉。既是塔婆興隆得時。應知如來正法住世。彼法勝寺寶塔。去春罹火災而壞滅。貴賤皆同悲歎。此法觀寺寶塔。今日遂供養而再興。緇素靡不隨喜。兩塔壞滅與再興。示相雖異。諸人悲歎與隨喜得益是同。以此思之。可謂塔婆興廢俱是佛法流通。所以道。乃至童子戲聚沙爲佛塔。漸漸積功德。皆以成佛道。童子之戲尙成覺因。何況朝廷。叙願武門精誠乎。聚沙之功亦重善種。何況頒賜田園。割施財產乎。然則不用備慶贊於多言。偏是仰證知於三寶而已。莫謂塔婆唯興六十六州。須知周徧法界。塵塵廣開建化門。誰言供養聊期一時一會。亦當窮盡未來。世世常作大佛事。以此鴻因祝延。皇祚金輪統御。踵三代之嘉猷。寶曆綿洪。享萬年之景運。憑茲善利。保裕武門。久佐帝道。榮耀傳家。永歸祖風。智才出格。仗其威力。護持法門。伽藍肅靜。魔孽潛蹤。僧侶安寧。宗猷接躋。散厥餘惠。賑濟國土。干戈永止。朝野樂清。平災禍。咸消黎庶。得康阜。併斯功德。回向羣生。怨類親類。齊出塵勞。有緣無緣。同圓種智。

復說偈曰。人人有箇無縫塔。八面玲瓏不覆藏。廓落虛通無內外。湘南潭北絕封疆。卓然獨立乾坤外。塵塵刹刹放靈光。著眼看來沒形段。沒形段處露堂堂。大而非凡入纖芥。小而非凡小裏十方。羣生托庇未嘗諱。今日分明爲舉揚。一塔出生無量塔。諸塵擎出古佛場。好是洪庥莫窮盡。佛運皇基共久長。卓主文下座。

覺皇寶殿慶讚陞座。康永四年八月晦日。此日太上天皇臨幸。

拈香云。此一瓣香。根蟠實際。蔭覆高穹。無邊德用。集在其中。燕向爐中。恭爲

今上皇帝。太上天皇。祝嚴聖壽無疆。洎文武百僚。增福增壽。

次拈香云。此香。應時變化。沒蹤由。信手拈來。歸掌握。燕向寶爐。供養。現座道場。毘盧遮那。如來。千百億化身。釋迦牟尼。大覺世尊。普賢菩薩。文殊菩薩。等諸大薩埵。迦葉尊者。達磨大師等。歷代祖師。及微塵刹界一切三寶。所鳩善利。恭爲。後醍醐上皇。莊嚴覺果。次伸祝貢。大梵尊天。帝釋尊天。四大天王。日月星宿。火德星君。天界列位。諸天仙衆。地界所屬。一切靈祇。水界所屬。諸大龍王。栴檀顯化。伊勢太神宮。八幡大菩薩等。大小神祇。普用資薰。同垂保護。遂趺坐。索話。祖令當行。千聖結舌。唱和門中。且容擊節。莫有同聲相應。底麼。問答罷。乃云。玄機透脫。融萬象於目前。至鑿高明會。千差於物表。一透一切透。一明一切明。豈抹橫該。無適不可。左顧右盼。克逢其原。不費纖毫。廣修沒量佛事。不動一念。普度法界衆生。直饒恁地。達得去。若入祖師門下。也是階下漢。直得淨裸裸。絕承當。赤洒洒。難近傍。世間樞要。總不相干。出格風流。亦無交涉。更說甚麼。廣修佛事。普度衆生。好是無爲無事。大解脫門。倘能入得此門。皇家也無爲無事。佛家也無爲無事。一切災厄。不礙自消。萬古微猷。不求自備。三世如來。共默斯要。歷代諸祖。亦只端拱。小比丘某甲。今日奉。詔陞于此座。難容拱默。且通一線路。開闢此大解脫門。去也。以佛擊牀云。鳴弓已掛狼煙息。萬國歌謠賀太平。宣讀御願文并讀願文。

復云。妙性圓明。離諸名相。本來無有世界衆生。此是如來不欺之語也。既無世界。安有興亡治亂之爲。變乎。亦無衆生。寧容彼我。冤親於其間哉。雖然如是。一翳在眼。千花亂墜。此性隨緣而

現諸名相，名相轉變，昧卻圓明。若是悟達之人，安住寂滅性中，而起恒沙妙用，隨順世間幻相，而利濟顛倒衆生，不以虛妄轉變，擾乎其懷。蓋其國土安危，自佗逆順，皆爲吾家之戲具耳。迷妄之類，不肯信及，蔽無相而爲有相，枉妙用而爲妄用。是故世間否泰相奪，衆生業債相酬，曠劫輪迴，因循至于今日。未來沈溺，出脫待於何時。然其流轉之相，無有實體，如夢幻似空花。若究其本，則禍之與福，同源。冤之與親，一體。佛祖出興於世，不爲別事，唯爲令衆生悟入此同源一體之域而已。爰元弘以來，天下大亂，不翅戰場，兵卒多殞，軀命至于山野，飛走亦羅其餘殃。神廟佛堂，朱門白屋，或爲兵火所焚，或爲賊徒所壞，嗚呼災之害物，莫加於此矣。釋其天災之來歷，出乎世運之否屯，所謂否屯不從外來，此乃積劫業債之使然也。業債因由，亦非佗作，只是一念無明之所感也。自非夙植深厚之人，莫能知之。或有知而故犯者，佛祖亦未如之何也。已矣。茲者征夷大將軍源朝臣，左武衛將軍源朝臣，眞智內熏，靈機外發，自懷慙愧，欲謝慙尤，具陳丹悃，上達。 叙聞所伸懇志深協， 叙襟乃奉。 聖旨於博桑國中，每州建立一寺一塔。普爲元弘以來，戰死傷亡一切魂儀，資薦覺路，又曆應年中，特立。 叙願革此皇宮，以作梵苑，奉爲。 先皇嚴飾寂場，又命武家董其營造，經年未幾，不日成功。寔是君臣道合，天龍保持之所，致耳。便見物不終否，惡事轉成善事。法無定相，逆緣卻爲順緣。此所以其禍福同源，冤親一體者也。兵革之亂於世，非適今也。上古亦夥矣。原其端緒，或爭國祚，或誅叛逆，其中一負一勝，只是增業增冤而已。未聞轉惡緣而爲善緣。如今日也。必以佛化之行，未有出乎苟且之中。其必得處待時而興焉。嗚昔。 嵯峨天皇御宇，有慧尊上人，奉敕渡于大唐，流通佛法於本朝。

參鹽官安國師，信有教外玄旨，仍請其會下上首義空和尚來于本朝，敕以東寺西院爲安下處。時時召對鳳闕，于時。 皇后宿植開發一面契悟，乃建精舍於此。嵯峨以號檀林，請彼禪師住持檀林寺內有十二院。 皇后居其一院，因稱檀林皇后，其事具載石碑。而在東寺，其碑表題云：日本首傳禪宗記，然禪宗興行未得其時。 皇后登霞之後，檀林精舍漸漸荒零，或爲郊蕪，或爲民居。 嵯峨聖代已後，迄于四百載，禪院聿興，謂洛之建仁東福相之壽福，建長是也。自爾以降，大小禪刹，徧於天下。七十年前，後嵯峨院卜皇居於此地，乃是檀林寺一院之故基也。 龜山法皇亦相繼以爲行宮，其內有壽量院，分南禪寺僧二十員，而安此院。今之法堂所在，便是壽量院之舊趾也。是知此地將興大叢林，而豫有新兆矣。遂見又革此行宮，作大伽藍。禪宗首傳本朝，則此地爲先鋒。禪宗旺化於世，則此地亦爲殿後。此乃得處得時，以興佛法之驗也。理自昭著，其誰疑諸。本寺修營已及太半，朝廷。 叙願必當圓成，山名寺號未揭牌扁。今上皇帝先染宸筆，佛殿法堂署額，左梁右樞誌文，以至聯芳洞鑿之表題，並是。 太上天皇之奎翰也。聖志懇誠，斯彰。祖宗光幸可見，熟思此伽藍之興建，偏起乎大亂之因緣，其豈非明王賢臣，外逆內順，相爲表裏，扶豎宗猷者，恭惟。 太上天皇善因冥熏，聖德顯布，膺神符之籙，受天授之圖，以理考之，則非先皇之貴裔，以義思之，則猶繼體之副君。因茲今月伏值。 先皇七周御忌，今日儼然。 臨幸當山，特命小比丘某甲，陞于此座，慶讚精藍，奉爲。 尊靈莊嚴覺果，某既爾叨膺開山，不敢自揆鄙野，舉揚正法上答。 洪庥，復請諸龍象同作證明，供佛施僧，及乎諸山，看經誦咒，轉於全藏，大赦囚虜，出囹圄，免苦楚，特命伶倫，翮寬羽，奏簫韶，豈止

一獄囚者乎。法界含情同出樊籠。寧限四部份倫乎。山河草木齊起鼓舞。真俗互融。事理相攝。以此供養。三寶供養中之最上也。以此慶贊伽藍。慶贊中之純真也。加之龍取入山法筵。添彩台旃。列砌衆會。觀光顯而所見。尚非言可陳也。冥之感應。奚有不然者哉。天龍雲集。賢聖光降。證明今日佛事。不言而可論焉。法會彝儀。既是盡善盡美。所哀鴻業。當知無量無邊。曠劫業根。亦應拔出。矧是元弘以來。德尤乎。無始積妄。尚可消融。何況一旦介爾情執乎。恭惟後醍醐上皇。天選風質。物外神標。德蓋二儀。明並兩曜。或感或否。隨緣玄化。難知。是聖是凡。出格高行。莫辨。祇因寂運。不得於時。遂見仁風。欲扇而止。嗚呼。喬嶽之仙。長逝茂陵之駕。不還尊儀。已入大乘之法社。勝趣何拘。小節之幻緣。假令在輪王位。七寶豐饒。爭似證極聖身。萬德圓備。恭願神儀。徑登覺殿。開業障本空之門。常棹慈舟。游冤親平等之海。無忘驚嶺付囑。建法幢於塵區。不動龜山寂場。濟羣類於沙界。戰陣傷亡。幽魂親疎。齊蒙巨益。昏衢迷倒。含識貴賤。同入圓明。更冀履茲以往。至于未來。兵戈偃息。寰宇康寧。皇祚延洪。錫天下之大慶。營門繁衍。護法城而永隆。上來所伸情旨。並是詣實供通。萬象證明。太虛保任。

復說偈云。一莖草上現梵刹。一處纔現處處現。一梁一柱遍河沙。片瓦根椽含法界。法界諸塵亦相攝。無壞無雜。無罣礙。帝網交羅互莊嚴。微妙壯麗自圓備。一多大小泯其量。廣狹中邊誰敢論。偉哉此箇勝伽藍。永劫儼然不可廢。無邊諸佛諸聖賢。光嚴住持在裏許。人天鬼畜諸羣品。貴賤冤親共一家。寂滅性中無對待。安有業債互相酬。人人同入光明藏。刹刹恢開無礙門。卓主丈。

### 拈香

達磨忌

護破六宗。水不洗水。主張堅白。理論剛道。單傳玄旨。嵩山冷坐九年之弓。引得兒孫奕世之累。我今只謝其無恩。不敢望其得髓。拈香云。古柏一炷價千金。莫比神光斷雙臂。

壁觀九年。露拙呈醜。雙履西歸。賊無空手。改頭換面。伎已窮。三十六路。不如走。惹嶺塵塵現前。少林處處繁茂。惡跡卒未消。累及千載後。拈香云。兜樓一炷分恩怨。半是香。半是臭。

鯨波萬里。冒嶮西來。意趣難解。舉世疑猜。震旦河頭。擔水賣。樽桑平地起骨堆。千變萬化。滿面塵埃。雙履歸西竺。全身現九垓。少室峰前。今月明雪白。片岡山下。今葉落花開。慈蔭恢恢。亘今古。後昆往往。自張乖。拈香云。我此瓣香。是官貨。莫謂今晨設忌齋。

圓覺開山忌

攪動龍淵水。樽桑震雷電。電收四十年。遺風轉更腥。這般惡迹。掩不得。咸言圓照有寧馨。拈香云。是怨是恩。吾不識。兜樓一瓣寄玄冥。

一山國師忌大雲庵請

圖成砌下一池水。釘出簷頭數朵峰。好箇天真法供養。今晨何事大家忽。恭惟。前住當山。勅諭。一山國師。大和尚。其智自游。及其辯執。嬰鋒。內之與外。相應。宗之與說。兼通。峻機踏。玉山之頂。妙用移。頑極之風。震旦扶桑。兩處成龍。國師名翼。翔十方空。曩時命我侍巾瓶。三喚聲裏。虛

睡困三十年來未消此恨，遠忌斯臨，誰分恩怨。高弟相共借他手，而拈自香。南禪也是納公稅，以當私獻。且道如斯供養，還有酬慈蔭分也無。插香云：莫怪香煙一縷微，大雲元起於膚寸，提起香云：此箇一物先地先天，都無今古之相，豈爲陰陽所遷。前住當山，勅諭一山國師大和尚，昔在大唐求此物，得之於玉几峰前，一生受用，毋固必，千變萬化，只隨緣七處住山去。以此作鋤斧，萬里渡海來，以此作鐵船，對君王談玄，則是爲廣長舌，與衲子垂手，則是爲惡辣拳。歸寂之後十三回，祕在家中作青氈，今日遠忌斯臨，門下高弟又拈出之，用作一瓣香，薰向爐中，上酬慈蔭，還有爲先師報恩分也無。插香云：不用巴陵三轉語，借婆裙子拜婆年，就玉雲庵。

佛國禪師忌

荆棘滿地吾也未窺師之藩籬，白浪滔天吾也未見師之靈骨，曾無慈訓啓蒙，只遭怒罵呵咄，打初一步已錯，開眼墮佗窠窟。今朝既往不咎，隨例設箇忌齋。插香云：從前怨恨百千緒，和此瓣香當下灰。

先師三昧南禪不知，南禪三昧先師不知，平白一條路，東西各背馳。盡謂養子不及父，以致家門一世衰。諸人苟能恁麼批判去，插香云：我此一炷香功不浪施，債有主，冤有頭，先師好采接我，無端結得怨仇，切齒悔責覆水難收，一不做二不休。今朝又蒸此兜樓。

元翁和尚畫七請

此香生育不藉二儀，根苗自壓羣卉，失之則昧，卻五分法身，得之則熏，成一切種智，伏惟前席南禪元翁和尚，既得此香，夙熏平生志操，拔萃遂見德馨，日新乃爲王臣所貴，扶起先師門。

庭嘉聲浩浩不墜，慧林亦得此香些子熏力，與元翁受用底，連枝同氣，有時藏之丘壑，共守寂寥，有時賣之街衢，各求小利。此老奄然，戡化權中，陰已迎盡七忌，謹齋玆妙香，供養現座道場。圓通大士及無邊塵刹，常住三寶，果海賢聖，所鳩殊勳，資薦尊靈，增崇品位，且道寂滅性中，增崇什麼位次。插香云：樹凋葉落，天地秋，誰見春花开，確肯。

爲耕雲和尚

胸次汪洋，舉措超軼，稟風度於松源之的流，喪塵機於大通之密室，一時名望山嶽凌空，兩處化權雷霆驚蟄，此是耕雲和尚平生受用三昧也。只如末後道：一失人身，萬劫不復，諸人向什麼處與此老相見。插香云：相見不相見，只消一炷香。

爲師叔孤雲西堂和尚

大方無外，大圓無內，出格舉措，寧有對待，平生蘊奇智，圭角不彰，滅後喪全機，靈光何味。生處示滅，仰山當年致寂寥，滅時有生，臨川今日自慶快，慶快與寂寥，大虛著五彩，轉換句子如何。話會插香云：碧天萬里一孤雲，變作香雲覆沙界。

恭爲龜山聖廟

聖駕去後，山幽洞深，舊日祥雲猶未散，今朝甘雨灑寒林，恩澤滂流及纖芥，柏根一片價千金。

爲全壁首座

爲全壁首座，禪而卒。生涯喪盡始爲自便，轉身一路東邊西邊，眉間掛劍時節，直得血濺梵天，莫謂是債，宿債須知全壁而還。插香云：今日與佗添意氣，薰風吹散博山烟。

上杉道果禪門盡七請

此香無根之根深盤金輪際也非其限無蔭之蔭廣覆太虛空也推其包以一切功德爲枝條以無邊法門爲花果淨穢刹土藉此爲基本凡聖含靈誰不托庇麻價直不用貴賤之商量馨香豈干沈檀之品藻于茲日本國相州鎌倉縣居住某人今日伏值先考某人盡七之忌辰特爇此寶香以供養十方常生一切三寶所鳩功勳併用莊嚴某人報地伏惟某人氣韻溫和風采冲淡混俗而抱道可謂雪後松操在欲而行禪固是火中蓮華其德可人邇觀遐聽皆稱善其行超格出生入死如優遊處世五十三年釘雲繫風歸泉四十九日幻收夢破且道某人即今在何處拈起香云於此看取體露金風其或未然樹凋葉落

冷泉黃門月巖居士夢作一首歌告舊友願爲我作善因數輩相率設齋會請

此香無住爲根本夢幻作枝條將謂不牢固劫火莫能燒茲者某等借手爇此寶香以供養云云伏惟某人曾寄夢形於貴冑歌仙名望屬南柯滅後青黃已三周夢裏恍乎呈素面灼然夢中夢又作夢中吟舊知遺眷聞而悵焉今日夢中成于嘉會乃修夢中佛事救陀夢中沈冥特命夢窓野人謔說此寐語正當恁麼時還有寤底消息也無拈起香云由來斯義甚幽深彌勒大士也不會

前讚州太守觀公大禪定門忌請

此香無根兮得活離地兮不倒臭中香香中臭佛祖也難品藻于茲云云所冀覺靈與法界含識同受斯妙熏翻業根而作善根轉惡果而成覺果伏惟某人嚼花結果五十餘年太虛相貌

絕今古水月掩光一千箇日本分精明無變通生從何處來木人托出日中斗死向何處去玉象踏翻鏡裏空福祿災殃皆爲戲具四生三有不是樊籠盡謂長逝沒蹤跡誰知徧界露真容將此陰德付賢裔高門豈肯做子公

上杉武庫禪門忌請

此香大包太虛細入纖芥臭則臭於蒼草覆則覆於沈檀諸佛以此爲道樹成正覺於其下列祖以此作心華流宗芳於無窮偉哉此香鑽仰不及若凡若聖誰不受恩今日所資覺靈某人平生遊心乎祖苑能順者簡而深信根末後殞命乎戰場亦藉者簡以增聲價死生既自如此罪福那有差殊于茲令子中書某人受此熏力不失孝行今日丁某人一周之辰謹爇云云所冀覺靈無邊業種一時焦枯本地風光當處成現乃子乃孫榮昌不絕或親或怨利濟無休

野州禪門逆修請

春至百花開拆者箇不改素容秋來萬卉凋零者箇亦無變色淨穢器界以此爲基佛祖化儀悉承其力失之則二利俱失得之則一舉兩得茲者云云某人獲報緣於濁惡之時積罪業於迷昏之域自懼當來苦果預修滅後善根特借山野手虔爇云云所冀仗聖力而資凡力拔業根而爲善根真熏通實際彌天愆尤頓爾消除妙利答洪庥出世資糧儼然備足現當相續餘裕無窮冤親平等濟度普及插香云即今已是立公憑永劫何妨成巨益

爲覺照禪尼請

者箇爛木柴能爲萬象主價直無定度熏成只隨緣在僧家則爲解脫之香在世俗則爲資生

之具於男子則謂之乾德於女人則名為坤儀茲者云云某人雖赴戰場抽汗血之忠特就本寺旌瀝心之孝遙借山野手虔蒸云云伏願懿靈以此為器仗永截積劫業根以此為資糧早登無生覺路餘裕綽綽乎社後裔洪熏綿綿賑濟含情且道只箇一瓣香為甚成得大佛事插香云六月賣清風人間恐無價

為妙印禪人請

此香能為萬物本根不干四序青落人人曾無欠餘只是受用不得今日拈出奉獻三世如來十方賢聖沒量供養絕能供之相真箇納受無所受之心好是善根出思議須知重力亦廣大以此資妙印禪人覺路資也非資以此濟塵沙法界迷流濟也非濟正當恁麼時且道成得什麼邊事插香云大功至德無人識只見爐中一穗煙

為上杉中書禪門請

某處今晨伏值某人捐館以來百日斯臨特蒸五分法身之香以灰多生染愛之業伏願此香本有乘德云彰無限真熏不墜出生無盡廣大之妙供奉獻虛空法界三寶境界演暢最勝甚深之法句啓迪微塵刹土一切含生憑茲善利資覺靈曠劫業債一時滅不翅餘熏庇家眷法界迷流同得益莫言此事難保任萬象森羅齊證明

清拙和尚遺書至

四七二三傳此香遶天高價絕商量既是一花開五葉東西何處不聯芳伏惟前住龍山清拙大和尚祖業相承傳此香馥郁家風滿大唐化導緣分母固必懷此香今到扶桑普天凝瑞氣

四衆沐恩光莫言滅後無消息遺熏餘烈徧十方老拙亦有此香拈出以獻寂場莫是河頭賣水麼插香云已展不縮家醜外揚

奉為征夷大將軍預修

此香先天先地離名相不為榮枯變素容信手拈來歸掌握無邊功德在其中茲者征夷大將軍源君某甲預懼當來苦報逆修滅後善根始從中陰終迨遠忌逐一作佛事至誠自回嚴乃以今日當于一十三回之忌辰特借山野手謹蒸此寶香供養周徧法界摩訶毘盧遮那如來云云所冀七分全得之功便見速効萬德本圓之理亦自現前此世福壽保安固藩垣於營門來生願望圓成播賑濟於法界伏惟殿下乘大願力秉軸轉桑現宰官身願轉祖域既遊祖域奚入迷鄉幻妄無實任佗片雲點太清靈光獨耀不妨一月印衆水過現罪性求不可得未來業債有何所酬赤條條空索索虛空突出那吒面萬象全提活脫機機先一著無標準佛祖當頭眼似眉正當與麼時向來修善功歸何處舉香云三千界外放毫光雙六盤中休喝彩

小佛事

慧林寺釋迦佛安座拈華微笑像

大法元無不可圓明門戶絕關鎖三賢十聖競遷喬也是空花重結果恭惟本師釋迦如

來大和尚其慈也至矣。法界含識咸受庇蔭其德也大哉。無邊虛空莫能包裹。不動寂場赴鹿苑。天魔外道自負墮。東倒西摧五十年。到處稱尊橫說豎說三百會。終無口過。末後拈起一枝花。百萬大衆看不破。與麼體裁可謂事起丁寧。沒量大人不敢爲之陳賀。諸仁者還知我世尊別有箇本分底三昧麼。當軒大坐峭巍巍。迦葉亦只得半座。

臨川寺普賢安座開光明

一椽才動大千收。片瓦包容靡不周。當下圓成華藏界。莫將金屑著雙眸。恭惟 三曼跋陀菩薩摩訶薩。墜證入不假修持。住處不依國土。一毛區域浩曠。善財未見封疆。十種願海汪洋。諸聖咸讓廣大。分身如月。不知多少影。玄辯瀉餅。豈止二千酬。誠哉普賢之稱。所稱匪謬。偉哉大士之德。衆德攸衷。茲者捏聚微塵。露現清淨尊像。插卻一草。落成圓融道場。弄假象。真全具。天然態度。卽事顯理。寔非世諦戲論。須知藉此小場。以莊嚴恒沙之梵苑。何妨散此一像。而隨順萬品之衆生。諸天諸神皆悉承威。內外冥資。土地堂額人法。乃佛乃祖。互相戮力。東西密付。祖師堂額宗猷。慈風蕩蕩。扇無時。鴻業恢恢。播累劫。上來特地慶讚。都是化門直餘。諸仁者還知大士頂門。別有正法眼麼。卽今分明點開去也。以筆點空云。毫頭點出大光明。凡聖含靈同一眼。

天龍寺三聖安座

妙性圓明絕變通。恢恢包裹十方空。無邊德用無邊智。盡在衆生方寸中。恭惟 摩訶毘盧遮那無上世尊。三曼跋陀大士。文殊師利菩薩。從無相中現不共相。如然大智非暗非明。法爾真

慈無適無莫。互爲主伴以表事理。圓融之儀。權示中邊。事隨昇降。差別之域。懿哉如來境界。超乎淺識商量。萬象森羅。靡不三聖。羣生倫類。皆具十身。赤條條明歷歷。昔年掩室於摩竭。今日開門於本山。古今無兩。般隱顯同一座。諸仁者還見此一座位麼。薰風自南來。殿閣生微涼。

三會院彌勒安座

大功元不藉安排。一戶才開萬戶開。剎剎塵塵是觀率。下生莫謂在當來。恭惟 彌勒菩薩摩訶薩。千尺尊軀。光豔法爾圓備。萬德妙相。秀媚集乎大成。垂慈出於無緣。梅哆喇耶之稱。雙聳也悅耳。布德徧于法界。阿鞞跋致之用。闡提尙傾心。受補處記且約。一生轉不退輪。焉限三會。傳聞因地。觀樓閣壞而發大心。不知今日見宮殿成而生何想。曲躬深揖云。良哉大士處此中。指示人人同一座。

南禪爲大光國師入祖堂

去來不見蹤。蹤出沒作何象。一段大光明。古今無兩樣。伏惟前住當山 勅益普照大光國師。去就軒昂。操履清爽。匪以光華介懷。只將稻晦爲望。一時應世利錐出。囊兩處住山鈿斧在掌。大應室中曾登選佛魁科。皇帝陛下敕謚國師金榜。便見少室燈光。增熾增聯。虛堂門戶愈高。愈廣。盡謂去年攝化權。誰知今日露真相。真相既露。還見此老安身處麼。舉起牌云。公憑皎然勿生疑謗。

太平和尚正統庵入祖堂

祖林翹楚結果。不待霜露。天產精金致柔。豈假煨烹。可謂越格俊流。寔是克家正統。平生歷歷



數刹。縑素競托庇。末後踏破十虛佛。祖罔見蹤跡。畢竟那裏是此老安身處。舉起牌云。太平無象。無不象。地獄天堂。建法輪。辭世頌云。末後一句。向下文。長。處處無蹤跡。地獄與天堂。

南禪為雙峰禪師入祖堂

慧日分輝照瑞龍。雙峰春色壓衆峰。流芳千載至今日。五葉花開又一重。恭惟前往當山。敕益雙峰禪師大和尚。智游象外。妙契環中。續圓照之燈燄。躡聖一之高蹤。遐邇歸德。彩魔外怖。機鋒脫略。先輩坏模。單提獨弄。掀翻今時窟宅。發部擊蒙。此是雙峰禪師平生操履底。諸仁者。即今還見其真相麼。捧牌云。回機轉位。無人識。寂滅場中振祖風。

孤雲和尚正脈庵入祖堂

是凡是聖本來空。出沒何曾有影蹤。若也撥開蓋面帛。色聲羣裏見真容。伏惟前往乾明山萬壽禪寺孤雲和尚大禪師。胸次無絲語言藏鋒。其才定為翹楚。其智亦非闕茸。嘉名飛四遠。秀氣薄蒼穹。佛光餘輝燦燦乎。續餘龍淵正脈。滔滔乎流通。可與先輩並德。堪為後昆啓蒙。建化門中且作此說。老師分上未足為崇。諸仁者還見他真實安身處麼。捧牌云。只箇公憑沒蓋蓋。不妨奕世繼宗風。

多寶院欽遇 後醍醐院聖忌奉安御座

萬法從來在寂場。冤親榮辱絕封疆。良哉斯理自昭著。佛運皇圖共久長。恭惟 後醍醐上皇。世表風采。天還儼姿。明並兩曜。德動二儀。致否致臧。人毋測。是凡是聖。誰敢窺。莫怪仁風欲扇。而止。須知帝運不得于時。仙夢已破何拘。小節妄緣。御忌斯臨。忽屆大祥。歷數遺臣。各據懇誠。

勝善奉資覺路。假令在輪王位。七寶豐饒。爭似證覺皇身。萬德圓具。從前毒藥。變作醍醐。曠劫無明。翻成正悟。諸仁者即今還見。上皇真實登極處麼。捧御牌云。是法住法位。世間相常住。

無量壽院為佛國禪師入塔

出沒隨緣即是宗。大人到處有靈蹤。良哉徧界無私句。萬象森羅不患雙。伏惟前往建長。勅益佛國禪師大和尚。智超物外。妙契環中。大用難量。橫該豎抹。峻機圓轉。八脫七通。未示寂前。處處露靈骨。已歸真後。塵塵現真容。隱顯無空手。說默藏利鋒。好是一著子。化權莫有窮。諸仁者還見先師真相麼。合掌低頭云。今日豁開無縫塔。未來塵劫扇門風。

挂額 御書佛燈國師

佛佛傳燈至此時。屢生自昧不曾知。宸毫點出本光瑞。萬象忻然齊展眉。天真八體固非鳥跡。所比奎畫一交寧。以龍圖為基。燦然無字之字。珠玉也。須讓彩焯爾。無明之明。日月猶似有私。便見剎利皆皇化。塵塵是國師。其或未證據。切忌向外覓。指額云。無縫塔前高揭示。分輝續燄。莫窮期。

為從上座火調水而死

衲僧行履都無顧藉。直投萬丈深淵。吸盡曹源一滴。真是佗安身立命處。麼。擲下火把云。從來死水不藏龍。又擊火雲。轟霹靂。

為調上座火

無識馬可調。無妄塵可拂。生死涅槃只消一咄。若是伶俐衲僧。焉戀舊時窠窟。擲下火把云。火

把跣跳上天，徧界臭烟蓬焯。

爲杲藏主火 辭世頌云：生前死後，自西自東，一同轉步，八面清風。

日昇木上，則謂之杲；日沈木下，則謂之杳。一輪纔現，明昧亦兆，便見東西南北區分，生死去來紛擾，一回轉步，起清風，也是外邊打之遠。大衆還見，衲僧真歸處也。無擲下火把云：焦尾大蟲睡火中，木鷄夜半報天曉。

爲遠上座火夏中

護生須是殺，殺盡始安居。殺佗也要還自殺，自殺方堪賦歸歎。遠上座，欲會箇中意，鐵船焰上浮。

爲自防藏主火夏中

德黜奸人，禮防君子。衲僧坐斷十方空，佛祖也不能摩壘。安居限內，離位轉機，生死關中，誰問可否。如是如是，不是不是，蠅螻火裏鳴，驚起大蟲睡。

爲萬壽玉峰火本居律家

動靜不妨遊物外，去來都是付環中。有時獨唱還鄉曲，桂殼推秋碾碧空。恭惟 前住萬壽玉峰和尚，神機卓邁，氣韻粹和，不顧螢火自耀之光，直續祖燈廣照之燄，喜得正統門庭，有棟有樑，乃見乾明山裏，爲雷爲霆，此是玉峰和尚平生行李處。盡情說破了也，還見此老今日爲諸人示大人相麼。打圓相云：擊破太虛呈面目，丙丁童子笑柴崖。

爲妙鏡監寺火

妙中蟲蠹中妙，兩頭俱剷除。破鏡不重照，世間出世間。一了一切了，左之右之，迴出物表，直饒恁麼連得行，也是外邊打之遠。且作麼生折合去。擲下火把云：三腳驢子弄蹄行，丙丁童子拍手笑。

爲海禪人火夏中

殺盡衆生始安居，勘來猶有已船在。直饒喪卻已船，未免墮在毒海。某人不拘法歲制禁，警爾超昇象外，莫是佗真實安居處麼。擲下火把云：火星迸散三千界。

爲眼都寺火

五十九歲蝶夢悠悠，一朝忽打筋斗，更無蹤迹可求。好箇快活時節，知是般事便休。且道休後又如何。擲下火把云：赤眼撞著火柴頭。

爲智德侍者火

機智忘于內，德用彰于外。死袴生衫，著脫無礙。直饒與麼薦取，未免坐在陰界。呼兩聲云：兩度三回呼不應，乃知入火生三昧。

爲助侍者火夏中

衲僧行藏都無標據，左出右沒，不借資助。一段精明到處昭著，禁足安居，棘林壞絮，助侍者那裏去。擲下火把云：三喚機前出夢鄉，大火聚中堪避暑。

爲普要禪人火

梅霖乍晴，普天催熱。要徑消息分明漏泄，寒暑迭移，一字不著。劃生死交謝八字無兩，人別別。

木人火裏嚼冰雪。

爲不二禪人火

透出生死窟宅，入得不二法門。若是伶俐子弟，不向這裏梁跟，天堂地獄到處稱尊，即今向那裏與佗相見，擲下火把云：大火西流去，爽氣滿乾坤。

爲上杉法禪禪尼火

生也如是，死也如是，夜壑舟移未嘗變異，伏惟新圓寂。某人寄生於塵世，而信活祖之禪，受形於女流，而負丈夫之氣。今日奄爾既歸元，平日嘉聲也非美，真實落著處，畢竟在那裏，擲下火把云：火官頭上風車子。

爲忍洛主火

妙觸宜明悟水因，雖然證忍未爲親。若也祖師門下客，更須火裏浴全身。

爲攝津酒掃禪門火

風清月皓秋光好，霧斂天晴爽氣浮。寂滅道場只這，是何須向外覓歸休。伏惟某人稟業文士，輔政武門，寄身宰官，醉心祖道，可謂一舉兩得。乃是未運上流，五十三年幻夢已破，四生九有業緣何拘，玉象踏翻鏡裏空，新羅夜半日頭出。如是快活底時節，火裏蓮花徧界香。

爲寂監寺火

諸法從本來，常自寂滅相。春到百花開，黃鸝啼枝上。寂監寺還會麼，會則左眼半斤，不會右眼八兩，畢竟如何折合去。三腳驢子弄蹄行，丙丁童子笑拈掌。

爲解副寺火夏中

不待解制脫禪行，腳幸有自己庫藏。何妨到處開卻，直饒恁麼去，也是路途樂。畢竟作麼生，擲下火把云：紅爐焰裏重烹鍛，鐵牛擊出黃金角。

爲鏡監寺入骨夏中  
收在壺中

鏡像生涯都喪盡，赤骨纏地露天真。曾無佛法氣息，事染世間埃塵。正當與麼時，何處著渾身。壺中日月與常異，何必安居限九旬。

### 佛祖贊

出山相

入山出山獸心人面，五十年開貨鋪，只解和鉄羅剎。

用禪人畫一圓相，求贊上有雲下有水。

毘盧主法身師，離名離相，匪尊匪卑，逆浪洄瀾而未嘗沒溺。癡雲變鬚而轉見光輝，釋迦彌勒是佗奴，畢竟知佗是阿誰。放一頭低，示此相，桀犬吠堯，一任伊。

釋迦

西天老比丘，只做此面，特地出世，欲何謀。解道未嘗說一字，如是如是，不是不是，普賢跨象。

王文殊騎師子

觀音

巖崖岌岌滄海悠悠圓通不會圓通境靈禽啼在樹梢頭  
石涯波數皺瓶裏柳絲柔被人喚作圓通境可悔當初誤入流  
三十二應墨突孔席慈力不及處獨聞瀑聲激

達磨

少室峰前九年瞎睡開卻眼來猶寐語亂道神光得吾髓

維摩

丈室恢開不二門無端惹得鏃金論雖然一默塞衆口彼上人名今古喧

無準和尚虛堂僊溪入室

龍淵無風起瀾青天雷轟電掣惹得雨滴虛堂簷溜蕭蕭又聞水激偃溪湍流沕沕從此凌霄  
峰頂路多少行人墮覆轍

又牛鼻

祖門間出混迹迷津無德之德發動天人不說而說雷霆在唇龍淵火發分文武躍者靡非燒  
尾鱗五十世中大知識未嘗容易現全身

佛光禪師三

機用雄毅菸菀有翼支那一天無地收化扶桑闔國擯佗不得榮之而匪什辱之而匪應致柔

則魔外也弗相誰何致剛則佛祖也難爲抑勒好采接人修心奚匿自灌龍淵水到處滋荆棘  
拈起龜毛意在何不是河南便河北

河目山眉木舌鐵背接佛國而破家攪龍淵爲惡水平生舉措沒人知剛道舍利包天地稽首  
這般不唧噥堪與兒孫添意氣

厲而太溫坦而太峻披襟也嶽善海涵垂手也星飛雷閃不可以賢衰不可以愚貶放打無味  
之談焉顧斯言之玷大元三尺劍護斬劫外春風博桑一掬灰再輝文武火燄沒蹤迹處現半  
身腳跟汗臭難遮掩

佛國禪師九

者老漢太孤峻鑽仰無門不緇不磷唇吻中藏毒鄉竹篔下設長蛇陣家法無怒容佛魔俱  
斥擯高門陰德不爭多自有青山傳後胤元翁請

火鼠匪燒冰蠶匪溼物有天產德不是借修習老師蘊什麼德只解隨時坐立善題薩題毀贊  
不及晒之笑之百步五十祖庭祖庭德已遺今不可拾祖庭道人請

盡大地擎出箇高峰仰之無見頂塵沙界都虛一佛國描之不似伊即今圖畫得底不知是甚  
麼姿嘖留與人間且證龜

這老古錐無翹楚姿口中惟一舌眼上有雙眉云何聲價播天下路上行人口便碑  
逢強即弱逢卑即尊是凡是聖巨得而論佛光錯做瓜瓞夢惹得時人胡亂原

此老無定姿徧界爲胸次曠時與萬象俱曠喜時與萬象俱喜是聖是凡不可品量在前在後

真能瞻眺當年錯見老佛光大鵬飛入階甃裏從茲名翼落人間插翅多論似不似我今爲贊不覺類此。

狠毒介懷龍泉在舌五據名藍人天冤結滅卻圓照正續宗漏逗佛光鎖口訣末後打筋斗風雷動塵刹更有一德贊不及分付太虛橫豎說。

圓照正續孫佛光事馨子唇有雌黃胸無城市三尺竹篋不打癡獸五處陷穿只擒虎兇我今蹉口揚家私恐是人窺蜂桶裏。

仁山大居士請

精神可掬眼蓋乾坤橫揮竹篋佛祖不敢摩壘曲垂隻手緇白說而趨門者般風度難爲隱分付仁山蔭子孫。

中峰和尚

勢儼氣柔神清貌古生機迅捷旋嵐過空點慧高明杲日亭午不向人前賣青氈天目山巔打毒鼓棲遲知足一庵嘉聲自喧寰宇顯而匪混世塵隱而匪閉門戶德厚于異邦聞名猶會晤矧乎大元國裏王臣也服風度非是僥倖而然道香生於煨芋救號佛慈圓照廣慧禪師其誰誣以鐵鐘步。

太平和尚

才智翹楚風度軒昂行己則母因母必爲人則有柔有剛法乘親軌祖門權梁華佛光之轍證佛國之羊盡請此老匡徒止于三兩利而已不見道處處無蹤迹地獄與天堂二句乃辭世韻。

天目高峯禪師

震且裏生此魁仰山化育更換骨來心肝渾是鐵操履不混埃內祕廣大慈悲賢愚咸皆托庇外現忿怒相貌佛祖亦須望崖踞師子巖三十歲哮吼之聲徧九垓。

靈山和尚

胸無畦畛眼蓋虛空浮華不介視枯淡爲家風仰山山下一點水墨樽桑震旦兩處成龍易地震雷雲龍淵通海東沒量化權蹶不蹶滅後舍利靈靈蹤。

元翁和尚

此老氣韻軒昂奇才秀出羣策或幽谷或叢林與我相從久矣隔生三四年顏貌猶如視今對茲像也太相似異中同同異莫言圖畫非真儀本來面目只這是見乎德人容貌自然令人意消試對此像子細看稱贊不用舌頭饒。

前住理智光院月樓律師

標致爽邁蘊藉汪洋學教而不墮兔罟護戒而不執螢光匪香舌頭飄巨浪自知言外有玄綱律虎之名飛于遠莫謂無翅可翱翔。

土岐伯州禪門

稟天賦於勇士氣韻不可凌侵本地靈根匪朽祖門信種甚深外逞汗馬勢內絕敗人心布其陰德庇家裔箇箇膝下有黃金。良哉這老居士武德不辱先宗更有潛行密用處不離俗體現僧容。

備州卓然禪門

卓然氣宇混塵，鄉豎起娘生鐵脊梁。是俗是僧沒人辨，火中蓮葉吐馨香。

妙空大姊 普恩寺殿母

賦性貞白，脫得世塵。左轉右轉，非鬼非神。坤儀表出普恩力，後裔流芳億萬春。

覺雄禪師

胸次容羣象，眼皮蓋大清。風采質朴，無將無迎。五據名利，匪沾嘉聲。不設陷穽而陷虎兕，不把釣竿而釣鯢鯨。垂手接人，令證大覺之覺。續燈照世，乃是無明之明。吾曾受業於會下，只恨機緣欠圓成。今日拜慈像，情毫投寸誠。更有贊不及處，付在彌勒下生。

自讚

南禪元翁和尚請

獸心人面，智薄行麤。頂門不亞眼，肘後不懸符。好箇娘生三昧，落得天還一愚。長老長老，莫訝吾無跨釜之作。先師折腳鑿子，須相共扶。

滿翁庵主請

渠似吾而非吾，吾非渠而相似。不要打殺老僧，何須燒卻燈子。景與罔兩，一馬一指。滿翁滿翁。

佗時有人若問我真形，報道領下眉毛長尺二。

一谿居士請

這田庫奴形醜，心愚其醜也者。畫得太似，其愚也者。固匪可圖，莫謂丹青無妙手。佛祖亦難以名摸，借問一谿居士，擬向何處見吾。嘆。

大判事請

咄這沒刁刁漢，稟賦性於愚魯。舉措信彩不拘規矩，坐曲糸牀無所成。剛道市中田魏虎，只將此破生涯，扶起潑天門戶。

禪人請九

這國賊無面目，有時把纜放船。有時騎牛上屋，提鋤斧而不解。住山握竹篋，而不知背觸。呵呵，苟不自贊，誰贊我。

全假全真，水銀阿魏。品藻在傍觀，都不干吾事。

眉底有眼，鼻下有唇。好是娘生三昧力，因睡飢餐不情人。

通身無影像，箇箇什麼來。若能覷得破，確著放花開。

這骨律錐，老而益癡。百醜千拙，甘分過時。莫謂無儀可則，堪與善人為資。

我無影像，繪箇什麼。一時風流，萬世懷憐。

本質尚如幻，影像是何容。欲見我真相，擊破太虛空。

腳跟下事難，可指陳。建化門裏，且露半身。牛身。

眉底有眼，鼻下有唇，娘生面目，分明莫言，唯現半身。

寶都寺夢與師相見圖其所見像求贊

坐盤石倚古松，不是凡相，不是聖容，都寺都寺，莫見吾於寤寐中。

圓相中

元是一精明，分爲六和合，不是混融，亦非駁雜，全體現成，千重百帀，畢竟如何分疎，一任傍人踏踏。

### 偈頌

客中偶作

蕩子生涯無貯畜，山雲溪月是青氈，東西白踏一條路，不在途中家舍邊。

寓居聚落

寓舍羣塵盡掩關，市中買得沃州山，娘生口裏不含血，掛在乾坤宇宙間。

佛成道

冷坐六年蛇入筒，剛將冰雪當家風，昨宵覩得虛空破，驚起明星藏眼中。

太平和尚來訪不值翌日惠偈次韻以謝

不容佛祖入門來，白眼青眸豈肯開，仁義道中通線路，山川齊起舞三臺。

謝圓覺靈山和尚見訪三浦庵居

世上浮榮屬貴家，窮栖贏得飽煙霞，春光今日添和氣，海岸枯椿也放花，  
豈攀消息我因措，不累瑞峰牙齒寒，庵外潮平門限潤，莫言水淺泊船難。

靈山和尚夏末寄偈次韻爲答

禁足不離三浦境，無邊刹海徧經過，意通方外山川絕，情隔目前雲霧多，一榻蕭條忘歲月，四簷鬱密蓋藤蘿，少林妙旨非干我，誰管如之與若何。

善福大川和尚相訪有偈倚韻以謝

包桑計足世波外，衆口從他能鑠金，淡薄情同輕霧色，黑甜夢破暮潮音，隈山卻自忘山險，臨海未曾窮海深，不是要津剛把斷，門前巨浪涌千尋。

數食鶉居沙渚邊，釣磯漁舍地相連，更無東閣接高客，一點瀕涵萬里天，  
巨壑雷聲過僻地，盤居寂寞一時空，贊歎莫謂口門窄，庭際寒梅春信通。

謝雲巖太平和尚來訪

發生懶癖療難痊，醜拙深藏海嶼邊，今日被雲巖敲破，風前把手笑忻然。

和韻諸友寄偈于三浦庵居

天南地北不留蹤，又入月江烟嶼中，退水巖鱗有餘裕，不希化作禹門龍，  
山市江村堪擇鄰，行藏多混釣漁人，只因手裏無香餌，免得欺謾負命鱗。

樛木元非大厦材，那堪叨屬貴門來。而今拋在江村外，付與漁翁撐釣臺。  
一庵釣寂海門東，聖域凡邦信不通。莫怪私鹽成滯貨，天津橋上叵欺公。  
一把茆茨天宇濶，山爲籬落海爲庭。庵中消息無蘊蓋，來者猶言掩竹扃。  
壺中風物獨沈吟，相伴唯容藤一尋。昨夜無端打談笑，虛空聽得也寒心。

天峰相摸左近將監殿

絕頂蒼蒼雲霧外，虛空背上勢崢嶸。人間仰望不爲少，只見衆山從地聲。

壁山

元來峭峻無瑕類，雨琢風瑤光轉生。雲霧不理峰頂路，相如失腳入秦城。

春山

和氣靄然藏峻嶮，峰巒花木自逢時。登臨須具登臨眼，莫向青青黯黯窺。

別峯

孤峻不同羣嶺勢，幾人望見換雙眸。德雲賺殺善財後，翠靄紅霞卒未收。

竹庭

三曲兩斜排砌下，年年添得一叢林。香嚴擊碎大千界，此地依前鎖翠陰。

天使到山留偈次韻以贈

世路悠悠懶往還，一庵甘分卜殘山。地爐灰冷無黃獨，雪涕工夫也不閒。

古潭

曠劫已來清皎潔，月穿風攪水無痕。今時不敢窺潭底，剛道蒼龍這裏蟠。

先覺

威音劫外自開悟，正眼看來是後生。借問從前佛象祖，幾多閒語爲誰呈。

雪溪

片片紛飛非別處，冰花影裏水光清。寒流激出廣長舌，喚得石鳥龜睡驚。

枯木

獨倚寒巖無暖氣，皮膚脫落未爲奇。有時花發乾坤外，不識春風何處吹。

藏庵

直將天下爲門戶，天下從來在裏頭。不是家風剛蓋卻，銜花百鳥自然休。

休翁

萬機罷卻自騰騰，暮請朝參也不曾。問著老來成底事，笑言雙鬢白鬚鬢。

奇峰

終古巍巍勢不凡，木靈石怪呈祥瑞。一回登陟換雙眸，只在尋常煙霧裏。

假山水韻

織塵不立峰巒峙，涓滴無存洞瀑流。一再風前明月夜，箇中人作箇中遊。

題那智觀音堂

天河激出人間瀑，滌滌寒聲響碧空。珍重大悲觀自在，我儂幸是耳無聰。



春巖

融風煦日旺和氣，枯木陰崖也著花。欲問空生坐何處，煙霞影裏路千差。  
嘉曆丙寅退南禪赴關東，元翁分袂而寓居叡山，有偈見寄和韻。君踏雲梯登叡嶺，我呼藤杖出京師。箕南斗北一千里，正是眉毛厮結時。

次韻悼僧遺官事而死

患難雖然爲藁箬，爭如直入涅槃城。春風已唱還源曲，佛手不應遮此行。  
衆口鑠金金已空，谷休盡屬夢鄉中。從前窟宅莫回顧，碧落元無飛鳥蹤。

圓覺險崖和尚來訪不值留偈次日依韻以謝

郝翁曠昔訪庵主，惡迹難藏宇宙間。昨日瑞峯枉光駕，我儂幸不在斯山。

清拙和尚韻

剩水殘山是我鄉，小窻落得飽秋光。善財休說南詢去，去者須知不至方。

月山

光境忘時光境現，巍巍擊出廣寒宮。一回親到最高頂，物外何妨有路通。

古巖

孤危峭絕先天地，木老苔深不記年。莫對空生問來歷，怕看花雨更紛然。

放翁

家風菲廣無拘束，酒肆魚行建法幢。聖不收兮凡不管，老來只見兩眉厖。

德叟

胸中蘊藉無人識，幸有皇天輔弼他。不把聲名自簧鼓，恢恢風化徧河沙。

暮春遊橫洲舊隱二首

當年久住此洲濱，今日優遊來作賓。庵畔林巒不忘我，替花新綠獻殘春。  
日映蒼波輕霧收，回洲疊嶂圖奇尤。滿船載得暮春興，與點爭如此勝遊。

笑山

由來未喫馬師踏，歷劫柴崖直至今。將謂平夷無險處，烟雲影裏有刀林。

賀福山衆寮落成

塵凡元是一家舍，大匠垂慈始闢門。休問此中多少衆，根椽片瓦蓋乾坤。

賀雲山越首座住與州護國

時居蓋山傳芳菴在護國長覺禪師無隱創之

高臥嵩山絕頂雲，舉揚宗旨任天真。眉間霜刃忽歸掌，塞外從茲祖令新。

泰山秋田別駕

險處深藏安靜境，東方羣嶂護崔嵬。誰知五十餘盤外，別有天門石扇開。

贈玄侍者南遊

抗慨寒繡離瑞峯，百城春色屬孤筇。一回改卻生涯後，更挂古帆歸海東。

贈感知客南遊

江外橫趨早是遲，迢迢航海又奚爲。脚跟且放三十棒，更待他時衣錦歸。

贈郁侍者南遊

萬里鯨波天一涯，無邊風月勿張乖。草鞋跟斷底時節，跳出南陽陷穽來。

悼雲峰居士

老來頓轡遊方外，不宰從前汗馬功。夜壑舟移無覓處，塵塵擊出碧雲峯。

祖峯

四七二三呈峻機，高高勢壓五須彌。躋攀自有兒孫在，絕頂宗風未下衰。

東峯

岱嶽高名今古傳，日昇月出勢穹然。青黃不墮衆山色，永領春光億萬年。

古庵

把茆歷劫蓋頭來，多少後生門外隈。莫謂都無斬新底，年年庭樹放花開。

爲月巖居士講金剛經

諸賢命我談波若，滿座盧胡咸演聽。好箇一場閒打闕，堪令居士夢魂醒。

和韻天岸和尚謝事見贈

慈到無緣稱法幢，月涵萬水不昇降。大人到處乾坤潤，休謂閒雲分半竄。

天岸和尚相訪於甲之慧林有偈次韻爲謝

渡空金錫枉降臨，數日清談味德音。鏜彩殿堂成壯麗，蒼幽林樹轉陰森。淡交喜得懷無礙，淨世從他既有針。盛事定應傳永劫，山門不翅幸于今。

和韻謝天岸和尚送初祖頂相

隻履西歸似不曾，更留惡跡最堪憎。魚投臭水有來歷，且爲渠儂打葛藤。

和韻慧林圓通閣

翼然幻出一樓臺，廣大慈門關鍵開。天籟奏奇非苟且，土毛獻勝有由來。東園西護水千派，後揖前朝山萬堆。直下入流是南海，纔移寸步路迂回。

東白

金雞三唱至薰微，未是蒼天全曙時。夜半明明太陽出，樽桑圓額弗波提。

山居韻十首 韻古 和尙

小庵舍大千，獨處伴無數。德化已圓成，至功何所樹。深山巖壑中，佛法無與廣。勒破老黃龍，牀腳下種菜。山高罕客登，唯有白雲騰。獨照空寰宇，寧同日下燈。胸次辟魔境，浩然游世表。大人沒限量，碧落慙其小。雲幕垂牀畔，水輪輾檻前。莫言能晦跡，背後有人天。莫怪蕭然獨閉扉，韶光乃是放光時。雷聲常震沒人聽，卻道溪深龍出遲。黑甜夢破午陰遷，古栢烟消對博山。三十年前塵累事，一時休罷付幽閒。青山幾度變黃山，浮世紛紜總不干。眼裏有塵三界窄，心頭無事一床寬。物外逍遙自得時，家風放曠不求奇。客來無物可供養，白石清泉當土宜。

佛祖垂慈務救迷，誰知罪過與天彌。爭如盤礴幽巖下，坐看閒雲洞裏歸。

松隱

千株寒操列成牆，翠靄深深堪葆光。莫責閉門圖自了，後人標榜不曾藏。

梅窓

一樹花開六戶香，家風襲得嶺南芳。從茲萬國通春信，那箇彌猴在夢鄉。

送榮藏主省親

陳老鞋中藏五逆，洞山胸次蘊真慈。者回別有報親句，滿袖春風撩亂吹。

玉田

耕翻一片間荒地，泥土璨然光自生。更有秋成時節在，收來顆粒價連城。

義堂

第一門兮第二門，高低闊奧絕談論。大家領略幽深旨，珍重當來彌勒尊。

無範光嚴法皇

世間樞要沒交涉，佛祖楷模也浪施。孤迥迥兮空索索，鳳栖不在碧梧枝。

的翁

真正相承無等倫，傍宗別派有誰爭。老來更驗實頭處，尺二眉毛領下生。

進叟

水窮山盡更移步，寶所元來在腳跟。將謂從茲甘靖退，家中牀席未曾溫。

立山

旋嵐偃嶽不曾搖，峭峻孤危勢似懸。只許躋攀窮頂者，經行坐臥自逍遙。

雪庭

六花滿地冷水水，一色明邊萬象沈。砌下猶存松柏操，神光自失丈夫心。

一庵

統取大千爲小屋，四維上下更無隣。含靈凡聖在這裏，郝老何方訪別人。

桂巖細川賴之

昌昌嫩綠潑雲瑞，密密高枝不可攀。善吉長年放憨坐，罔知月窟在其間。

玉淵賴之夫人

靈源不琢自瑩徹，兩岸中流一片光。業業臨深知幾箇，咸言瑞壁在崑崗。

默庵

饜口長年懸壁上，柴門深掩放疎慵。就中密說如雷震，露柱燈籠不患雙。

古山武衛將軍

不墮青黃獨岌然，千峰萬嶺遜陳年。絕巔雲斂無遮障，劫外風光在目前。

無極

十方寥廓絕邊中，子細看來亦有窮。倒駕大鵬遊象外，藕絲窠裏是鴻濛。

北叟

七星影裏獨藏身，未肯南詢歷百城。莫怪老來無思算，從前得喪不關情。

仁山將軍

慈德高高非實功，平寬孤峻在其中。此峯不望衆人仰，只是衆人仰此峯。

嵩山和尚見訪次韻

山園水繞絕行蹤，龍象來時路自通。一刻清談無折合，大家混入是非中。

和韻嵩山和尚雪中見寄

冰花一夜滿林阜，露出嵩山千古標。明白裏頭無活路，神光徒爾立齊腰。

題臨川梵音閣 嵩山韻

水月道場天地濶，一樓影現百千樓。圓通不洗圓通耳，門外洪川日夜流。

建武乙亥予住南禪明極和尚退居淨土院以偈寄之

境致元非淨穢殊，大人所在是靈區。凝然藏密機彌峻，老矣休交德不孤。坐斷十虛爲丈室，指呼萬象作參徒。毋勞特地鑿隣壁，焰慧光明何處無。

明極和尚見和再韻以謝

仙凡咫尺有差殊，纔到壺中見別區。獨樹花開羣卉麗，衆山雲暗一峰孤。趨門咸是爪牙客，入室寧容糠粃徒。靖退也知非小節，說禪誰謂默時無。

又見和書懷以答

行藏只信報緣殊，再入龍峰卜舊區。飯罷與來吟力健，禪餘睡足夢魂孤。見聞一一非他物，前

後三三是我徒。莫謂住持欠機巧，灼然好事不如無。

清拙和尚起來行韻賀少林院明極和尚病起

起來行起來行，徐徐擡腳鴻毛輕。萬象忻然齊鼓舞，腦後圓光又重生。未有長行而不住，當頭坐斷千差路。佛祖莫由窺藩籬，懷中何曾介喜怒。未有長住而不行，放蕩漫遊乾闥城。控聚大千作戲具，無意驚人自驚。起來行起來行，不可形兮不可名。東倒西搖和泥水，峻機壁立終弗傾。衆生病則菩薩病，大悲寧墮愛見情。篋中四蛇養得穩，日面月面鎮長明。世醫拱手罔所措，少林祕術有公憑。將此一方除萬累，塵刹何處非昇平。起來行起來行，喜見宇宙全身橫。

送果首座

出入同門無楚越，休將情謂屬參商。山黃水肅秋強半，兜率誰言在夢鄉。

送元首座住慧林

天宮夢裏不停機，出格風流惟自知。古錫凌空霜露冷，慧林果熟在斯時。

送明首座赴防州安禪 建武年

祖苑光華混陣煙，江湖雲滂坐針氈。此行協得安禪瑞，一錫霜風價大千。

送明首座赴聖福

正人一出萬邪消，祖道何愁致寂寥。鍤斧這回生羽翼，待看佗日更遷喬。

送哲首座住慧林

世迫澆漓歲月深，祖門日廢莫由禁。良哉宗匠不懷手，鍤斧高提入慧林。

送以首座赴阿州補陀

龍淵通徹白花崖，南海潮音震法雷。莫把烏藤輕靠壁，他時必有善財來。

送昭首座住甲之慧林

化門隆替有因緣，一髮千斤要保全。法雨毋慳澍邊鄙，慧林榮茂蔭人天。

題徧界一覽亭

天封尺地許歸休，致遠鉤深得自由。到此人人眼皮綻，河沙風物我焉度。

題擊蒙軒三條殿

明應發部對東山，勝槩推排在前。到者都無蓋面帛，多生愚昧一時蠲。

雪中下山

庵內不知庵外雪，休將三等衲僧論。有時移步千山上，踢倒孤峯在腳跟。

臘八值雪

寒窻睡足夢魂回，不見明星眼自開。而地普天擎雪嶺，瞿曇何處出頭來。

佛成道

六載忍寒吾不如，觀星成道不如吾。出山忘卻來時路，直至乎今在半途。

佛涅槃

放光動地逗羣機，可惜小慈妨大慈。否去泰來二千載，年年春至百花披。

即事

秋色辭柯落葉多，寒雲載雨過山阿。人人自有娘生眼，爭奈現成公案何。

秀峯

天然擲出羣山上，莫謂微塵聚作堆。曉霧暮雲遮不斷，四方望見碧崔嵬。

雲巒

天然浩氣生膚寸，片片重重覆碧層。靈巖倍增孤峻勢，只堪仰望不堪登。

佛光禪師題清見韻

追思乃祖昔年游，自愧逢時不若鷗。幸有古今該括句，海門明月照沙頭。

南江

明正爲源流不盡，百城烟水此中收。達磨失腳過魏北，閒卻蘆花兩岸秋。

送在首座赴長保

久遊震旦換雙眸，向外馳求已自休。衣錦歸來不袖手，肚皮束篋下西州。

貞和改元臘月九日夜半雷鳴次日大雪

昨夜震雷誰不怪，今朝瑞雪世皆懷。道人盤礴乾坤外，落得生涯吟境寬。

因雪

冰葉翳天無碧落，玉塵埋地沒青山。太陽一出孤峯頂，徹骨寒來也是閒。

玉林

布影交光無雜樹，梅檀蔭蘂亦非倫。風磨雨琢絕瑕類，葉葉枝枝渾是珍。

枯禪

聖智凡情俱罷休，不將榮耀挂心頭。莫言墮在石霜窟，胸有三千活馬騮。

曇芳

希有瑞花時一現，西天此土競相傳。遺熏餘烈今猶在，不混千叢萬卉邊。

春屋

百花本是一枝花，遂見衆芳聯我家。驀地開門出和氣，韶光從此徧河沙。

無得

道德慈威集大成，從門入者匪家珍。胷中蘊藉盡拋卻，空手垂來賑濟人。

海岸

渺渺瀾瀾納百川，煙波萬里水連天。古帆掛得底時節，到此方知有那邊。

古首座南遊有年而歸國寓居陬方以三偈見寄因和其韻

頃刻相逢如百年，寒溫舒盡口皮禪。莫言愚智異區域，震旦扶桑無兩天。

徧參海外究幽深，畫錦鮮輝祖祖林。續得龍湖千載躅，靈神廟裏振雷音。

這回換卻舊時顏，不識胷中幾海山。名翼高飛有時在，待看朝旆入雲間。

天龍寺十境

普明閣

廣大慈光照世間，善財當面隔重關。眼皮橫蓋虛空界，彈指開門匹似閒。

絕唱露

灘聲激出廣長舌，莫謂深談在口邊。日夜流傳八萬偈，灼然一字未嘗宣。

靈庇廟

精藍分地建靈宮，專冀神風助祖風。莫怪庭前松屈曲，天真正直在其中。

曹源池

曹源不涸直臻今，一滴流通廣且深。曲岸回塘休著眼，夜闌有月落波心。

拈華嶺

靈山拈起一枝筭，分作千株在此峯。只見聯芳至今日，不知劫外幾春風。

度月橋

虹勢截流橫兩岸，一條活路透清波。度驢度馬未爲足，玉兔三更推轂過。

三級巖

分危布險作三重，水激雲遮路不通。無限金鱗遭點額，誰知徧界起腥風。

萬松洞

萬株松下一乾坤，翠靄氛氳鎖洞門。仙境由來屬仙客，莫言此地匪桃源。

龍門亭

不借巨靈分破拳，兩山放出一洪川。三更夜半無來客，數片歸雲宿檻前。

龜頂塔

松生背上綠毛長，頂戴浮圖萬劫祥。戶牖恢開不礙六，重重法界目前彰。

題三塔

雲居古語協真風，三塔該收萬塔功。落落團團無縫罅，龍蛇混雜在其中。

虎谿

山險澗深人不到，菸菟作隊圖威勢。三賢攜手過橋後，錯聽水聲爲笑聲。

投機頌

多年掘地覓青天，添得重重礙膺物。一夜暗中颺碌博，等閒擊碎虛空骨。

將軍府有山林泉流之樂以偁美之

蓬瀛勝槩聚營中，石峙流澗與不窮。好箇優遊嬉戲處，曹溪正脈自流通。

題常在光院上下兩庵今作一院

山帶水石獻奇珍，勝地方知屬傑人。下界上方同一境，妙莊嚴外更無塵。

臨川無極和尚雪韻

人人只見不香花，未會紛飛落在何。上等禪和坐堂裏，識神依舊屬陀那。

高山和尚訪西山庵居

幾片白雲橫谷口，不遮道友扣扉來。從前惡跡莫由晦，把手徜徉三兩回。

題友雲庵壁

洞僻巖深畫若曠，一間竹屋半容雲。單丁自有單丁樂，不羨聖賢來作羣。

有僧掘地得佛舍利因素師偈

地中湧出赴機緣，一顆圓光含大千。難測難量奇特事，明明只在鑿頭邊。

璞翁西堂見寄韻

彼此隨緣卜別山，同風千里固爲難。楚雲越水無遮障，日夜相逢話老殘。

放牛

鞭繩拋卻任天真，欄外遨遊不顧人。將謂無由討蹤跡，塵沙刹界現全身。

清溪

攪不渾時無淺深，水天得一碧沈沈。要窮真箇曹源脈，休向中流兩岸尋。

問叟

凡聖行儀都不干，騰騰任運似癡頑。這般活計無人識，一箇老翁天地間。

古源

曹溪一滴先威音，流遠方知出處深。可惜今時未還客，外求竺土大仙心。

默翁

默翁求我默翁頌，自語相違笑倒人。不二門中重檢點，維摩也是構來唇。

中巖

不道兩邊呈嶮峻，更無差路與人行。空生未解談般若，幸有孤猿叫月明。

玉巖錄會殿

峻機光潔非瑠瑤，八面玲瓏絕點埃。好是現成般若體，諸天日夜雨花來。

瑞山三條副將軍

草木呈奇禧氣浮，祥雲靉靄覆峰頭。千巒萬阜推高德，那箇蒼生不受麻。

送榮首座赴長保

親炙多年緣自熟，一朝告別下西州。住山祕訣休求覓，鋤斧元來在手頭。

平山

坦夷寬廣絕高低，七凸八凹歸一齊。最頂不知在何處，元來無路與人躋。

方外

一片閒田無四至，中心樹子也難看。回頭南北東西表，始信從前被眼瞞。

鐵舟

徹頭徹尾自渾鋼，不入洪爐泛大洋。盡謂尋常船舫類，是非海裏錯商量。

絕照

明鏡和臺打破來，瞎驢眼裏不生埃。昏昏地家風別，一任燈籠笑口開。

適庵

主人自若展眉峰，椽柱樞梁呈笑容。更有一般和悅處，半窻明月半窻風。

因亂書懷

世途今古幾窮通，萬否千成歸一空。傀儡棚頭論彼我，蝸牛角上鬪英雄。須知鵲蚌相持處，終

墮閣魔考鞠中，放馬華山待何日，不如頓轡覺城東。

夢憲正覺心宗普濟國師語錄 下終



我宗無語句亦無法與人佛國道漏逗不少  
夢憲國師夢中驚覺起來便見三世諸佛無夢說夢六代祖師無夢說夢天下老和尚無夢說夢還知夢憲落處麼一國之師三朝所敬南禪初步淨智後遷圓覺重臨天龍再住直得炎天飛白雪陸地產紅蓮樹頭驚起雙雙魚石上迸出長長笋如斯機用豈可測量設使疎山石頭也須退身三步始得

至正二十六年八月

前嘉興天寧楚石道人梵琦謹跋

先國師語要嘗不許傳于世故吾徒多藏之而未敢違囑矣然藤原公德叟居士乃英烈丈夫而既身為門弟子其機鋒與所存雖預禪會古之名士輩未必過也輒取語本以命梓且不依所誠亦不令吾徒議之吾則謂先師見之尚不遇焉諸方亦必為勘驗之但妙葩勉從紀以歲月云

貞治之四年歲在乙巳五月二十二日

天龍住山門人 春屋妙葩謹書

## 夢憲正覺心宗普濟國師語錄附錄

### 西山夜話

師住南禪時元翁和尚佛德謂師云和尚出叢林來二十餘年其間動止不定既追于十餘箇處我心目中以謂此豈非勞身障道之因緣乎近看像法決疑經佛言比丘止住莫過三月若人謗言此比丘動止不定者必當墮泥犁從此僻情已破了也師曰我不必守其佛制故爾直以大圓覺為我伽藍東去西留未曾暫離其中世有多年止住一處者未必坐一牀上有時趨東司有時到後架有時庭前徘徊有時山頂眺望此豈非動止不定乎然其動止未嘗離此一處故不謂我身在別處若轉其有限情以遊無邊境則何怪之有乎

有僧謂師和尚是臨濟下兒孫而不以本分接人常講經典者何也師曰夫善知識者須是解行相應始得縱雖相應若也不得時機則無益於世矣余羽毛未具力量未充不得其機不逢其時寧怪得我乎今時已眼未明妙用未備只以誦情學得古人標格一挨一拶轉轉地乃謂舉揚宗風看來只是一時風流學古人體裁則易得古人利益則難若夫不願無其利益徒誇得其體裁者固非吾所期耳僧云若爾則和尚胡為出主法社談錄講經耶師曰造惡業者專為墮泥犁乎而墮泥犁者只為業力所牽故爾吾未肯求長老之名而出主法社者只為前

生片善所驅故也。然吾亦不必圖閉門自活，且要因行掉臂，是以講經談錄，或令未知因果者，知有昇沈，或令未解大乘者，解有玄譚，或令未信祖宗者，信有此事而已。古人或在路口施茶，湯於旅客，斯乃結衆緣也。吾亦如是，只談佛祖言教，以結衆緣耳。僧云：今時僧俗亦信禪者多，何言不得其機乎？師曰：不道世無禪機，只無與吾針芥相投之機耳。僧曰：鈍根之人，縱雖不悟，直以本分接之，則結緣之分亦可以深，何故棄之乎？師曰：不見道，千鈞之弩，不爲驢鼠發機，如來出世間，言長語滿于海藏，何不直示耶？備宜思之。圓悟禪師曰：先奪其所偏墜，然後示以本分。鉗鎚，大慧禪師曰：宗師須備衆生機說法，如擊石火閃電光一著子，是這般根器，方承當得。根器不是處用之，則掘苗矣。僧云：若爾則如來所說，皆是虛語乎？師曰：如是所問，皆非正問。故我前所答，亦非正答，只徇爾情，且弄泥團爾。有人以書呈大慧云：請示公案，慧答曰：開爾常讀圓覺經，吾所示公案，亦在其中。大慧平生所示公案者，須彌山乾屎橛，趙州無字等是也。請看經文，如是公案，在於何處，倘能於此會得，匪啻圓覺。至于千經萬論及世間盡言細語，靡非祖師公案。如來所說，豈謂之虛語也哉？恁麼則專以講經教誘吾而言，失于宗師體裁乎？古人云：馬祖百丈以前，多示理致，少示機關。馬祖百丈以來，機關多理致，少此亦何之謂乎？謂上古知識無眼，故多示理致，耶？謂後來知識無眼，故背先輩以機關接入耶？當知祖師門下，不似座主家法門一尺終一尺，二尺終二尺，只是見機而作通途，變格謂之破家散宅。今時或貴機關，或崇理致，並是不出座主家法門也。世尊言：始從鹿野苑，終至跋提河，未嘗說一字，且道是理致耶？是機關耶？若也於此薦得，讚吾也得，毀吾也得。

師每謂徒曰：余年二十受業於建仁，不出堂裏，孜孜參究此事，明年冬下關東，掛錫巨山，有著宿論。余云：古人機緣語句，刊之於版，以流通者，無佗只欲令後生勉學，因此悟入，而今承虛接響，以爲名種利鎖之資者，多矣。或有自稱道人，不參知識，不看語錄，只管濛濛閒坐者，並是失于禪錄流通之所由者也。世道澆季，罕有真知識，苟勵向道志，以看禪錄，則古人機緣卽是今人機緣也。安有古今之異哉？余甘其言，禪餘歸寮，看閱語錄，于茲一山國師，兼住建長圓覺，在其會下，數年晨昏親炙，參決吾家宗脈，自謂禪門宗旨無所不明也。時復自顧，何中依前未穩，乃知從門入者，不是家珍。古人云：靈光不昧，萬古微猷，入此門來，莫存知解，我出教門，入禪門，所學雖異，知解是同，只麼過時，其豈非味卻靈光者哉？便以年來所貯骨董袋，悉付丙丁童子。子時佛國禪師住萬壽，余初詣函丈，先伸其所志，佛國歎之，乃云：我年十六受業於東福，依止一耆舊，他令我讀禪錄，讀之一行，就問此意如何？他云：宗門語話，不似教家所談，故不敢解說。我云：苟不解說，云何知其旨趣？佗云：須是自悟始得。我又問讀錄積功，自然得悟否？佗云：若要悟去，直須自究。我聞斯言，不復讀錄，便歸堂裏打坐。僧侶多來勸我云：少年之人，先須學問，一旦道心鮮克，有終老後必有所悔，我不敢動。彌好坐禪，今年已逾六旬，未有所悔也。言已一笑。余聞其激勵，志操彌堅，不憚風雨，連日去參，粗有趣向，而未有徹底分。深欲晦跡丘壑，以究此事，遂出瑞鹿下，與州卜居於深山，自誓若不明此事，須與草木俱腐。圓悟心要，大慧書林間錄，置之机上，以爲警策。其外無所著也。閒居已閱三霜，見地未成一片。一日忽憶佛國禪師臨別垂誨云：道人若於世出世，毫釐有所挾，則不能悟入也。自惟我於世諦，曾無所希，然未免挾佛。

法以作悟入之障。既知此非馳求之心自歇，只麼兀爾過時而已。一夜驀地踏繯，從前妄想窟窟，方知佛國所示非虛語也。從此比來，所著三部語錄，亦皆付人眼不看，書脇不著席，只守閒閒地。經於二十年，老來力衰，不耐常坐，又被業風吹，至于住院匡徒，西播東倒，雖然操履負初志，未混塵緣味。本明斯乃從前常坐不臥之力也。或陞法堂，胡說亂道，或應衆請談，錄講經言，雖欠奇心，無所畏，亦是從前弃捐學解之效耳。到此方信，古人道：愈晦愈明，若也晦之又晦，以至無晦，則自家大機大用，不求自得，現前不可得而疑焉。

師又曰：佛光禪師謂佛國云：我見日本兄弟，一生得悟者不可多矣。此國之爲風也，只貴智才，不求悟解，是故設有靈根者，博覽內外典籍，深嗜巧僞文章，不遑自究此事，迷中過了一生，固爲可憫。或有一類稱道人者，多是其器量不堪，博學強記，故以閒坐爲功業，而不辨真實向道之心。此類亦非今生可開悟者。佛國先師爲余說之，余乃問云：若具靈根，直下參究者，且置不論，前所謂二類之中，何輩爲優？先師曰：直饒鈍根，今生不悟，倘能孜孜捱到臘月三十日，不爲業力所牽，來生出頭來，必當一聞千悟也。若以博學爲業者，不翅虛來闊浮，打一遭，亦恐招得來生不如意處。

有僧問師：多積學功，以資談柄者，固不足言焉。博覽古語而發智光者，何過之有乎？師曰：中下機根不能直下到家，千聖憫此，且設蓮座以接之。其蓮座者，備所謂古語也。若論其益，則經有經師，律有律師，論有論師，何怪禪師乎？古人云：達磨西來，不立文字，直指人心，見性成佛。又云：此事若在言句上，一大藏教豈無言句乎？用祖師西來作什麼？黃檗禪師云：學者若欲成佛，一

切佛法，捨不用學，唯學無求，無著，無求，卽心不生，無著，卽心不滅，不生不滅，卽是佛。八萬四千法門，祇是接引門，不翅祖師門下獨作此說。了義大乘亦皆合轍。法華云：我與阿難於空王佛所，同時發菩提心，阿難常樂多聞，我常勤精進，是故我已得成菩提。楞嚴云：阿難見佛悲泣，恨無始來，一向多聞，未全道力，圓覺云：末世衆生，希望成道，無令求悟，惟益多聞，增長我見，縱覽羣籍，而發智光，豈得與阿難齊肩哉？與夫學阿難得多聞，曷若學世尊成菩提，余事不獲已，談錄講經，只要令人知佛祖玄旨，不在文字言句之中耳。僧又詰云：宗門雖接最上機，而亦立意句，其中以意句俱到爲勝，爾則有伶俐漢，意句並參，有何不可乎？師曰：古人云：未得底人，參句不如參意，到得底人，參意不如參句，備只知立意句，未知所以立意句，古人又云：句能刻意，意能刻句，意句交馳，爲之可畏，備還會此語麼？須知本分田地，意句俱不相干，雖然如是，建化門中，且論意句，初心學者，於情識中，欲參宗師話脈，則自塞路頭，莫由悟入，故云：未得底人，參句不如參意，已得悟入者，若未達句，則失卻宗師體裁，不能接人，其貴意句俱到者，豈令初機意句並參之謂者哉？僧云：近來宗師令人看公案，此豈非教初心學者參句耶？師曰：不然，圓悟禪師云：初機勉學，乍爾要參，無捫摸處，先德垂慈，令人看公案，蓋設法繫住，其狂思橫計，令沈識慮到專一之地，驀然發明，心非外得，向來公案，乃敲門瓦子矣。圓悟與麼說話，豈欺人哉？當知先德令人看公案，只要入得自家大解脫門耳。大慧禪師每爲學者舉似古人話頭云：莫向意根下卜度，莫向舉起處承當，莫颺在無事甲裏，大慧恁麼舉似老婆心，亦在其中，翳睛術亦在其中，若能與麼提撕，不可謂之參句也。縱坐蒲團上，冥心寂默，苟於語路上作活計，則不是參

意之人也。圓悟云：卽心卽佛，已是八字打開，非心非佛，重向當陽點破，不尋其言，一直便透。方見古人赤心片片，更入佗語言中，則永不透脫。又云：若具大根器，不必看古人言句公案，但只從朝起正卻念，靜卻心，凡所指呼，作爲一番，作爲一番，再更提起審詳看，是箇甚物，作爲得如許多當塵緣中一透，則清淨無爲道場也。二大老所示，寔是參禪樣子也。今時學人多是於冊子中，探得古人話脈，蘊在胸中，代語別語，無所滯，一挨一拶，得自由，自謂祖師玄旨止如此矣。此乃圓悟所謂狂思橫計之類也。

僧又問云：承虛接響，而自謂悟達者，寔是狂思橫計之人也。若有伶俐漢，實得句中眼，寧謂之非悟達者乎？師曰：直饒得句中眼，若未得見地明白者，名曰句到意不到之人。若是承虛接響之流，不足評之。古人云：但得本則莫愁末，見處明白是本也。機鋒顯脫是末也。譬如種樹，其根得活，則枝葉花果靡不榮茂。大慧禪師曰：大凡參禪，不必有機鋒，便言我是，昔雲蓋智和尚道眼明白，因太守入山，憩談空亭，問：如何是談空亭？智云：只是箇談空亭。太守不喜，遂舉問本臺。願本云：只將亭說法，何用口談空。太守乃喜遷本住雲蓋。若以本較智，則大遠，乃知眞實事，不可以機鋒取。黃峰元首座亦有道之士，答話機鋒鈍，覺範號爲元五斗，蓋閉口取氣，炊得五斗米，熟方答得一轉語。

僧又問云：文字言句，若於學者爲害，何故古來尊宿各有代語別語，拈古頌古，而行于世耶？師曰：明眼宗師，東語西話，以接學者，所示雖異，皆是呼小玉之手段也。若有吾家種草，言外領旨，則宗師言句何害之有乎？然事久成弊，守株刻舟者多矣。因茲宗匠間出而救其弊，謂之通途。

變格亦爲破家散宅。昔圓悟老師住夾山時，爲學者評唱雪竇頌古，名曰碧巖集。佛鑑禪師以書責之，其略云：某昔奉祖峰老師左右，嘗聞其語，備輩佗後忽爲人天師範者，切宜以此事自勉。某遂銘於心，不敢忘。茲聞老兄邇來爲兄弟請益雪竇頌古，有許多擊節某聞之，不覺洒涕。自謂高蹈之士，何至此矣。老兄何不激揚達磨未來時因緣，誘接學者？云云。大慧普說中云：先師見佛鑑書，遂已。然有好事者，殺梓行于世矣。後來大慧炬於其版，此乃破家散宅之手段也。一炬之後，二百餘年，迨于大元大德年中，有耦中張明遠，復重刊版以行于世，有號三教老人者，爲之序矣。其始云：或問碧巖集之成毀，孰是乎？曰：皆是也。云云。其序中只陳圓悟成之，大慧毀之，皆有其以而已。此官人亦未知宗師手段不在成毀處。馬祖百丈以前，多示理致，少示機關。馬祖百丈以後，機關多理致，少示風穴與化，唱彌高和彌峻，亦是通途變格之體裁也。當知祖師宗旨畢竟不在理致機關之中，都是呼小玉之手段耳。所以道：會則途中受用，不會則世諦流布。又云：看佛祖言教，如生冤家，始有少分相應。僧云：苟爾則都不看言教，默然過時者，可乎？師曰：古云：不可以語言到，不可以寂默通。祖師門下，不立文字，其豈喜默惡語哉？只要令人知此事不在語默處耳。倘能透明此事，佛祖言教，咸是我屋裏事也。然則要知佛祖言教，切宜放下，從前學解機智，就放下，處猛烈提撕，一則公案，若也有靈根者，不必看公案，亦不墮寂默處。一切時中，直下參究，如此之類，並是吾家道人也。向來所說，偏爲吾家道人論之，其若宿植浮淺，都無道念，只管好於博學者，不是余之所論也。然若於其中，或知因果可怖，以慎行儀，或窺禪門藩籬，以補宗教，則可以流通相似禪，此亦不可弃焉。布袋和尚十無益中云：行學都

絕僧形無益，蓋是此之謂歟。邇來叢林復有一類，專學外典，爲業不是，參意亦非，參句喚作禪，僧則可乎，經論之中處處呵之，既爲佛子而不拘佛制者何也？僧又問：參得句者亦自謂透得西來意旨，如何驗其非參得意者耶？師曰：古人云：達磨西來別無一法傳人，祇是指出人人具足箇箇圓成，與佛祖不移易一絲毫而已。既言人人箇箇與佛祖不移易一絲毫，何容自佗勝劣於其間哉？若有人謂我已悟他未悟，而生慢心，則可以驗知是人未曾參得西來意旨，倘能參得西來意旨者，乃知教門性相事理，禪家理致，機關盡是標月指敲門瓦也。今時學人到處聚頭計較指頭短長，論量瓦子大小而作實法會，此乃語話禪也。寧謂之參得西來意旨者哉？大慧禪師自少行腳參得語話禪，自謂參禪徹底，三十六歲始知其非，遂逢圓悟老師打破業識團，後來爲衆垂誨，每說其錯，以誡學者，可以爲今時學者之針艾矣。若是明眼宗匠垂手爲人，把住放行擒縱殺活如擊石火，似閃電光，謂之活祖手段，亦名醫暗術。永嘉大師云：或是或非人不識，逆行順行天難測，未到這田地而學其體裁者，匪啻自錯，惹得多少人，以成魔業，不可不慎。

### 夢憲正覺心宗普濟國師語錄 拾遺

#### 臨川家訓

本寺住持不可妄請，三會院塔主與門弟宿老相共商量，選其器以任之，門弟之中無其器，則請佗門名勝亦可也，莫做尋常度弟院之式矣。共住僧衆須擇其人，莫問自佗門派，安衆多寡宜隨莊園土貢，近來長老或徇人情，或憐弟子，不顧常住煩費，安衆過分，以致山門衰耗，甚不宜也。古人云：安僧不必多，日用齋粥常教，後手有餘，自然不費力，良哉斯訓，不可不循。沙彌喝食掛搭莫過五人，十七歲已前不許做僧。客僧若非常住僧知己者，不可接之所接客僧，莫過一宿，或阻風雨，或有事緣而淹留者，當稟住持，不爾則典座不可爲之打飯，古來叢林皆開旦過以接方來，今也宜做之，雖然世道澆季，似僧而非僧者多矣，不翅費常住，亦有濫清衆，此乃所以予之接客不敢做古者也。兩班莫過十人，侍者宜請四人，受請之人固辭若有其謂則可免，無理而辭者須起單去，居位須經一回，不得容易告退，大刹尙得人不多，矧是小刹乎？雖滿一回，如無交代，則住持懇請而留之，若也固辭及再三則可免，須慮其位以待後來寮元堂主淨頭聖僧侍者，不可缺人，寮元須係二十臘以上之人，半月半月代而主之，堂主須請寬心耐事，哀憐病僧之人，淨頭聖僧侍

者若無自欲之人，則可係十臘以下之僧，一月爲限輪番而勤焉。若有戒臘少而行年老者，宜免之。十臘以下如不足，則十五臘以下可勤之。

本寺佗山者，舊不論大小，並宜堂裏插單，禪誦作息與衆無異。或東堂西堂，或老衰不堪起居者，宜隨其意也。

衆僧位次不論著舊堂僧，宜依戒臘行年之次第也。其中若有東堂西堂及大耆舊，宜在衆僧之上也。梵網經云：先受戒者在後坐，後受戒者在後坐，如來意欲令人尊重戒法，故作此說。然看今時禪流受戒之儀，多是有名無實。少年僧道我是戒臘已經年序，便在老僧上而坐，其言則似梵網之說，其理則失敬老之儀。如來制律，開遮隨時不可堅執，是以予不必用受戒先後爲位次也。同年之人，以戒爲上，同戒之人，以年爲上，同年同戒者，宜依掛搭後先。若有十年老於他者，宜在佗上。若其戒十臘先於佗者，其年雖老不可怒焉。予於建化門中且作此說，真如法界無自無佗，更有何位次也。只要諸人各入無諍三昧，識得無位真人而已。

遠國莊園公務，須是莊主掌之。於寺邊田地則都寺或監寺相共掌之。莊主不可妄請，宜選其人，或請或改，並宜住持與兩班大耆舊及老僧相共評定，不得輕忽。莊園土貢收納時，亦須諸人評定，細計來年齋料及修造之公用，勿令常住致衰弊。住持及知事不可信意支用，恐招大衆疑怪矣。

山門規矩，須取要而行之，不必做大叢林矣。今時叢林事于禮數，廢于道行，豈得不失古人立規繩設禮數之意耶。如其於事上通無事，則禮數繁多，也有何妨。後生勉進，不能如此，要須省。

萬事而專一行矣，日用勤行法式，具在年中行事。

四時坐禪，唯除浴日坐參，其餘極寒極熱，修正蘭盆時節，亦不可開。若於坐禪時，雖有可開之趙州和尚云：我在南方三十年，除粥飯二時，是難用心處。趙州寧謂粥飯二時不是正用心處耶。只是言其餘粥飯外，更不難餘事耳。此老生而知之人也。然其履踐工夫，猶以如此。矧是自己未明者乎。古德又云：大事未明，當如喪考妣。大事已明，亦當如喪考妣。古人苦口叮嚀，其意豈在令人限日約時工夫不純乎。上古道人皆是卜僻洞深巖，居樹下石上，更有何事可作。廢寢忘食，一味存道，百丈建立叢林以來，普請作務其事不少。雖然，人人以道聚頭，故辨道工夫，不曾爲事緣所奪。百丈滅後，迨于三百年，叢林規繩漸衰，縹緲流少有慚愧，始有擊版坐禪之儀，謂之四時坐禪。蓋是主法尊宿，曲設方便，以誘懈怠者耳。今時後生猶嫌四時坐禪，動則欲令省略，無慚無愧，莫甚於此。

臨時祈禱，或順救命，或依武命，諸寺院一同勤行，則本寺亦當掛祈禱牌，而致精誠也。其餘或爲寺家，或爲檀越，別作祈禱，則不可。每日三時看經誦咒，併爲天下康寧伽藍鎮靜，每日祈禱若無効驗，一時勤行，豈有感應乎。祈禱有二，所謂俗塵執心深重，故欲祈佛禱神，以持壽福。攘災厄，此是世間之所祈也。身心道器，不可虛棄，故求三寶諸天之哀憐，以要進道無障，是爲出世之禱也。今見時人信佛法，崇神祇，多是世間祈禱耳。僧家又徇世情，爲之所禱，以貪名利，其豈理之所宜哉。師檀俱違道理，佛神奚有哀憐。縱有小利，卻爲失大利之因由，可不慎乎。禪家只須省萬事守本分，乃是報四恩資三有之祈禱也。

法堂不要構之何則古之叢林以宗說俱通之人爲主法者會下龍象居頭首位以助住持之化以故上堂秉拂所益尤多今時叢林道不及古大刹長老頭首尙以難得其人何況小院乎若是智眼不明機辨不具勞心於相似之間語紛念於滑稽之浮華可謂自欺亦欺人矣不如住持頭首與衆作息同參涅槃堂裏禪若也住持具古人體裁者不妨端居丈室以接方來事謂無法堂乎

或放曠閒遊或故往觀聽或晚出門外或夜宿佗所並皆可制若有要緊之事當稟住持及維那而去

不許獨入比丘尼庵及婆婦家但除爲佛事受請直饒赴請不可無伴而去

比丘尼及女人不許非聽法時而入寺來直饒齋會時節亦不許於寮舍內令喫茶飯等

方丈及諸寮緇白集會喫點心作茶宴游談終日而去甚不宜也唯除特爲佛事縱爲佛事設大齋會點心無過一兩種

若輩若酒莫使入門縱爲調菜亦不可用縱有俗客日午以後莫令佗食寮暇僧亦莫過中而食若爲療病要非時食宜歸延壽堂僧有二種謂菩薩僧聲聞僧圓頂方袍皆是聲聞僧耳教中云釋迦法中無別菩薩僧蓋由釋迦如來出于濁世宜以聲聞形而續慧命耳是故佛赴鹿苑現比丘形文殊等大乘菩薩亦皆剗染同其形體一其威儀法華云內祕菩薩行外現是聲聞乃此之謂也今時禪流多言大乘行者寧以禁戒束身乎嗚呼作此說者大違如來所以令諸弟子同作聲聞形之意也百丈規繩豈爲小乘學者設耶然佛運道于澆季具三千威儀守

八萬細行誠以爲難些子教誡誰不能守之若是不能者宜弃僧形在俗行禪復有何妨乎

請暇以五十日爲限若有遠行不能早歸則後日歸來更求挂搭免與不免須任住持之意

寮暇莫過七日七日以後猶未得安則可爲病暇宜在寮將息不得在佗處

病暇之人宜在延壽堂不可在他處若欲在他處療養宜請暇去請暇若過日限須抽其單輕

安之後更求挂搭或免或不免宜任住持意病中只許非時食不許喫葷酒等律院之式療病

不制食五辛而制非時食其制意尤有以也予所制反此亦有所思不得怪焉或服藥用酒嚥

下或煎藥少入葱根則不禁之其餘宜遵如來寧死不犯之誠莫謂酒肉五辛能令人養身延

命俗家長時食之者未見長生不死之人僧家爲道養身非是古聖所制幸有餘藥可用而求

有罪之藥是愚之甚者也人命難保無病而死者多矣何況抱病之人乎莫謂先療病後行道

古人云苦樂逆順道在其中須知病惱時節乃是道之所在而已

近來叢林諸寮各構小庫裏其意樂殊不順理火事亦可怕也一向制之僧家宜甘枯淡無愛

關熱縱有來客冰雪相看也得

今此伽藍偏依都督親王大願力而興成矣因卜寺後奉安報恩之塔其傍又構卯塔以表

開山之儀中立彌勒堂充兩塔之昭堂因號三會院此皆公界所宜有者也此外伽藍郭內及

菜園裏莫卓私庵予於三會院東構假山水恐其犯用常住菜園乃買隣地以代之

守口攝意勿致鬪諍僧伽是梵語此云衆和合苟以我慢貢高介懷穢語諍論亂衆其豈謂之

僧伽耶既是以道聚頭縱是法譚如及諍論則不可矧爲閒事長無明乎然彼此同是凡夫譬

喜警嘆難得而禁，如有少紛爭，則住持及首座維那，勸令和合，及于相罵相打，則不論理非，兩俱出院。

犯重之僧，實與不實未分明，若有衆人一同指目，則莫許其住，長老密誘其人，令起單去，莫出罰榜。

寮舍資具，一切宜從儉約，僧衆衣服，不得華奢，不翅障道，亦恐招賊。

今時僧舍爲防賊難，蓄諸兵器，乃是法滅之因緣也，可不慎乎？近來惡賊，匪僧偷僧物，間有奪僧命者，此乃僧畜兵器之所致耳，苟守佛制，不貯財寶，卽是防賊之器械也，只須把佛祖玄樞爲務，莫以世間厄難介懷，倘能如此，諸天善神爲之擁護，何勞自畜器械，如其放逸無慚，招禍上身，百千兵器，亦無所用矣。

末寺住持亦宜擇其人，本寺長老三會院塔主，并門弟老僧相共和會而請之，門弟之中無其器，則可請佗門之人，其寺規矩宜準本寺，一朝長老不可自恣而行焉，古者云：千年常住一朝

僧思之，末寺者甲州、越前、播磨、瑞光、阿州、補陀等是也。

本寺末寺莫作勝劣之想，要須互相資助以續祖燈，是則予之所祝也，諸方間有以末寺充于本寺莊園而受用其土貢，因茲末寺致衰落之弊，本寺招互用之尤，彼此無益，不可不慎。

本寺及末寺契券等正文，並宜在三會院，恐其紛失耳。

庫裏法式，書于別紙，故不載于此。

入院之一切宜從略儀，古人入院之法，其儀可則矣，今時不準古法，只以華奢爲式，煩擾越費。

常住之弊，從此起也，可不顧乎？入院之時，請隣峰尊宿爲證明，是日日本樣耳，大唐法式，雖不請人，或有新命知己，爲義來在座下作證明，就請其中宿老爲白槌之人，其式尤有以也，本寺入院既略法堂之儀，故不可請白槌之人，況復其餘乎？佛事之式。

先入山門燒香，可有法語，次到佛殿燒香禮拜，可有法語，次到土地堂祖師堂，法語，次至僧堂挂搭，古法掛搭

之後，至佛殿，今式以順次，先至佛殿，然後入方丈據室，法語，次再到佛殿於佛前當慈祝聖香及嗣法香，時昔百

丈禪師創立規繩，靡不備陳，若也遵守，則叢林行事奚有不濟乎？然近來尊宿別立規矩者多，

蓋是隨時垂範，變格導人之故耳，予今略設法度，以作小院之家訓，復何怪哉？客須聽主裁，毋

辭依而行焉，其或不然，任君別求如意處而止住去，轉桑震旦世界廣潤，何必在此勞于顰頰乎？

曆應二祀仲夏下泮

夢窓老拙書于三會院詢軒



發願文

生生世世有恩者、我今悉其報恩德、生生世世結怨者、我今悉其謝冤讎、生生世世無緣者、我今悉其結善緣、各各願邪歸正路、互相資助證菩提、願我慈悲如觀音、行願如普賢、智慧如文殊、辯說如維摩、願我無難無災、道念堅固、智慧聰明、無有生死、應無所住、而生其心、直趣無上菩提、利益一切衆生、我此行願、念念相續、無有間斷。  
上來所修諸功德、先回向世生生父母師長親類眷屬、乃至十方世界一切衆、皆通六道四生、苦同顯五智三密德、次冀某甲從無始以來、至今所造諸罪、皆速消滅、生死無常迷、早悟色身實相理、縱今生不開悟、道心彌堅、修行志無怠、智見漸開、魔外障不起、願望皆叶、身心共安、臨命終時、身無苦心、不亂直生觀音淨土、親拜大悲尊容、則得六種神通、普遊十方佛土、供養無邊賢聖、成就無盡行願、若又不生淨土、生善人家、受聖流之形、諸不逢災殃、諸不破禁戒、親近善知識、解了無上法、不出三生、早成學道、無捨四攝、長救迷輪、仰願三寶垂哀、愍諸天加擁護、十方三世一切諸佛、至尊菩薩、摩訶薩摩訶般若波羅蜜。

夢窓正覺心宗普濟國師語錄附錄 終

國譯永源寂室和尚語錄

解題

寂室禪師語錄二卷は、上卷に偈頌を收め、下卷に法語、拈香、小佛事等を載せたり。寂室禪師の高風を窺ふ此書以外又見るべからず。蓋し、本邦禪林の語録中、本書の如く廣く世に流傳するもの稀れなり。

傳を案するに禪師名は元光、字は寂室、俗姓は藤氏、美作國高田の人なり。正應三年五月十五日誕生す。幼にして京に上り、東福寺の無爲昭元に就て學ぶ。年十五にして落髮受具し、近江國田上の郷に寓す。幾もなくして關東に赴き、約翁徳儉に參す。其の至るの日、儉曰く、昨夜諸聖降臨して、光山河を照すと夢む、即ち名づくるに元光を以てす。徳治二年約翁、公命に膺つて建仁寺に視察す、命じて湯藥に侍せしむ。延慶二年約翁鎌倉に歸る、師をして金澤の慧雲律師に従つて毘尼を學ばしむ、三月を経て其梗概を盡す。又東里會、寧一山、東明日の三大老に謁して、益薰灼を受く。元應二年歲三十一、可翁然、鈍庵俊等と海に浮びて元に入り、直ちに天目山に登つて中峰和尚に謁し、また元叟端、古林茂、清拙澄等の尊宿に參じ、其推獎を蒙る。元の泰定三年、我が歸帆を理め、長州の濱に着

し、三角に寓す、備後國古津平居士永德寺を創して延請す。觀應元年七月、長勝寺の命あれども辭して就かず、歸朝以來二十五年の間、備作二州の間に輒晦す。觀應二年攝津の福嚴に移り、又江州の往生、美濃の東禪、甲斐の棲雲に轉ず、延文五年江州の太守佐々木氏頼、奥島、雷溪の二境を獻す師其の雷溪の僻遠なるを見て梵居を締營す、山下の吏民競ひ至りて役を執り、幾もなくして殿堂、寶閣、林際に聳立す、即ち永源寺と號す。是の時に當つて四來の龍象來り從ふ者二萬餘人、皆巖に倚り茅を縛して安居す。光明帝屢々手詔を賜ふて其德を旌はす、又建長、萬壽の請あるも赴かず、光明帝詔して大龍の住持たらしむ、當時、春屋妙葩、中巖圓月等書を寄せて其出世を趣がす、師固く辭して就かず。帝復た手詔を賜ふて法要を問ふ、師復奏するに法常禪師馬大師に問ふの因縁を以てす、帝見て忻然たり。曾て僧に示すの偈あり曰く「個事明々呈似君。不須特地策三功勳。風和日暖黃鸝啼。春在花梢已十分」と、其文藻の婉雅なること概ね此の如し。貞治六年九月一日、諸子を含空室に集め遺誡訖つて偈を書して曰く「屋後青山。檻前流水。鶴林雙趺。熊耳雙履。又是空華結三空子」と、筆を投じて即ち化す、壽七十八、法臘六十三。謚を賜ふて圓應禪師といふ。遺稿に寂室錄二策あり、盛に世に流布す。

### 國譯永源寂室和尚語錄卷之一

#### 偈頌 (合計二百六十九首)

偶作

無業一生莫妄想、瑞巖只だ喚ぶ主人公、空山白日蘿窓の下、松風を聴き罷んで午睡濃かなり。

此の閑房を借つて恰も一年、嶺雲溪月枯禪に伴ふ、明朝下らんと欲す

巖前の路、又何れの山の石上に向つてか眠らん。

風飛泉を攪て冷聲を送る、前峯月上つて竹窓明かなり。老來殊に覺ふ

山中の好きことを、死して巖根にあらば骨もまた清し。

九月十三日、田原村に遊んで、赤舎に投宿す、同來の諸弟は、皆肱を曲げて寝に就く、獨り窓を開いて、月を觀て、聊か老懷を寫す。

①無業は大達國師なり、馬祖の法嗣、學者問を致せば、莫妄想と云ふ。  
②瑞巖、巖頭に嗣法す、常に石上に坐禪し、自から呼んで曰く、主人公、又自から應諾す、乃ち曰く、惺々著、他後人の謾を受くるなけれ。  
③金藏山、但馬太田の莊にあり、俗に金のくると云ふ。  
④枯禪、立て枯れ禪なり、一點の生氣も亦無き也。

戊子の季秋まさに半ばならんとするの日、田原の村裡烟蘿に宿す、看  
來れば五十餘霜の月、幽興は今夜の多きに如かず。

長州の逸上人、袖より塊石を出す、兩峽對峙して、恰も青玉を劈  
くが如く、中に條、白を夾んで、直下すること飛泉を懸るが如し、  
凡そ寒巖空洞幽趣餘態は、人をして、殊に丘壑の志を増さしむ、  
仍つて一絶を賦して、之に贈ると云ふ。

故舊懷を採つて奇物を示す、<sup>①</sup>嶺岼たる流瀑勢千尋、<sup>②</sup>因つて思ふ時昔  
厓嶽に遊び、雙劍峰前に、<sup>③</sup>獨り自ら吟せしことを。

關西の龍侍者は、高標清致にして、眞に叢林の頭角なるものな  
り、山中に道聚して、共に枯淡を守りしが、遽爾として告別する  
に偈を以てす、仍つてために韻を次し、其の行色を壯んにすと云  
ふ。

雪後の諸峰翠嵐を潑ぐ、寒梅初めて綻ぶ野村の南、岐に臨むの一句只だ  
これは是れ、<sup>④</sup>三喚機前に眼を著けて參せよ。

春日 吉備の中山に遊ぶの韻。

①機、機井とも使用して、手もつて、かきまわすことなり。  
②骨もまた清し、唐人の詩に、詩思清人骨の句あり。  
③戊子、貞和四年、禪師五十九歳。

④條白、一條の白練。  
⑤嶺岼、山の鋭き貌、又高也。  
⑥因思、塊石と嵐山の瀑布と、相似たるより、思ひ起せしなり。

⑦獨り自ら云々、獨字味ふべし。異鄉異客、花にも涙か凝ぐの體ありしなり。雙劍峰は香嵐峰と對す、嵐山にあり。  
⑧頭角は傑出の義、斬然頭角か露すの語あり。

⑨三喚の故事は、傳燈第五に出づ、忠國師侍者を喚ぶの因縁なり。  
⑩吉備中山の詩は、實翁和尚の作に和する也、故に才拙云々の句あり。

勝地千年の寺、房々竹樹の間、落花は古徑を埋め、幽鳥は空山に叫ぶ、  
遊客晨を凌いで至り、歸程に月を踏んで還る、<sup>①</sup>留題誰か壁を燿さん、  
才拙にして追攀を愧づ。

長勝の專使誣禪者に贈る。

使なるかな使なるかな命を辱しめず、佳聲は須らく是れ叢林に播すべし、  
情を盡して話して、吾が師の席に到れば、月下の寒蟬夜深に咽ぶ。

蘆鴈二首。(飛鳴宿食し、一隻は懸立す)

湘岸雙宿に慣れ、胡天幾行をか成す、平沙寒日の暮、獨り立つて恨  
み何ぞ長きや。

霜風秋を吹いて老い、楚甸稻梁稀なり、切に眼を呼び起すことなか  
れ、夢に飛んで北に歸るべし。

密叟侍者、遠く都下の建仁より特に山中に來つて、<sup>②</sup>相探る、夜話して旦に達す、甚だ十年の  
傾想を慰す、今や長州に歸つて、師を省せんとす、二偈を留めて別る、韻によつて奉謝すと  
云ふ。

林下老來誰と與にか期せん、夢魂幾度か京師に到る、今宵安禪の榻を閑卻して、燈盞油を添へて舊

①留題云々、題詩を壁上に留て、光輝あらしむるは誰ぞ。追攀は和韻する也。  
②長勝、鎌倉の長勝寺、禪師の師、佛燈を開山とす。專使は論語子路の篇に出づ、蓋し禪師を拜請に來りしならん。  
③吾師は佛燈を指す、月下の寒蟬云々は悽愴嘆息。  
④此の詩懸立を詠す、湘岸は南方瀟湘の岸也、胡天は北地。  
⑤此の詩飛鳴宿食を詠す、楚甸は楚國の郊外、即ち湘水の邊り也。  
⑥相探は、人を訪問するを探水と云ふ、此處も亦此の意。

時を話す。

利門名路の塵を踏むに懶く、千峰影裡に獨り神を疑す、故人俄に柴扉を把つて扣く、又聽く叢林<sup>①</sup> 事々新たなることを。

樁上人の遊方に賜る。

禪人來つて贈行の篇を討む、暗に枯腸を把つて苦に搜索す、渾て一句の君に呈すべきなし、月は空山を照して秋寂寞たり。

中秋雨に値ふ。

指話以前正に好し看よ、覺天津なく影團々たり、頂門に沙門の眼を具せずんば、卻つて中秋の夜雨に瞞せられん。

靈叟和尚に寄す。

五更起坐して松風を聽く、故人を筭へ來れば半は空となる、讀らず何れの時か臭骨を埋めて。兄の閑夢を煩はして荒叢に入らしめん。

韻を廣いで雄藏主に酬ゆ。

交談と寄書とにあらず、同參の句子擧して餘りなし、年來老弟懶僻多し、區々として起居を問ふことを休罷す。

① 事々新は、古風日に凋落。

② 指話、傳燈十八、玄沙の示衆也、正法眼藏大迦葉に付嘱すと云ふは、月を話するが如く、拂子を擧起するは、月を指すが如しと。

③ 靈叟は佛燈の法嗣。

④ 兄の閑夢云々、溲後の辨香を托すが如し。

東南月皎として海天晴る、惹動す高人萬古の情、沒絃の琴を把つて彈すること一曲、風前誰か是れ希聲を聽かん。

靈叟和尚に寄す。(兵庫の福嚴に在つて作る)

我が此の門頭市廓に接す、那ぞ日々事の紛然たるに堪へん、百錢一柄の鏝を買ひ得去つて、青山を刷いて暮年を安んせん。

重陽

晨を凌ぎ葉を掃ひて庭際に立つ、離落の西風露裳を濕す、時に山童の來つて菊を採るあり、報じ言ふ今日是れ重陽と。

成親の墓の韻

身は王事に亡じて只名のみ存す、悲み看る荒墳の藓痕を長ずるを、千古中山春寂寞たり、岩花の香は幽魂を返すなるべし。

室山に花を看る韻

野興人を催して青晝長し、行いては看る岩院滿庭の芳しきを、僧は玉樹陰中より過ぎ、鶯は瑤葩の重き處にあつて藏る、砌を擁しては應に山月の色を添ふべく、窓に飄つては又瓦爐の香を助けん、老來好景多く遇ひ

① 沒絃琴、陶淵明無絃琴一張あり、酒あれば則ち弄撫す、人其の意を問ふ、答へて曰く、若し琴中の趣を知らば、何ぞ絃上の聲を弄せん。

② 希聲、老子に「大器は晚成、大音は希聲」とあり。

③ 詩意、市近くで、うるさくて仕様がな、山の中へではいつて百姓でもせうと。

④ 重陽、九月九日。

⑤ 物さびた詩なり、重陽の氣分横溢す。

⑥ 他人の作に和韻せし也。

⑦ 王事に亡すは、藤原成親、後白河院の命を奉じて、平氏を滅さんとす、而も事終に成らず。

⑧ 中山は吉備の中山也、清盛、成親を此地に謫し、終に之を在木の別所に殺す。

⑨ 岩花の香云々、岩花の香體節

難し、眼風光に酔うて心狂せんと欲す。

⑧ 八塔寺に遊ぶ。

一嶽三府を歴し、白雲碧巔を覆ふ、峯高うして萬仞に踰え、寺古うして千年に近し、僧は坐す虚堂の月、猿は吟す老樹の烟、言を寄す浮世の士、此に來つて塵縁を脱せよ。

⑨ 神根の道中。

怪石奇巖碧澗の流、白雲紅樹夕陽の秋、  
⑩ 吳山楚水曾て行き徧し、清興は何ぞ此の勝遊に如かん。

佛涅槃。

三界の導師涅槃せり、人天等しく是れ苦に傷悲す、溪山二月花錦の如し、錯つて秋風紅葉の時かと認む。

⑪ 調上人の京に行くを送る。

八月九月風月好し、一聲兩聲鴈聲寒し、公驗は分明なり須らく歩を進むべし、元來大道長安に透る。

再び大和寺に遊ぶ。

たるは、彼れの幽魂の化現なるべしと、一説、古註に十洲記を引いて、死人返魂香を聞けば、即ち活す、今岩花香ばし、此の返魂香を以て、幽魂を呼び返すべしと。

⑤ 室山は播磨揖保郡にあり。

⑥ 砌を擁して云々、庭のあなたをかこうてゐるのは、山月に化粧をするであらう。

⑦ 窓に飄つて云々、窓先きに吹き亂れたるは、爐邊の香を助けん。

⑧ 八塔寺は播磨美作備前三州の界にあり。

⑨ 神根は備後國藤野の保にあり。(舊註)

⑩ 吳山楚水、吾曾て南遊して、支那の名勝に遊ぶ、而も此の清興に如かずと。

⑪ 三四の句、杜牧之の詩句「霜葉は二月の花よりも紅なり」を襲案す。昔ながらに冷水を流

此の地重遊を得たり、春残つて院落幽なり、花は樹上に歸し難く、雪は人頭に點じ易し、竹を鳴しては風夢を吹き、茶を烹ては客自ら留まる、

明朝又杖を携へて、去つて林丘に臥せんと要す。

壽聖の養直和尚の來論に酬い、兼て同門の諸法兄に簡して、長勝の命を辭す。

嘉音兩度まで林巒に到り、午眠を驚起して竹關を開かしむ、語を龍峰下の頭角に寄す、一生我を放して安閑を得せしめよ。

大澤庵主に寄す。

大士峰前に大澤を思ひ、安心山下に獨り安禪す、君今疾を抱き吾れ還た老ゆ、來往は知らず能く幾年ぞ。

⑫ 曆應辛巳、七月六日の曉、偶々夢に將に死せんとして、偈を寫す、覺めて之を記すと云ふ。

錯つて黄金を把つて鐵牛を鑄る、草肥え烟暖かにして林丘に臥す、今年五十有二歳、且喜すらくは耕さずして還つて秋を見ることを。

⑬ 建武丁丑、六月廿五夜、夢中に兩句を得、覺めて之を續ぐと

した様な感じがすると。

⑫ 此の詩最も流暢、讀すべし。

⑬ 公驗は、身元保證の字形也、關所の番人に示すもの、此處の公驗は、釋迦達磨の親しく授與せし手形なり。

⑭ 花は樹上云々、上の句は、落花枝に上らず、下の句は白髮是れ公道と云ふが如し、花のちら／＼散つて、人の頭に降りそぐ處。

⑮ 長勝の命、觀應元年、禪師六十一歳、足利基氏、親しく帖を書し、師を請して長勝に住せしめんとす、師辭して赴かず。

⑯ 龍峰下の頭角、佛燈下の草窟なり、龍峰は佛燈塔所の額。

⑰ 大士峰は、備前慈廣寺の山號。

⑱ 曆應辛巳、禪師五十二歳。  
⑲ 黄金、百鍊の黄金を以て、鐵牛を鑄る。

⑳ 耕さず云々、耕さずして、取入

云ふ。

人生倏忽として露電に同じ、計較何ぞ曾て徒に自ら瞞せんや、萬事縁に随つて、胡亂に過ぐ、飽くまで白飯を餐して青山を見る。

● 椎村山庵の壁に書す。

澗水人間に下り。巖雲別山に過ぐ、聊か幽鳥の語を聴けば、野僧の閑を喜ぶに似たり。

和韻夜話。

● 三祇劫外の舊冤讐、一夜山庵に頭を聚むるを得たり、瞋恨怨言傾倒し了る、錢を纏ひ鶴に騎つて揚州に下る。

● 納堂和尚の過訪を謝す。

索寞たる春光巖下の寺、高人の金錫烟霞を拂ふ、空山日は永し何をもつて待せん、唯だ庭前一樹の花のみあり。

● 西禪寺に宿す。

火後の西禪寺、門庭灰よりも冷かなり、井河は聲寂寞、嵐嶠は碧崔嵬、唯だ山雲の宿するあつて、渾て俗駕の來るなし、上方の老禪伯、古格復

時に逢ふたと、借金なしの時が来たと云ふことか、何分に夢のことであるから分らない。

● 建武丁丑は延元二年のこと、禪師四十八歳。

● 兩句、蓋し三四の句ならん。

● 胡亂は不實也、「ごまかし」と云ふが如し。

● 椎村は備前國にあり。

● 三祇劫外云々、昔しなじみの噴嘩相手。

● 三四句、太平廣記に云ふ、數人あり、各其志を謂ふ、一人曰く、我れ腰に十萬貫を纏はん、一人曰く、我れは鶴に乘つて遊ばん、一人曰く、揚州の太守とならん、終りの一人曰く、腰に十萬貫を纏うて鶴に乘つて揚州に下らんと、是に原づく。

● 西禪寺、天龍寺の南にあり、開山石庵明禪師、明は宏辨訥

た追回す。

友人を憶ふ。

山院春深うして客來らず、空庭花落ちて蒼苔を没す、流景を留めんと欲すれども策なきを怕る、猶ほ佳人を等つて念未だ灰せず、身老いて尤も世外に居るに宜しく、雲閑にして只だ合に巖隈に臥すべし、午眠一覺茶三椀、千峰を望斷して園を推して開く。

茶を摘む。

● 枝頭葉底精神を著く、限りなきの芬芳遠く人に襲く、體用の中收不得、一盞漏泄す十分の春。

● 庚寅の冬、備前の金山に登つて、功上人の幽居を訪ひ、毫を授つて山中の四威儀を賦し、壁上に書すと云ふ。

● 山中の行、烟霞遠近歸程を失す、溪邊失脚して指頭破る、流水の聲は忍痛の聲に和す。  
● 山中の住、草衣藜食朝暮を閱す、千峰盡日雙眸に入る、記せず、青黃の能く幾度なるを。  
● 山中の坐、石榻跏趺す惟だ一箇、全く寂を樂むと喧を嫌ふとにあらす、獨り閑雲のみあつて相許可

● 到ぐ、訥は大覺に嗣ぐ。  
● 老禪伯は蓋し石庵ならん。  
● 體用、瀟山茶を摘む序で、仰山に謂つて曰く、終日茶を摘む、たゞ子が聲を聞いて、子が形を見ず、仰山茶樹を摘む、瀟山曰く、子たゞ其用を得て、其體を得ず、仰山曰く、未嘗し、和尚如何、瀟山良久す、仰曰く、和尚たゞ其體を得て、其用を得ず、云々。  
● 庚寅、觀應元年、禪師年六十一歳、功上人由真法燈下の人。  
● 忍痛聲、あいた……。  
● 青黃は春秋也。

山中の臥、高く羅窓に枕して怠惰を縦にす、天風吹き折る老松の枝、耐へがたし吾を驚して、濃睡の破るゝを。

倫上人に寄す。

交を英俊に締んで自ら年を忘る、一夜情を馳せて困じて拳を枕とす、夢裡分明に相見し了る、爐邊雪を聽いて禪を對談す。

淨 妙の實翁和尚に寄す。

日に聲光の高く天を耀かすを聽く、衰殘は舊に依つて巖烟に臥す、<sup>②</sup>西來三世の重擔子、獨り荷山のみあつて隻肩を勞す。

雪中に東隆長老に寄す。

庵外には雪深く積み、庵中には僧獨り禪す、同人若し此に到らば、共に普通の年を話せん。

戊 子姑洗之末、出遊して歸る、忽ち北巖侍者の寄せらるゝ佳什を觀て、韻によつて懷を寫すとしか云ふ。

靑鞋踏み偏し幾春山、病翼飛ぶに倦んで今已に還る、宿雲の半榻を分つを待つに慣れて、日昏れて猶ほ未だ柴關を掩はず。

① 淨妙は鎌倉五山の二、實翁は妙秀、兼然に嗣ぐ、然は廣溪に嗣ぐ。

② 西來は大覺の塔所也。

③ 荷山、淨妙寺の山號を稱荷山と云ふ。

④ 同人は斷金の友也、普通は二祖雲に立つて、法を求めし年也。

⑤ 戊子は貞和四年、禪師年五十九、姑洗は三月也。

⑥ 宿雲の半榻云々、宿を借りに來る雲に、腰掛半分借すこと、常になつて居るから、まだ門を鎖らずと。

驪珠は求むること易かるべきも、心友は得ること尤も難し、獨り閑中の味を弄して、白頭にして碧山に對す。

北巖の濟侍者は、天資英拔にして、<sup>①</sup>蘊藉淳素、頗る古禪の風あり、愚に従つて遊ぶこと最も久し、實に忘年の友<sup>②</sup>子たり、丁亥

の冬、事を慈光に謝して、餅錫を西祖明禪の間に止めんと欲す、此の計未だ決せざるに、俄かに來つて辭を告げ、復た養恩庵に歸つて、清高の節を全くせんと要す、得て留遇すべからず、其の

志亦嘉すべきに足れり、聊か拙辭を擒べて、之に贈ると云ふ。

多載頭を聚む誠に因あり、枯を拾ひ瀑を煮る寂寥の濱、口に甜く心に苦きは眞の相識、義斷え情忘じて道親み易し、高く松關を掩うて舊隱に歸り、俯して看る人世の浮塵に等しきを、竹房留め得たり老禪衲、獨り喜ぶ靑山の爲めに隣を作すことを。

① 蘊藉は義理なり、情は人情なり。

② 鶴は比す、語頗る奇なり、是れ傳燈錄元安禪師の語に原づく。

鶯を聞く。

鶯は那ぞ曾て比況するに堪へんや、深花影裡に幽簧を弄す、人の聲前の旨を會得するなし、又春風を逐うて短牆を過ぐ。

韻を次して提藏主に酬ゆ。

是れ君によつて祖風を振ふべし、曾て聞く宗、説兩つながら俱に通ずと、  
り。且喜すらくは今朝同志の逢ふことを、藏裡の摩尼は襟字を照し、  
金剛の寶劍は機鋒を快くす、徹宵傾倒す無生の話、月は上る遙峯古澗  
の東。

忍副寺の庵居を訪ふ。

何事ぞ衣を拂つて深く退藏す、亂峯影裡に禪房を卜す、雲居の庫下に華  
姪あり、終に楊岐六世の芳を續ぐ。

震巖和尚、前日三偈を惠まる、韻によつて謝し奉る、切に人に示  
すなかれ、羞らくは羅公の誦を招かんことを、一笑。

白雲の關捩を撥轉し了つて、人天の眼目價聲増す、龍龍子を生ずるは  
尋常の事、且喜すらくは吾兄の佛燈を熾にするを。

深く愛す襟懷の月よりも明かなるを、又添ふ志氣の霜よりも烈じさを  
浙の東西と湖の南北と、共に話して還つて秋夜の長きを忘る。

宗眼高明にして道自ら尊し、任教我空門に表率たるを、今朝坐

言ふなかれ千載知心少

①宗説云々、宗通は自分の修行、既通は未悟に示す、現今は多く宗旨と經論とに分つて如し。

②藏裡摩尼、如來藏裡の摩尼寶珠。(龍道歌)

③金剛寶劍、或時の一偈は、金剛王寶劍の如し。(臨濟錄)

④無生の話、龍居士の偈に、有男不嫌、有女不嫌、大家團圓頭、共説無生話」とありて、幹も根も葉もなき話なり。

⑤華姪は大慧より、應安を呼びし語也、應安曾て圓悟に雲居に參す、故に雲居の庫下に華姪ありと云ふ、蓋し忍副寺は禪師の法姪ならん。(舊注)

⑥羅公の誦は、羅公在鏡とは、羅拙を露出するの方語。

斷す青峰の頂、先師不報の恩を報するに堪へたり。

再び震巖和尚の韻を用ふ。

一たび人間を出で、百不能、衰窮疎懶日に相増す、餘生羸得たり丘壑  
に安することを、青眼にして佗の祖燈を續ぐを看る。

一別今に到りて三十、白、蒼顏鶴髮風霜に老ゆ、秋窓雨夜青燈の下、同  
じく葛藤を打して許の如く長し。

末法の僧中誰をか尊ぶべき、紛々として多くは利聲の門に走る、清高獨  
り雲峰の在るあり、志を奮つて須らく佛祖の恩に酬ゆべし。

夜千光寺に宿す。

十有年前故人を問ふ、相看て手を把つて語春の如し、争か知らん此夜ひ  
陳跡に眠らんとは、月は寒窓を射て風箏を撼す。

寒夜即事

風寒林を攪して霜月明かなり、客來つて清話三更を過ぐ、爐邊に筋を聞  
いて煨芋を忘れ、靜かに聴く窓を敲く葉雨の聲。

墨淡の相陽に之くを送る。

- ①白雲は龍巖寺の山號、澧州にあり、同翁和尚の遺跡なり、震巖は月翁に嗣ぐ、故に白雲の關捩を撥轉す云々、關捩はからくり也、ねぢなり。
- ②浙の東西、湖の南北、浙東浙西、湖南湖北、則禪師曾遊の地。
- ③表率は指導の意、青峰は佛燈の塔所。
- ④前三首は敵を計る也、猶ほ己れを計るの一著を残す、故に此の續あり。
- ⑤百不能、何一つ出来ないこと云ふ事也、然し疎懶を増し、丘壑に安し、青眼をなすでは、充分な働きと云ふべし。
- ⑥青眼、支那の阮籍と云ふ人、氣に合つた人來れば、青眼かなし、いやな客來れば、白眼をなす。(晉書)
- ⑦白、一年のことを一白と云ふ、天然の方語。



心は龍 蜂に到つて身到らず、餘生已に近し鬼と隣を爲す、如今喜び得たり子が前去するを、我に替つて能く塔下の塵を除け。

會禪人の遊方を送る。

臨濟會て參す黃檗の禪、烏藤六十蒿枝拂ふ、今君が 行の爲に此の言を贈る。春山雨後碧きこと漲ぐが如し。

春日山行

滿頭の疎髮銀絲を燃る、來歳の逢春は未だ知るべからず、竹杖芒鞋野興多し、山花見て 幾株の枝にか到る。

夜龍 聖寺に宿す。(月露の遺意)

白雲峰下香松の鳩、一夜空房坐して明に到る、露は秋晏を洗つて月初めて上る、郎 忙として問訊す老師兄。

俊鈍庵を訪ひ、夜話旦に達して、贈らるゝに偈を以てす、韻によつて之を謝すと云ふ。

一夕清談して襟字披く、這回且喜すらくは玄扉を扣くを、身を翻して重淵の底に跳下して、響 珠念八を奪得し歸る。

①雲峯は白雲峯。

②隣は其人既に死して、只隣跡のみ存す。

③葉雨は、雨寒更盡、開門落葉多しより來る、又風枝雨葉風として秋を帯ぶの句あり。

④龍峰は佛燈の塔所、前出。

⑤行は送行也。

⑥山花見て云々、是れで何木目かしらぬと。

⑦龍聖前出、美濃の白雲山龍聖寺。

⑧郎忙は慧忙の意ならん、老師兄は、月翁。

⑨珠念八云々、念八は二十八也、珠を聯ゆる廿八字の時を贏ち得たりと、鈍庵の原作に曰く、「開徑荒蕪菊未披、懸響象巖巖三林、雨朝舊事話猶在、東杖度、長莫、促、歸。」

⑩袖裡の金槌、百丈清規に、鉢を開き佛を念し、衆に白すには、皆槌を鳴す、維那の職也、

關西の素維那、淨智の實翁老兄の會中より來つて、巖居を相訪ふ、而して翁の惠む所の偈を出し示す、老拙頼ち其の韻によつて贈ると云ふ。

袖 裡の金槌影動く時、桃花笑を含み柳眉を舒ぶ、克實は負かず老興化、又寶山山下に向つて歸る。

翡翠

何の年か鬱林を離る、彩羽清泚を照す、身は枯葦の危に居て、心は深潭の底に在り。

鵝鶩

管せず弟兄の 難、獨り原上の石に翹つ、胡蝶の 飛ぶを貪り見て、其の幽寂を破るに似たり。

三月盡

限りなき風光已に索然、殘花尙ほ自ら庭前に舞ふ、春歸りて定めて重ね來る日あらん、人老いて何ぞ曾て復た少年ならん、幻跡多くは留む青嶂の裡、幽懷常に在り白雲の邊、閑窓晝永うして歳を經るが如し、楞嚴を課し

①一正書いてあつたと見ゆ。

罷んで几に隠れて眠る。

宏上人に贈る。

白雲深きところ茅茨を掩ふ、<sup>①</sup>慚愧す禪人の舊知を問ふことを、相送つて門を出でて雨つながら無語、長松影下に立つこと多時。

清公上人の西禪和尚を歸省するに贈る。

鳥啼き花笑つて興悠なるかな、<sup>②</sup>知識門庭の破草鞋、百衲君が如くなるは半箇も無し、孤筇我を過る已に三回、道情は應に是れ秋水よりも清かるべし、世慮は何ぞ其れ死灰よりも冷かなる、<sup>③</sup>一雙窮相の手を袖にすることなかれ、師の背上に光を放ち來らしめよ。

戊午の仲春、榻を東禪の客櫓に借つて、涉旬の留をなす、偶

偶花嶽庵に遊んで、心公法兄を訪ふ、其の<sup>④</sup>韜鍔の韻致を觀るに、幾んど<sup>⑤</sup>瓊亮の高風を追配す、愚説に江湖に遊んで、二十載に垂とす、未だ歸休の計を獲ざるを以て愧となす、紫栗青鞵、他日重ねて來つて、公に水邊林下に從はんもの、愚にあらすして誰ぞや、因つて俚語を述べて、其の志を紀すと云ふ耳。

① 慚愧云々、依然たる東吳の舊阿蒙。

② 知識門庭の破草鞋、上の句は破れわらひの境界なり。

③ 百衲は大勢の坊さん。

④ 窮相の手は、貧乏くさい手なり、腕の太きこと三尺、指の短きこと一寸、昔し白雲和尚は、此手よりで容易に三疊を舞はぬと云はれたが、まあさう大切にしなされるな、御師匠さんの背中の搦い處を搦いて、あゝ心地よいと叫ばしめよと。

⑤ 戊午は文保二年、和尙二十九歳也、舊注に師六十三歳の時、瀘州に往いて東禪に居る、(紀年録)、然らば此千支は誤るが如しと、下に江湖に遊んで二十歳の語あり、此千支の誤れること必せり。  
⑥ 韜鍔、韜はつむ、鍔はけづるにて、光をつ、み、彩を打づるなり。

寥々たる清夜幽情に適す、蘿月松風孰と共にか争はん、覺えず欄を敲いて舒ろに一嘯す、知音は只だ曉鐘の聲のみあり。

春は焼痕に入つて紫蕨肥えたり、籃を携へ杖を拽いて禪扉を出づ、袖中の辣手未だ拈出せざるに、<sup>①</sup>輸與す拳を堅つる那一機。

此の生隱約して<sup>②</sup>寒巖による、流涕收め難く口絨むに似たり、幽鳥は知らず頻りに<sup>③</sup>話墮するを、亂峯影の裡語呢喃。

澗水旋や添ふ茶鼎の湯、山花時に助く石樓の香、破蒲團上に餘事なし、又見る林巔に夕陽を掛るを。

入定の猿。

盤陀石上に禪す、應に是れ攀縁を息むるなるべし、孤影<sup>④</sup>巫峽に沈み、三聲<sup>⑤</sup>冷泉に斷ふ。

韻を次して、日峰和尚に酬ゆ。

一生羸ち得たり一身の閑、此の樂み自ら知る言及すること難し、物外の高人趣味を同じうす、杖藜時に復た林間に到る。

忠侍者の韻を借りて、幻居庵主に寄す、二首。(真前春日藏山の徒弟)

① 入定猿、終南山に禪僧あり、時に袈裟を失ふ、猿あり之を

② 寒巖、寒山は寒巖に隱る、流涕はみづばな。

③ 話墮、雲門因みに僧問ふ「光明寂照遍河沙」一句未だ絶えざるに、門邊かに曰く「是れ張拙秀才の語にあらすや、僧云く、「是、阿云く、「話墮せり、此話墮と云ふことは大層面白い、斯く云ふも早や話墮して居る。

④ 孤影、終南山に禪僧あり、時に袈裟を失ふ、猿あり之を

⑤ 三聲、冷泉に斷ふ。

心字須ひす門上に書するを、一拳頭上に親疎なし、他時慧日と春日と、乾坤を照燦して光餘りあり。

等閑に相見して俱に傾倒す、卻つて恨む平生心跡の疎なるを、道聚の情懷は唯だ一日、尋常の交舊十年餘。

清見の方崖和尚、一偈を寄せらる、拆いて四絶となして之に酌ゆ。

龍壽山中の老古錘、人間得難し箇の頑痴、今朝自ら笑ふ籃を携へ去つて、栗を拾つて餐する時皮を剥ぐことを忘る。

松風白を吹く鬢邊の絲、應に是れ秋深うして、蒲柳衰ふるなるべし、忽ち同參叢席の盛なるを聽いて、園を鉏くの手を停めて喜で眉を舒ぶ。

言を寄す此の千金の重きを、保せよ、巨鯨背上に三山笠ゆ、大教を播揚す海潮音、那處の叢林か悚動せざらん。

祥雲零落の時を扶起することは、須らく驚蟻の老宗師に還すべし、關門鎖さず家風大なり、去々來々誰をか礙塞せんや。

材翁侍者 野部の新居を訪及す、終宵爐を擁して清話す、別に臨んで、聊か小詩を成して、謝を致すと云ふ。

茅を誅して新にトす空山の塙、遠く幽閑を問うて意輕からず、枯柴を燒き盡して言も亦盡く、共に聽く、寒雨の窓を打つ聲。

龜峰の 悅山首座、山中を垂訪して、留まること兩月、歎話傾倒、益々道義の厚きを見る、別に臨んで、聊か拙章五十六言を寫して、以て之に贈ると云ふ。

龜谷山中の悅山叟、軒昂の英氣、常流に出づ、南泉の位を携く老黃檗、古寺の門を掩ふ陳睦州、衆衲服膺す眞の表率、佳聲耳を驚かす來由あり、這回歸り去つて、峻擲に遺はす、宗風蕭索の秋を扶起せよ。

賢姪繁茂林、當初備前の安國に來つて老拙に依止す、時に歲未だ志學に登らず、後十有二年、遠江野部の山中に邂逅す、手を執つて舊を話し、相得て甚だ懽ぶ、庵を同じうして住せすと雖も、數々として來り訪ひ、風雨にも淪らず、既に亦、涼燠を更ふ、益益其の道義の篤きを見る、老拙衰暮の極、又遠方に去つて、幽棲の地を求めんと謀る、今日一別せば、夢中にあらざるよりは、復

披して岩上に坐禪す、他の群小猿亦之に倣ふて坐禪す、(東山外集注)。

① 鳳峽、荊州記に、巴東三峽區峽長し、猿鳴いて三聲淚裳を沾す、蜀は山國にして猿多し。

② 冷泉、靈隱天竺寺にあり、三聲鳴いたら、泉の響も一時にとまる。

③ 日峰和尚、佛燈錄に、長勝寺に出世すと出づ。(舊注)

④ 心字云々、了心録に、一老宿あり、住庵す、門上に一の心の字を書し、窓上に一の心の字を書し、壁上に一の心の字を書す。

⑤ 一拳頭上云々、遺州二庵主の因縁、以上二句庵主の二字より來る。

⑥ 君が一日の恩の爲めに、妾が百年の身を誤る。

⑦ 清見の方崖、駿河の清見寺方

巖元圭禪師は、佛燈に載ぐ、禪師の兄弟なり。

⑧ 龍壽山、遠州永安寺の山號。

⑨ 寂室和尚は、餘り達者で無かりしと見え、鐘中處々に蒲柳の語あり、がよわき體を蒲柳の質と云ふ。

⑩ 保は、保壽。

⑪ 巨靈山は、清見寺の山號なり、莊子に巨靈背上に一山ありと、三山は、靈業、方丈、瀛州の三神山なり。

⑫ 祥雲、佛燈塔所の門額也、佛燈の宗旨今零落。

⑬ 遠江野部。

⑭ 此庵を讀らんと欲せば、鐘清の雨滴聲に委すべし。

⑮ 龜峰、龜谷山壽禪寺。

⑯ 悅山首座、悅山文怡禪師は大覺の曾孫。

⑰ 軒昂、軒は車の列を抜いて高き貌、昂は下より上に擡るの義にて、高しと訓す。

た會見の期なし、之が爲めに悽然たるを免れず、仍つて四十字を寫し與ふ、後來若し想念せば、宜しく之を取つて見るべき者耶、一笑。

幻影深隱を圖り、秋風袂分たんと欲す、法多清夜の月、龍壽暮天の雲、去つて後誰か我を思はん、憐むべし獨り君あるを、精勤志節を保持して、歳晩に斯文を振へ。

海印庵扁榜の後に書す。  
吾佛當年輕しく指を按ず、指頭放出す大光明、庵中の主は此の三昧を得たり、月は珊瑚枝上より撐ふ。

僧に示す、二首。  
箇の事明々に君に呈似す、須ひす特地に功勳を策つることを、風和ぎ日暖かにして黃鸝囀

①常流、尋常の流輩、乃ち有り觸れたる人物なり。  
②南泉云々、黃檗の運和尚、南泉に在つて首座たりし時、一日鉢を持って堂に入り、王老師の位に向つて座せんとす(會元)、是れを南泉の位を摸すと云ひし也、摸は摸奪、俗語の「ひつたくる」なり。

③古寺云々、睦州は黃檗に嗣法して、晚年門を閉ち、蒲鞋を纏つて母を養ふ(會元)、南泉の句は機鋒を語り、睦州の句は孝心を賦す。  
④峻擢は、高位に拔擢せらるる也。

⑤志學、十五歳。  
⑥涼燠云々、一年程たちしと云ふ也、寒暑は夏と冬、涼燠は春と秋也。

⑦者耶の二字は、別後に之を見て、想ひ出にせよと、云ふべきを憚して、疑語とせしなり。

⑧法多寺の清夜の月は、誰れと俱に影を照して寒き、龍壽山頂の雲は、冉冉として岫を出づ、別るゝ時の景也。

⑨斯文、論語の子罕の篇に出づる文字にて、孔子は斯文我に在りと、自ら慰められた、然し禪僧の斯文は、不立文字の活文字也、此叢社零落の時に、宗風を扶起せよと。

⑩起承の二句は、楞嚴經の「我れ指を按すれば、海印光を發す、汝心を攀すれば、塵勞先づ起る」に本づく、海印は海水澄んで、萬象を印する也、三昧は正定の梵語。

⑪巴陵和尚は「如何なるか吹毛劍」と問ひしに「珊瑚枝上月を撐著す」と動かれた、今寂室禪師は、五本の指から海印三昧を發するを、月は珊瑚枝上より撐くと頌せられた。  
⑫功勳はいまをなしなり、禪僧の

す。春は花梢に在つて已に十分。

參禪は實に大丈夫の事、一片の身心鐵打成す、個看よ從前の諸佛祖、阿那箇か是れ閑情を弄す。

賢姪石澗、特々として來り訪ひ、相陪すること旬餘、爐を擁して歎話、甚だ道義の厚きを感じ、今又偶を留めて別る、免れず韻によつて之を謝するを、敢て望むらくは輒爾。

閑寂たる空巖霜夜の月、薛羅庵裡老夫が情、明朝子又山を下り去らば、何れの日か重ねて戸を敲くの聲を聽かん。

實翁和尚復庵和尚を悼むの韻。

古佛光を撮めて聊か徒を誡む。言ふことを休めよ今日無餘に入ると、禪は幻住に參じて人皆委す、義は空巖に在つて我虚しからず、塵は積る風に越く群鴉の榻、篋には残る道を問ふ摺紳の書、年來宗社寥落を増す、只蒼々に向つて幾嘘を打す。

老弟特に來つて瞻拜す、偶々師兄暫く出づ、便ち歸去せんと欲す、而も日既に夕なり、一夜西軒の下に獨坐し、聊か五十六言を述べ、

功勳は、拈提整拂、棒を行じ、喝を下すなり、是れを功勳邊の事と云ふ。

⑬參禪は是れ鐵漢なるべし、手を心頭に著けて即ち判すと、李邕局は頌じた。

⑭閑情綺思で、のらりくらりとして出来るものは、我慢放逸と、地獄の業である、閑情とは閑居して不善を爲す、閑事の爲めに無明を長すとありて、性根にすぎの出来る也。

⑮特々は得々、輒爾は口を開いて大笑する也、空巖は古注に不明とあり、蓋し空生巖畔より來りし語ならん、薛羅はつたかづら。

⑯復庵は宗已、中峰明本に嗣ぐ、常陸の法雲寺の開山也、延文三年九月二十六日示寂す、實翁の悼詩頗る巧也、今は省略す。

以て所懐を據ぶと云ふ、伏して希はくは瓶爾、玉璫師兄和尚几下。

老龍隠は是れ我が知心、特に幽栖を問ふて遼林に入る、寶杖晨を凌いで何の處にか去る、空房に宿を投じて更の深きを覺ゆ、人を照すの山月は顔色全く、耳を洗ふの松風は語音正し、謂つべし這回眞の會見と、明朝春々として青岑を下らん。

臘八雪に因つて。

黄面今朝成道了る、卻つて禪事を將て人天を惱す、我儂は星兒の火を求め得て、爛枯柴を焼いて雪を看て眠る。

康安辛丑の春、余亦を江州飯高山下、越溪の上に誅す、時に松

侍者なるものあり、余が舊識空室老師の高弟なり、百濟の僧舎に寓す、數々として孤寂を訪はる、相對して時を移すと雖も、多くは是れ一詞を交へずして去る、然れども其の英邁の標、粹美の韻、霽然として眉宇の間に溢る、竊に喜ぶ、衰暮偶々忘年の友を得ることを、一日別を告げて、東受業に歸る、余も亦之が爲め

○義は空巖云々は、復庵は三たび天子の命を辭し、二たび龜山の請を卻け、寂寥たる空巖に禪す、之を我慮しからずと云ふ。

○唯の字實霜の原詩に唯唯と用ふ、故に已むを得ず斯くの如く次せし也、唯とは吹也、氣をばくなり、天を仰いで幾たびか嘆聲をもらすなり。

○人を照す云々、二句、皓々たる空中の孤月輪、是は師兄眞の面目なり、微風兩松を吹いて、近く聽けば聲愈々好きは、師兄眞の語言なり。

○師兄の明談を春々服膺して、青山を下らん。

○黄面は釋迦、禪事は厄介な荷物なり。

○康安辛丑、和尚時に七十二歳。

○越溪、越智川也。

○百濟寺、飯高の西里許にあり、

に語然を増すを免れざるのみ。袖より紙を出して語を需め、將に再會の記と爲さんとす。因つて卒に二十八言を摘べて、以て贈ると云ふ。

老來生鐵心肝となす、一句何ぞ曾て舌端に上らん、今日君が爲めに線路を通す、西風霜葉溪山に滿つ。

余が忘年の端友、悦雲峯、一別二十有餘載、夢寐にも想念して已ます、一日忽ち巖扉を叩く、手を執りて舊を話し、相得て甚だ懽ぶ、而して亦妙偈を惠まる、唱歎之餘、韻によつて謝し奉る。

蒼頭白髮 經年別る、彼此昔人昔人にあらず、今夜肝腸傾け盡さざるに、曉曉の霜月水輪を落す。

周姪に與ふ。

當に信すべし吾宗に語句なきことを、爾來つて得々として何をか求めんと欲す、草鞋跟底西風急なり、八月依然として是れ仲秋。

夜 向陽寺に宿す。

夜向陽山裡の寺に宿す、開基の尊者は我が知心、壁間の遺像を參拜して立てば、春禽啼き斷ふ綠松

○聖德太子の開基、天台宗。

○西風霜葉溪山に滿つ、是れが線路也。

○端友、孟子離婁下に「尹公他は端人なり、其友を取ら必ず端し」と、端は正也。

○經年別るとは、別れてより幾年を経過すの意。

○昔人云々は、華法師の不運論に出づ、おまいさんも變つたが、おいらも變つたよ。

○向陽寺は伊勢にあり、江州より伊勢に遊び、此作ありしなり。

の陰。

鳴海の浦。

幾人か東に去り又西に還る、潮は沙頭（さとう）に滿ちて行路難む、<sup>①</sup>截流（せつりゅう）の那一句（なほ）を會得せば、何ぞ妨げん。海門關（かいもんかん）を抹過（まわ）することを。

偶作。

即心即佛は鏡裡の像、非心非佛は火中の氷、雨過雲開いて関に依つて眺めば、遠山無數碧層々。<sup>②</sup>平生渾て玄談を愛せず、多懶須ふるところは唯だ。黒甜、老鼠儉かに牀脚を咬んで響く、日は疎竹を穿つて西齋を照す。

知足禪者に與ふ。

如何なるか是れ。佛即心是、梅山の梅子熟すること多時、苦風酸雨村烟斷ふ、日暮れて行人路岐に迷ふ。

圭巖方書記に寄す。（時に圓林寺に住す）

吾兄歸隱す舊園林、衰朽猶ほ居す雲壑の深きに、又是れ天寒歲こゝに暮る、爐を擁し雪を聽いて知心を憶ふ。

相陽の瑞侍者、山中を迂訪して、款話すること一宵、厥の志嘉

① 鳴海、尾州。

② 截流、雲門に三句あり、截流來流の句、函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句。

③ 黒甜、支那の北方の人は、蜜麻を黒甜と云ふ。

④ 二句大梅禪師の因緣、入梅時分の作也。

⑤ 舊注、永安關天和尙に圭巖方庵主の話下丈あり、云ふ、松源の遠齋、大應の傳云々、想ふに此人ならんと。

すべし、且つ曰く、「故里に還つて、先師の靈塔を省觀せんと欲す、庶はくは一偈を得て、以て途中の警策とせんのみ」と、余老いたり、平仄を辨せざること久し、然れども懇求して已まず、卒に筆を迅らして之に贈ると云ふ。  
① 潭北湘南客夢驚く、一筇千里歸程を問ふ、誰か知らん綠水青山の外、限りなきの風光畫けども成らず。

西明寺の壁に書す。

去春此の地に花を尋ねて到る、今日又看る黃葉の秋、<sup>②</sup>嶺上の白雲凝つて動かす、自ら慚づ衰朽の閑遊を好むを。

休耕庵。

閑田一片山前にあり、來租拋ち來る三十年、只だ松花を採つて午飯に充つ、煙蘿深きところ扉を掩うて眠る。

村上人に示す。

道人來つて我が柴門を叩く、參禪の旨要を把つて論せんと欲す、怪むなかれ山僧が口を開くに懶きを、老鶯啼斷す落花の村。<sup>③</sup>

辛卯の歲口占。

① 潭北は晉湖の北、湘南は相陽を寓す、忠國師偈に、湘の南、潭の北、中に黃金あり、一國に充つとあり。

② 大慈山西明寺は、永源を去ること二里にあり。

③ 白雲の沈靜を以て、自己の忽忙に影帶す。

④ 辛卯、觀應二年、師六十二歳、楠正行南都に勤王し、尊氏直義と相争ひ、天下寧日なし。

四海の煙塵は幾日か收まらん、山林朝市盡く戈矛、昨宵の一夢金にも換へがたし、聊か無何郷裡に入つて遊ぶ。

古靈山に遊ぶ。

爛却す靈山の古蘭若、春來尙ほ自ら遊人あり、二千年遠岩前の樹、花は頭陀を引いて笑轉た新たなり。

達禪者の少林に之いて、祖を禮するに禮る。

大道本通達、心をもつて安を覺むるをやめよ、老胡肉猶ほ暖かなり、嵩巖天に倚つて寒し。

謙侍者蠟燭を惠まるゝを謝するの韻。

白雲青嶂石溪の邊、惜むべし長年戸を掩うて禪するを、文武の火光高きこと萬丈、君に憑つて一燈の傳はるを看んと要す。

光知客の韻に和す。

客來つて我が爲めに花偈を投ず、字々珠の如くにして宗眼高し、萬別千差供に截斷、且つ驚く句裡に吹毛あるを。

戊戌の秋、初めて馬郡の如意寺に投宿す、擅那明海、一見故の如く、

①無何、無何有郷なり、有無を離れて有無に打乗つた場合、斯かる境界も何ぞある無からんやである、禪師除死にぐつすり寐込まれしと見ゆ。  
②古靈山の寺は敗毀せり。  
③世尊靈山會上にあつて、花を指して衆に示す、是の時衆皆默然たり、唯迦葉尊者破顏微笑す。  
④老胡は達磨、老胡肉猶暖かなりは、達磨者に禮す。  
⑤謙侍者、夢窓下の人。  
⑥文武の火、無學開爐上堂に、「初冬の時節又相催す、活々たる諸方爐竈開く、獨り徑山文武の火あり、知らず幾人を燃却す」と、義堂曰く、無學徑

掌を拍つて清談す、秋宵猶ほ短し、仍つて一偈を留めて去る、他日之を取つて見ば、則ち余に對すると同じからん。

馬村の信士明海と號す、家中にありと雖も出家に勝れり、只だ道情を堅密にし去らしめば、那ぞ憂へん靈樹の花を開かざるを。

翼姪の石塔の客居を訪ふに與ふ。

道人雪を踏んで寓舎を問ふ、月は寒窓を照して坐して牀に對す、瓦鼎に茶を煮て春一盞、豐政老の楮皮湯に同じからんや。

定殿の一侍者、余に於て宗黨の瓜葛なり、遠く山中に來つて、

相共に苦を攻め淡を食つて、屢々居諸を閱す、酷だ道義の篤きを見る、今朝忽ち告辭して、覺雄師翁の舊隱に歸る、余が殘齡

既に桑榆に迫る、恐らくは復た會見の日なからん、老懷之が爲めに悽愴するのみ、因つて俚語を述べて、以て其の行を壯にすと云ふ。

三年首を聚む空巖の下、未だ腸を傾け亦肝を瀝るに暇あらず、此の地須らく留むべし、末後の句、歸り來つて爲めに岡へ屋頭の山。

山に住する十八年、爾たび岡峰に還ふ、故に文武の火と云ふ。  
①吹毛、刃上に毛を吹きかくれば、其毛自ら斷つ、之を吹毛劍と云ふ、稍僧の一言は、人稱るれば人を斬り、馬稱れば馬を斬る、光侍者の光より吹毛劍を呼ぶ。  
②戊戌、延文三年にして、和尙六十九歳。  
③馬郡、上野の群馬郡。  
④是れ一番寒骨に徹せずんば、雪で梅花傲骨の清きを知らん。  
⑤石塔客居、紀年録に、延文四年師七十歳、江州に來つて石塔院寺に寓止すと、蓋し當時の作。  
⑥政老の楮皮湯、餘杭の政禪師、好んで月を飯ぶ、九峰の韻、門下に客とし、常に之を笑ふ、爾一夕將に臥せんとす、禪師

●天關老兄、山中に來つて、一夏道聚して、日夕相共に逍遙す、時あつて懷を論じて、●結角羅紋の處に至つて、彼此手を擧げて搖曳するのみ、今秋涼を逐ふて舊隱に歸るを告げて、佳什一篇を示さる、韻に依つて以て贈ると云ふ。

天涯海角を踏遍して還る、茅を誘して偶々此の幽閑を得たり、白雲は實に是れ無心の友、因つて憶ふ古人、半間を分ちしことを。

老拙一生幻影を山色水聲の中に寄す、邇來古江の飯高山下を經由す、林溪幽邃にして頗る野情に愜ふ、因つて室數椽を築いて、安眠燕坐す、只だ此に居て殘喘の盡るを俟つを圖るのみ、旋、空閑を愛樂するの道流あつて、憶々として沓臻し、松根石上に茅を誅して散處す、蓋し物は類を以て聚る、理の然らしむる所以か、關西の黨聞叟も亦其一也、夫人となり、爽拔精緻、●孜孜として道の爲にす、眞に佳弟子なり、ある時從容として語つて曰く、「昔し親を辭し郷を離るゝの日、自ら謂へらく、吾れ早に大方に徂いて撥草瞻風し、良道善友に●●して晨夕咨參し、己事を究

人をして解を召さしむ、福思へらく、又月を見せしむるか、と、聲頼して至る、禪師曰く、明月皓々たり、幾人か之に對せん、聲唯々するのみ、時に韶航きて切に藥石を思ふ、而も久しうて楊皮湯一盃あるのみ、韶大に困す。(林間錄)

●瓜葛は姻戚と云ふが如し、瓜葛は蔓延相及ぶ、故に云爾。

●居諸は日月なり、無理な故事にして、詩經の柏舟に日居月諸の句あり、居諸の二字は語助にて、日や月やと讀む。

●覺雄、大覺の法嗣、無隱圓範の諱號。龜輪、日の入る處に桑輪の二木あり、故に日没を桑輪と云ふ。

●末後句、寂室和尚の末後句ならん。

●天關老兄、澧州多藝の莊、安久の郷、庄福の開山。(古抄)

●結角羅紋、應庵錄に「結角羅

明して、父母劬勞の恩に報じ、佛祖覆蔭の德に酬ひんとす、幸に名藍に掛錫するを得て、荏苒として茲に十霜なり、同じく●伏臘を閱するもの五七百衆に下らず、其の一人を擇んで、將て言行の師となさんと要するに届つては、何ぞ止だ波を撥つて火を求るが若きのみならんや、凡そ見聞に屬するものは、唯だ菩提の種子を焦敗するのみにあらず、殆んど輪回の業根を滋潤すべし、深く知る、今時一日も出で、衆に隨はゞ、萬劫にも利を己に失せんこと必せり、因つて憶ふ、古人法席全盛の時すら、尚ほ名跡の累を逃れて、●●茨石室果食澗飲し、終身世と遼如たり、嘗て●僧となつては須らく是れ巖谷に居すべしと聞く、又●●柳標横に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去ると云ふ、吾れ今忝く隱者の勝軌を攀ち、衣を拂つて遠引し、永く雲山の深うして更に深き處に歸せんとす、乃ち竊に自ら誓ふ、寧ろ身をもつて火坑に投す可くとも、復び脚叢林の闔に跨らず、寧ろ荒藪の下に窮死すべくとも、●●挿紳豪富の門に謁せず、寧ろ枉げて斷舌の火に遭ふべくとも、

●紋に至つて游及傍礴、大自在を得」とあり、按ずるに、結角は牛の角と角とを結び合はすの意ならん、羅紋は綾羅の紋にて、極めて微細のものなり。搖曳は、左右前後に搖ゆすなり。

●半間、廬山芝庵主の偈に「千峰頂上一間の屋、老僧半間雲半間。」言は一間の家を分つて、半分は雲のやどり場、半分は自分のれどころとす。

●孜孜、汲々として勤めてやまざるなり。

●伏臘は、冬夏なり。

●僧となつては云々、政黃牛の時なり、昨日曾て今日を將て期す、門を出でて杖に倚つて又思惟す、僧となつては須らく巖石に居すべし、國士羅中大宜しからず」と。

●柳標横に擔云々、趙州の法嗣、嚴陽尊者の頌なり。



未だ悟らすんば妄りに般若を談せじ」と。予其の詞の至當痛的なるを聽いて、覺えず涕下つて、嘉嘆すること之を久しうす、仍つて筆を迅せて記取し、系るに二十八言を以て贈ると云ふ。

西山亮去つて唯だ幽谷、南嶽の瓊亡じて空しく白雲、清標高格を追慕するもの、又巖下に来つて獨り君を尋ねん。

康安辛丑に、余老を江の飯高山下に投ず、時に霜林の果侍者、京師より來り、同じく枯淡を守つて春を経て冬に抵る、余他の天資絶倫にして聰明のために惑されず、攻子兀々として斯の道斯れ勤めて、敢て斯須少間も、虚しく捨つる底の工夫なきことを愛す、一夜爐を擁して閑談の次で、語けて曰く、「吾、衆に陪するの日、古書を嗜好し、幾んど寢を廢し餐を忘す、忽ちに自ら省することあり、學解機智は、動もすれば、即ち無明を長じ、我見を増し、殆んど聲利を求むるの基本となる、寧ろ生死の根株に非ざらんや。如かず、元字脚を以て心上に留めず、甘じて百不會不知底の漢となつて、歩を退けて己に就き、悟を以て期と爲さんに

①南北朝時代は、丁度漢籍の後漢時代と同じで、禪宗の全盛期なり、而も此嘆あり、時に感ずる杜老は花にも涙を瀼ぐとは、是れなり。

②西山亮南嶽の瓊、前に出たり。

③霜林、下に説あり。

④斯須はしばらくなり。

⑤元字脚古くより、用ふる語なれども、明解なし、趙州和尚も、若し一箇の元字脚を記して心におかじ、永劫に野狐精とならん、一休和尚も費衣胸におく元字脚、是非人我一生喧びすしと頌せらる、蓋し元の字の脚は凡にして、机なり、妄なり、物を載するものなり、文字の葛藤を云ふ。

⑥百不會百不知、眞言の慈雲尊者も、斯れが氣に入らんと見え、百不知童子と號せられた。

⑦溪に菜葉を流す、潭州の龍山和尚也。(會元三)

は、亦思ふ、古人大法既に明かなるの後すら、尙ほ物迹の累を逃れ、或は一たび西山に入つて、永く復た返らず、或は溪に菜葉を流して、始めて人の爲めに知られ、或は世事悠々たり、山丘に如かず、藤蘿の下に臥して塊石を、頭に枕す等の句あり、吾が情何人ぞや、只麼に首を聚めて打・閑して、徒に衰葛を閑せんや、今より後、誓つて復た衆に入らず、隱哲の芳躅を追躋して、此の生を斷送せんのみ」と、余益、其の機見高妙にして、實に碌々たる餘子の遠ぶところにあらざるを嘆す、偈を爲つて以て贈ると云ふ。

我れ江山深き處を擇んで住す、溪頭の石徑雲の臻るを看る、稚龍雛鳳は英靈の子、殘月の長庚は衰暮の身、共に茆茨を掩うて庭雪を積み、旋や檜柎を焼いて室春を生ず、言ふことなかれ法社今岑寂と、異日林丘自ら人あらん。

鏡庵主に贈る。

即心即佛太だ郎當、非心非佛絶商量、芒鞋踏破す關山の雪、處々の寒

①世事悠々、南嶽圓瑛和尚の歌なり。

②打閑は、無駄言ふて日を送るなり、衰葛を閑すとは、年を過すなり、夏葛冬衰。

③隱哲、西山亮、龍山和尚、彌禪師等、斯くして此一生涯を終へんと。

④長庚は運籌の身に喩ふ、金星に兩名あり、朝は日に先つて出で、晩は日に後れて入る、朝の時は啓明と呼び、晩の時は長庚と名く、英靈の子は果侍者、衰暮の身は寂室禪師。

⑤檜柎はそだ、木頭と訓す。  
⑥郎當は俗語の零落の意、玄宗、藤山の亂に蜀に幸す、黃幡綽に問うて曰く、「車上の鈴聲頗る人の言語に似たり」と。對へて曰く、「三郎郎當、三郎郎當と言ふに似たり」と。黃幡綽は滑稽の士なり、玄宗の弄臣。郎當又老例にも、潦倒に

梅鼻を撲つて香し。

靈叟和尚の韻に和す。

丘嶽の襟懷 氷雪の面、唐流は世に滿ちて斯の賢少なり、憐むべし虚しく光陰を度り了ることを、高標を見ざること又十年。

芝巖書記、累に山中に枉顧せらる、道義を忘れざるを見るに足れり、況んや亦惠むに佳什を以てするをや、唱歎已ます、其の續貂を愧ぢて、敢て韻尾を攀ぢず、別に小偈を寫して奉酬す、切に人に出し示すなかれ、只だ前頭に將ち去つて、窓に糊し、或は是れ韻を覆はゞ、方に老拙が用心の勤めたるを知らん。

年老身窮して人に棄てらる、吾兄何事ぞ庵居を問ふ、行に臨んで語を求む説くべきなし、強ひて拳頭を擧て、贈車に當つ。

牧書記を送る。

夫子文章の印を掃除して、如來藏裡の珠を擊碎す、一策の春風阿刺々、此の行那ぞ敢て脩途に涉らん。

水車。

し作る。

韻部は佳篇に次ぐに悪詩を以てする也、韻足らず狗尾續くは、西晉時代の故事なり。

韻を覆ふは、酒がめのめばりなり。

夫子の文章、論語公冶長篇に出づ、學問も修行も、擊碎す焉。

阿刺々、方語に急速也。

奔流光裡に機關立す、便ち曹溪の大法輪を轉す、器々相傳へて異味なし、群生一洗す 渴心の塵。

清居軒。

青山一抹紅塵を隔つ、蘿月松風能く隣を卜す、機境都來高く坐斷す、寥寥として見ず門に到るの人。

成親の墓。

忠を含んで命を殞す最も憐むに堪へたり、恨を蒼苔に掩ふ二百年、無事來ることを休めよ 平氏の客、恐らくは泉下永宵の眠を驚かさん。

中秋偶作。

中庭人無くして月自ら明かなり、索々たる金風 衣衾に入る、旋落英の地に盈ちて香しきを拾ふ。冥鴻聲は遠し情何ぞ極まらん。

月は中秋に到つて最も 利害、人をして特地に閑情を惱ましむ、一年三百六十夜、輪卻す今宵半刻の明に。

山居。

名利を求めず貧を憂へず、隱處山深うして俗塵に遠さかる、歲晚天寒うして誰れか是れ友、梅花月を帯びて一枝新なり。

器々相傳、是れば、田舎にて言ふ、「銀鬼の喉」と云ふ水車ならん。

渴心塵は、枯渴の病と云ふが如き。

清居軒、龍峰庵禮の間の額也。(舊注)

平氏の客、肥馬輕裘せる、平家のきんぢら也。

種、古得の切、衣前の襟也(舊注)、旋拾は拾ひまはる也、落英は倒れたる菊の花、落の字、既多し。

利害、相反する字を、偏用して、利の字を取りしものならん、漢籍に此例多し、治亂を亂ると用ふるが如し、利は易の乾は大いに亨る、貞に利しの利の義にて、中秋月最も宜

丙午歳の試筆。

山中の氣象即辰新なり、<sup>①</sup>盡く是れ明心見性の人、添へ得たり満空に瑞雲を飄すを、梅は開く五葉一花の春。

一毫頭上に春容を發す、徧界高然として和氣濃かなり、管するなかれ山僧が頭已に白きことを、曉來の雪は萬年の松を覆ふ。

金剛寺に宿す。

隣寺屢來遊す、通宵談未だ了せず、山村更鼓なし、窓白うして天の曉くるを覺ゆ。

耕月。

鐵牛を起ひ起して頻に鞭を著く、山前何れの處か是れ閑田、一犁雨は過ぐ千峰の外、玉兔輪を推して曉天を下る。<sup>②</sup>

無參。

當處に非を知つて放下して休す、何の箇の事の馳求すべきかあらん、南方丫角の小童子、空しく百城の煙水に向つて遊ぶ。

江月。

渺茫たる楚水空を拍つて流る、潮は錢塘を滅して夜收まらず、玉鑑光は寒し萬波の底、依前たり天上一輪の秋。

通巖。

塵世蹤を逃れて、秦を避くるが如し、碧松崖下に孤貧を寄す、寥々として鳥の花を含んで落すなし、許さず空生の來つて隣を卜するを。<sup>③</sup>

竹隱。

貞節と虚心とを憐むが爲めに、特地に菊を移して更に深きに入る、片甌を擲つて軽く一擊するを休めよ、閑聲恐らくは是れ叢林に落ちん。

竹堂。

憶ふ昔香嚴の一擊し來ることを、六門長へに遠峯に對して開く、茫々として葉を摘み枝を尋ぬる底、多くは是れ空しく閬外より回る。

孤雲。

一片飄すこと無うして自在に飛ぶ、卷舒開合更に何にか依らん、笑ふ他の多くは是れ龍に従つて去ることを、獨り舊山の深き處に向つて歸る。

雪樵。

しと云ふ意。

①貞治五年、和尚七十七歳。

②盡く是れ明心見性の人、新年の御慶千里同風、明心見性の人とは不盡の妙味あり。

③金剛寺、蒲生郡日野の金剛寺、絶海中津の寺也。(舊註)

④號頌合計壹百一首。

⑤上の二句は耕を頌し、下の二句は月を頌す。

⑥二句參の字を反説す、丫角は稚兒まげ也、丫角の小童子は善財を指す。

⑦華嚴會上に、善財童子、一百十城を歴て、五十三の善知識に參じて、無上菩提を得こと、宋の佛國禪師五十三頌を賦して之を勸す、文殊指南圖贊是也、續藏中に收む。

①上二句は江、下二句は江月。秦を避く云々、武陵桃源の人は、皆秦の無道を避くるの人也、(陶潛の桃花源記)。

②止二句は通巖、下二句は興也。空生、須菩提也、岩中に燕坐するとき、諸天花を雨らし贊嘆す、嚧賣之を拈じて「空生巖畔花狼藉」と頌せらる、今通巖には、其種な羅々しき男は寄せ付けぬと。

③第二句隱。

④片甌云々、香嚴擊竹を隱ふ也、閑聲云々の句、冷俊なり。

⑤六門、六根門境に對して開く、即堂の字。

⑥一片と云ひ、獨りと云ふ、是れ孤の字。

風空花を攪いて片々飛ぶ、<sup>①</sup>老盧斧を提げて柴扉を出づ、自ら知る徹骨寒來つて重きことを、無根樹子を擔取して歸る。

要翁。

三玄を把つて排列し去ることを休めよ、寧ろ至徳を以て家風に比せんや、是れ佗親切爲人の處、老いんたり矣西を指して還つて東となす。

別宗。

月を標す指頭邊を離ると雖も、是れ拈花微笑の禪にはあらず、聞くならく泥牛木馬に參じて、迦文の法派更に流傳すと。

悟山。

<sup>②</sup>癡膺の物を除卻してより、地を抜く高風萬仞寒し、一點の迷雲飛び到らず、峰頭夜々月團々。

慧海。

一點の靈知定によつて發す、無邊の香水衆流を納る、<sup>③</sup>泥牛闖つて洪波の裡に入り、高く吼ゆ珊瑚明月の秋。

堪叟。

面上の唾痕は雨點の如く、耳邊の惡語は雷轟に似たり、長年一種平懐し去る、添へ得たり眉毛の霜幾莖ぞ。

月翁。

<sup>④</sup>廣寒宮殿の高に坐斷して、天風鬢を吹いて半は霜毛、光萬象を呑んで邊表なし、炯々たる雙眸老いて益々豪なり。

柏翁。

千年の貞操松根に<sup>⑤</sup>伴ふ、蒼老の勢は龍の屈蟠するが如し、今日叢林梁棟の漢、看來れば盡く是れ我が兒孫。

本閑。

<sup>⑥</sup>深く萬法を窮めて靈源に徹す、豈末流と日と同じうして論せんや、物外寥々として常に獨坐す、任他地覆ひ復た天翻るを。

敬庵。

動靜常に居す慎肅の中、何人か這の家風を仰がざらんや、低頭獨坐す茹簷の下、百鳥蹤を潛めて春晝空し。

雲叟。

①老盧、六祖俗姓は盧氏、家貧にして樵採以て給す、宋の朱文公は破佛家であつたが、晩年に目を病んで盲となり、六祖の法寶壇經を聞き、嘆じて曰く、「六祖は眞の聖人なり」と。  
②第一句は悟、第二句は山。  
③香水は海の名、華嚴經に華藏界中に大蓮華あり、其蓮華の中に香水海あり。  
④泥牛云々、洞山と雲師伯と、

俱に、龍山和尚を問ふ、和尚曰く、「兩箇の泥牛闖うて海に入る、眞に今に至るまで消息を絶す」と。  
⑤一種平懐、信心銘に出づ、「一種とは一粒種なり、平懐は坦蕩々と同じ、動靜寒温是非善惡のでこぼこの混した處を一種平懐と云ふ。  
⑥第二句翁の字。  
⑦邊表、邊は中邊の邊、表は表裡の表、儒教には邊幅の語あり。  
⑧松根に伴ふ、孔子曰く、「松柏の後凋を知る。是れ松の伴侶なり。  
⑨如何なるか、是れ祖師西來意、趙州曰く、「庭前柏樹子、」後來の兒孫、葉を摘み芽を摘み、天下を覆障す。  
⑩上二句本、下二句閑。  
⑪敬庵、是れは宋儒の學に淵源す、寂室和尚なども、既に宋學